R E H K

Revista de Estudios Hispánicos de Kioto

—創設 25 周年記念　第 16 号—

《論文》

16 世紀スペインにおける人間観に関する一考察
　－ペレス・デ・オリーバの『人間の尊厳についての対話』を中心に－
　……安藤　真次郎 (1)
ペドロ・シモン・アブリルの教育思想と俗語擁護論
　－フェリーペ 2 世宛書簡を中心として－
　……岡本　信照 (21)
メキシコ第二帝政再考
　－皇帝マキシミリアンと皇后カルロッタの往復書簡を中心として－
　……立岩　礼子 (45)
スペイン語統語論における「内心構造／外心構造」概念の発展
　－「単心構造／複心構造／二心構造」の提案－
　……仲井　邦佳 (69)
ドレイク世界周航における巨人表象に関する一考察
　……長尾　直洋 (97)
Un estudio contrastivo de los verbos *ser / estar* en español e *izan / egon* en euskera ……二宗　美紀 (117)
El cambio de F-> *h-* en castellano: la evolución fonética y el sustrato del vasco-íbero……三島　庸平 (139)
ロルカの死と日本における作品解釈
　……森　直香 (167)

《付録》

大会プログラム一覧　(1992 年－2016 年) …… (181)

2016 年
京都イスパニア学研究会

16世紀スペインにおける人間観に関する一考察[1]
-ペレス・デ・オリーバの『人間の尊厳についての対話』を中心に-

安藤真次郎

はじめに

16世紀前半のスペインを代表する人文主義者の一人フェルナン・ペレス・デ・オリーバ Fernán Pérez de Oliva（1494?-1531）の『人間の尊厳についての対話』*Diálogo de la dignidad del hombre*（1531以前）は、フアン・ルイス・ビーベスの『人間の物語』*Fabula de homine*（1518）と並び、当時のスペイン人によって書かれたルネサンス的人間論の代表的なものの一つである。

これまでの先行研究[2]によれば、この作品の大きな特徴は、「人間の尊厳」というテーマを、「対話」という形式でドラマ化し、カスティーリャ語という「俗語」を使って著したことが挙げられる。

「人間の尊厳」をテーマとする作品は、メディチ家のもとで繁栄したフィレンツェの市民生活の隆盛を経て、人間の自由意志を重視する視点から15世紀半ば以降イタリア人人文主義者によって著されるようになった。代表的な作品として、ジャンノッツォ・マネッティの『人

---

[1] 本稿は、平成28年度JSPS科学研究費補助金（基盤研究C「16世紀スペインにおける人文主義教育思想の展開と実践」課題番号 15K02089）による成果の一部である。

[2] 『人間の尊厳についての対話』に関する先行研究としては、まずフランシスコ・リコの『人間の小世界』*El pequeño mundo del hombre*（1970; Nueva edición 2005）が挙げられる。またホセ・ルイス・アベリャンは1967年にこの作品を出版し、『スペイン思想批判史』（1979; 2ªed. 1986）の中で同作品の思想史上における意義について詳細に分析している。マリア・ルイサ・セロン・プガはこの作品を1982年（Editora Nacional社）、1995年（Cátedra社）、2010年（Almuzara社）の三度出版し、その序論において彼の生涯と著作を詳細に論述している。これは現時点におけるペレス・デ・オリーバに関する最も総合的な研究となっている。また2003年に発行された文芸誌『インスラ』*Ínsula* 674号では、「ルネサンスにおける人間の悲惨と尊厳」というタイトルのもと、このテーマに関する研究が多く発表された。ペレス・デ・オリーバについては、マリア・ホセ・ベガが「ルネサンスにおける人間の悲惨と尊厳－ペトラルカからペレス・デ・オリーバへ－」を、コンソラシオン・バランダが「ペレス・デ・オリーバからセルバンテス・デ・サラサールへ－敬意と背信－」を発表している。

間の尊厳と優越について』*De dignitate et excellentia hominis*（1452）や、ジョバンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラの『人間の尊厳について』*De hominis dignitate*（1486）などが挙げられる[3]。

「対話」という形式での学術的議論は、古代ギリシア・ローマの伝統に基づくもので、キケローの『トゥスクルム荘対談集』や『義務について』等に範が求められる。一方で「対話」様式の文学は、アルフォンソ・デ・バルデスの『ローマで起こった出来事に関する対話』（1529）や『メルクリオとカロンの対話』（1529）、フアン・デ・バルデスの『言語に関する対話』（1535）をはじめ、16世紀スペインでは盛んに見られたものである。ペレス・デ・オリーバは、こうした「対話」という形式を用いて、ルネサンス人文主義の中心的テーマの一つである「人間の尊厳」をドラマ化しているのである[4]。

「人間の尊厳」をテーマとした作品は、当時ラテン語で書かれたものばかりであったが、ペレス・デ・オリーバはカスティーリャ語という俗語で著した。アベリャンが指摘しているように、「人間の尊厳」という哲学的テーマがカスティーリャ語で思索され著されたことは16世紀前半において画期的なことであった[5]。

以上のことから、この作品は古代の伝統とルネサンスという新しい時代の特徴を兼ね備えた作品と言えよう。

本稿の主たる目的は、このペレス・デ・オリーバの『人間の尊厳についての対話』を道徳哲学的な視点から分析し、そこに見られる人間観を明らかにすることである。その人間観にピーコの『人間の尊厳に

---

[3] これらの人間の尊厳をテーマとする作品は、中世における「人間の悲惨」miseria hominisと「世の蔑視」contemptus mundiをテーマとした著作に源泉があると考えられる。助祭ロタリウス（後の教皇インノケンティウス3世）の『世の蔑視、あるいは人間の悲惨な境遇について』*De Contemptu Mundi Sive de Miseria Conditionis Humanae*（1195）がその代表作である。中世の「人間の悲惨」をテーマとした作品とルネサンス期の「人間の尊厳」をテーマとした作品の結びつきについては、拙論「ルイス・ビーベスの『人間の物語』に見られる人間観について－ピーコの『人間の尊厳について』との比較を通して－」『スペイン現代史』第23号（2015），pp. 105-106を参照。

[4] ベガは、この作品は、「人間の悲惨と尊厳」に関するテーマを俗語で初めてドラマ化したものであるとしている。Vega (2003), p. 9.

[5] アベリャンは、この作品のスペイン思想史における意義として、「人間の尊厳」に関するテーマを教養語であるラテン語ではなく俗語であるカスティーリャ語で執筆したことを挙げている。Abellán (1986), p. 156.

ついて』の影響が見られることは既にリコやアベリャンにより指摘されているが、当時のスペイン知識人層で強く支持されたエラスムス主義による影響も受けていると考えられよう。本稿ではこうした点からもこの作品を分析し、16世紀、特に16世紀前半のスペインにおける人間観の一面を考察したい。

1. フェルナン・ペレス・デ・オリーバについて

1.1. 生涯

1494年頃にコルドバの由緒ある家系に生まれた。父親は医者であり地理学者であった。1508年から1511年までサラマンカ大学で学び、1511年から1512年まで設立間もないアルカラ大学で学んでいる。さらに1512年から1514年までパリ大学で学び、この間、1514年にbachillerの学位を得ている。パリでは、著名な人文主義者でのちにトレド枢機卿となるフアン・マルティネス・シリセオに学んでいる。1514年から1519年まではおじとともにローマに滞在し、メディチ家出身の教皇レオ10世の保護を受けた。1519年から1522年頃には再びパリに滞在し、1520年にlicenciado、1522年にmaestroの学位を得ている。またこの時期、教皇ハドリアヌス6世から奨学金を受けている。

晩年にあたる1526年から1531年までは、サラマンカ大学で過ごした。はじめは学生として、その後は同大学で教授として自然哲学、道徳哲学、神学を教え、1529年には同大学学長に就任した。1530年の道徳哲学の教授採用試験では、恩師のアロンソ・デ・コルドバに敗れたが、フォンセカ大司教の援助で、その二日後に道徳神学の教授の座を得ている。サラマンカでは大学図書館の改築やフォンセカ学寮の建築にも携わっている。

1531年8月3日にメディーナ・デル・カンポで没したが、このとき、カール5世の息子であるフェリペ皇太子の家庭教師の職を得ていた。

1.2. 作品

ペレス・デ・オリーバの作品[6]の多くは未完成や断片的なものが多いが、彼の甥にあたりアルカラ大学でレトリック教授も務めたアンブロシオ・デ・モラーレスが1586年に重要と思われるものを出版した。しかし、その他の新大陸[7]や科学に関するもの、小論などの作品は20世紀になるまで未刊のままであった。

彼の作品は、文学・教育に関するものだけでなく、幾何学、宇宙形状誌学、物理学、算術、建築学などに関する科学的なものも多く、近年では、科学者としての面を高く評価する動きも見られる[8]。またもう一つの特徴は、文学・教育的作品はカスティーリャ語で、科学的な作品はラテン語で執筆していることである。

このように、ペレス・デ・オリーバはサラマンカ、アルカラ、パリ、ローマという当時学問の最前線にあった都市で学ぶとともに、当時の著名な人文主義者やローマ教皇、カール5世の宮廷とも近い関係にあった。また文学・教育的作品から科学的な作品まで執筆の対象分野も広く、さらにラテン語のみならず俗語のカスティーリャ語を使って執筆している。以上のことから、ペレス・デ・オリーバは16世紀前半の知識人世界の第一線で活躍した、時代を象徴するルネサンス人

---

[6] 主な作品として、以下のものを挙げることが出来る。哲学的作品としては、本稿の考察の対象である『人間の尊厳についての対話』。論述としては『グアダルキビル川の航海についての論述』*Razonamiento sobre la navegación por el Guadalquivir*(1524)、及びサラマンカ大学の教授採用試験のために著された『道徳哲学教授採用試験のための論述』*Razonamiento hecho en la oposición a la cátedra de philosophía moral*(1529)。古典演劇に関する作品としては、『アムピトリュオンの喜劇』*La Muestra de la Lengua Castellana en el nacimiento de Hércules* o *Comedia de Anfitrión*(1525)、『アガメムノンの復讐』*La venganza de Agamenón*(1528)、『悲しきヘカベー』*Hécuba triste*(1528)。

[7] 新大陸に関する作品としては、『インディアスの歴史』*Historia de la invención de las Yndias*(1965年にBogotáで初出版)と『ヌエバ・エスパーニャの征服』*Conquista de la Nueva España*(未完成)である。

[8] *Cosmografía nueva*, ed. C. Flórez Miguel, P. García Castillo, J. L. Fuertes Herreros y L. Sandoval Ramón, Salamanca, Diputación-Universidad, 1985を参照。

文主義者の一人ということが出来よう[9]。

2.『人間の尊厳をめぐる対話』について

2.1. 出版

この作品は、ペレス・デ・オリーバの生前に出版されることはなく、また正確な執筆時期もはっきりしていない。後にメキシコに渡り、メキシコ大学の学長を二度務めた人文主義者フランシスコ・セルバンテス・デ・サラサールにより1546年に初めて出版され、その後、前章で述べた通り、甥のアンブロシオ・デ・モラーレスにより1586年に出版されている。しかしこの『人間の尊厳についての対話』は、1632年にキローガ枢機卿の禁書目録に挙げられ、1789年まで禁書扱いにされた。

1546年版[10]は、アルカラで出版された。この版の特徴は、編者セルバンテス・デ・サラサールにより、ペレス・デ・オリーバのオリジナル版よりも長い分量の加筆がなされている点である。またこの版には、ルイス・メシーアの『怠惰と労働の寓話』*Apólogo de la ociosidad y el trabajo*とルイス・ビーベスの『英知への導き』*Introducción y camino para la sabiduría*も含まれていた。

1586年版[11]はサラマンカで出版の準備が始まり、コルドバで出版されている。この版は、ペレス・デ・オリーバのオリジナル版に基づいている。ペレス・デ・オリーバの他の哲学作品や劇作品とともに、

---

9 クリストバル・ビリャロンの *El Scholástico*（未出版）の主人公として扱われた点も、ペレス・デ・オリーバが当時を代表する人文主義者であったことを示していよう。

10 セロン・プガによれば、セルバンテス・デ・サラサールの版に基づいて、以下の版が出版されている。1563年（Venecia）: Alfonso de Ulloaが自分の作品として出版し、1564年にはさらに自分の第2部を付け加えて出版した。これは1642年に再版されている。1583年（París）: Jerome D'AvostによるUlloaの第1版に基づく仏語版。1772年（Madrid）: Sancha版。Cerrón Puga (1995), pp. 43-54を参照。

11 セロン・プガによれば、モラーレス版に基づいて、以下の通り出版されている。1787年（Madrid）: Benito Cano版。1873年（Madrid）: Rivadenoyra版（B.A.E.）。年代不明（Madrid）: Rivadenoyra版（C.I.A.P.）。1943年（Buenos Aires）: Rivadenoyra版（Pandora）。1967年（Barcelona）: José Luis Abellán版（Cultura Popular）。1980年（Madrid）: Ana M. Arancón版（Editora Nacional）。1982年（Madrid）: María Luisa Cerrón Puga版（Editora Nacional）。Cerrón Puga (1995), pp. 43-54を参照。

アンブロシオ・デ・モラーレス自身の作品も含まれている。今日の『人間の尊厳についての対話』の版はすべてこの 1586 年版に基づいて出版されている。

2.2. 登場人物とあらすじ

登場人物は、二人の青年アウレリオとアントニオ、そして審判役の賢者の老人ディナルコを加えた計三名である。アウレリオとアントニオの論争のテーマは人間についてである。アウレリオは悲観主義者であり、エピクロス的な「人間の悲惨」を述べる。それに対して、アントニオは楽観主義者で、キリスト教的ストア的な「人間の尊厳」を述べる。二人の主張が終わった後、ディナルコは、アウレリオの鋭い観察眼を讃えつつも、アントニオに軍配を挙げる。

3. 『人間の尊厳についての対話』に見られる人間観について

3.1. 論争の始まり

アウレリオは、アントニオを追って、自然豊かな郊外にやってくる。そしてアントニオに、なぜここを頻繁に訪れるのかと問う。アントニオは「孤独 (soledad)」を求めてと答える。そこから、なぜ人間は「孤独」を愛するのかという議論に発展する。

> Aurelio: yo te ruego que me declares cuál es la causa, a tu parescer, por que los hombres aman la soledad y tanto más cuanto son más sabios.
> (アウレリオ:なぜ人は、とりわけ賢人は、孤独を愛するのか。その理由について、君の見解を私に教えて欲しい。) [12] (括弧内拙訳)

アントニオにとって孤独は人間関係において動揺した私たちの心を落ち着かせ、冷静さを取り戻すに必要なものであり、さらに英知へと導いてくれるものである。

---

[12] Pérez de Oliva, *Diálogo de la dignidad del hombre*, ed. María Luisa Cerrón Puga, Madrid, Cátedra, 1995, p. 116.(以下、Pérez de Oliva, *Diálogo* という略称を使用する。)

Antonio: Porque cuando a ella venimos alterados de las conversaciones de los hombres donde nos encendimos en vanas voluntades, o perdimos el tino de la razón, ella nos sosiega el pecho y nos abre las puertas de la sabitudía...
（アントニオ：私たちは人との会話において、むなしい願望にのぼせ上がったり、理性の分別を失ったりする。人との会話に翻弄された後、一人になると、孤独は私たちを胸で休ませ、私たちに英知の扉を開けてくれる。）[13]（括弧内拙訳）

それに対して、アウレリオにとって孤独は人から逃れるための待避所である。

Aurelio: El aborrescimiento que cada hombre tiene al género humano por el cual somos inclinados a apartarnos unos de otros.
（アウレリオ：人は人に対してうんざりしている。そのために私たちはお互いに離れようとするのである。）[14]（括弧内拙訳）

その後二人は泉に向かう。泉には賢者の老人ディナルコが彼を慕う仲間と一緒にいる。二人はディナルコに議論の審判役を求める。

Antonio: Sobre el hombre es nuestra contienda, que Aurelio dize ser cosa vana y miserable y yo soy venido a defenderlo; y querémoste rogar tú seas nuestro juez, a quien todos con mucha razón acatan por sabio principal.
（アントニオ：私たちの論争のテーマは人間についてである。アウレリオは人間はむなしく惨めな存在とみなすが、私は人間を弁護する立場である。そこで皆が正当に賢人であるとみなしているあなたに私たちの審判役をしていただきたい。）[15]（括

[13] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 116.
[14] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 117.
[15] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 119.

弧内拙訳）

それを受けてディナルコは古代の弁論方式に則り、告発をしたアウレリオが先に述べ、擁護をするアントニオが次に述べるように指示をして、二人の主張が始まる。

3.2. アウレリオの主張

アウレリオはまず人間の理解力の弱さを嘆く。しかし、無知であることで人間は自分の悲惨さを忘れて、この短い人生をやり過ごすことができるとみなしている[16]。

> Suelen quexarse los hombres de la flanqueza de su entendimiento, por la cual no pueden comprehender las cosas como son en la verdad;
> （人間は自分の理解力の弱さを嘆くのが常である。理解力が弱いことで人間は物事のありのままの本当の姿を理解することができない。）[17]（括弧内拙訳）

> (...) la ignorancia de las cosas humanas, con la cual bivimos los pocos días que duramos como quien en sueño pasa el tiempo de su dolor, que si tal conoscimiento de nuestras cosas tuviésemos cómo ellas son malas, con mayor voluntad desearíamos la muerte que amamos la vida.
> （人間の事柄について無知であるということ、それだからこそ私たちは、自分の痛みの時を夢の中で過ごす者のように、短い人生を過ごすのである。もし私たちの事柄が悪いことだと知っていたら、生よりも死を強く望んでいたであろうから。）[18]（括弧内拙訳）

---

[16] セロン・プガは、ここにプリニウスやルクレーティウスの影響が見られると指摘している。Cerrón Puga (1995), p. 121 を参照。
[17] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 121.
[18] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 121.

そして理解力はただ単に、人間の悲惨さを見るために与えられたと嘆く。

> Éste, si bien miráis, aunque es alabado y suele por él ser ensalçado el hombre, más nos fue dado para veer nuestras miserias que para ayudarnos contra ellas.
> （理解力は讃えられ、また理解力により人間は高められた存在とされているのだが、理解力というものをよく観察したならば、私たちを悲惨から救い出してくれるのではなく、むしろその悲惨さを見るために与えられているのである。）[19]（括弧内拙訳）

アウレリオにとって、生来生き抜く能力を与えられている動物の方が人間よりもむしろましな存在である。人間は間違いやすく不確かな理解力で人生の教えを探すしかないのであるから。

> Mejor están los brutos animals proveídos de saber, pues saben desde que nascen lo que han menester sin error alguno: unos andan, otros buelan, otros nadan guiados por su instinto natural. (...) Sólo el hombre es el que ha de buscar la doctrina de su vida con entendimiento tan errado y tan incierto como ya avemos mostrado.
> （知を備えている野蛮な動物の方がましである。彼らは生まれたときから何の間違いもなくすべきことを知っているのである。生来の本能により、あるものは歩き、あるものは空を飛び、あるものは泳ぐのである。(...)これまで示してきた通り、人間だけが間違いやすく不確かな理解力をもって人生の教えを探さなければならないのである。）[20]（括弧内拙訳）

アウレリオはさらに意志の弱さを嘆く。意志は常に理性と自然的欲求の間で揺れ動き、理性は徳に従い困難な事柄をなすように促すが、自然的欲求は享楽的な方向へと誘惑するのである。そして理性は自然的

[19] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 128.
[20] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 129.

欲求よりも弱いのである。

> Está la voluntad, como bien sabéis, entre dos contrarios enemigos que siempre pelean por ganarla: éstos son la razón y el apetito natural. La razón, de una parte, llama la voluntad a que siga la virtud y le muestra a tomar fuerça y rigor para acometer cosas difíciles; y, de otra parte, el apetito natural con deleite la ablanda y la distrae.
> （あなた方がよく知っているように、いつもお互いが戦っている二つの相反するものの間に意志があるのである。それは理性と自然的欲求である。一方で理性は意志に徳に従うように呼びかけ、困難な事柄に立ち向かうために力と厳格さを持つように示している。もう一方では、自然的欲求が快楽をもって意志を弱め、気をそらせようとするのである。）[21]（括弧内拙訳）

> Principalmente que nuestros apetitos naturales nunca dexan de combatirnos, y la razón munchas vezes dexa de defendernos.
> （私たちの自然的欲求は、決して私たちと戦うのをやめない。そして理性は何度も私たちを守るのをやめる。）[22]（括弧内拙訳）

さらに記憶の弱さをシーシュポスの神話に例えて嘆く。

> los cuales me paresce que así hazen como de Sísifo dixeron los poetas: que cuantas vezes sube una piedra a la cumbre de un monte infernal, tantas vezes se le cae y torna al trabajo. (...) ¿qué descanso pensáis que tienen, peleando continuamente con el peso dellas, que tantas vezes se les cae de la memoria cuantas lo levantan con el entendimiento?

---

[21] Pérez de Oliva, *Diálogo*, pp. 130-131.
[22] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 131.

（詩人たちが言うシーシュポスのように私には思える。岩を地獄の山の頂に何度持ちあげても、何度も落ちころげ、同じ仕事をくり返す。(…) どんな休息があると考えるのか？常に岩の重みと戦いながら、何度も理解力をもって思い出そうとしても記憶から抜け落ちてゆく。）[23]（括弧内拙訳）

そして最後にアウレリオは、人生の短さとそのはかなさを嘆くとともに、死後の名声の虚しさについても嘆く。

Así andan los hombres, atónitos, errados, buscando su contentamiento donde no pueden hallarlo. Y entre tanto se les pasa el tiempo de la vida, y los lleva a la muerte con pasos acelerados, sin sentirlo.
（このように人間は驚き、間違え、見つけることのできない満足を探しながら歩むのである。そしてそうしているうちに人生は過ぎ去り、加速度のついた足取りで気づかないうちに死へと運ばれるのである。）[24]（括弧内拙訳）

¿Qué aprovecha a los huesos sepultados la gran fama de los hechos? ¿Dónde está el sentido? (...) Los cuerpos en la sepultura no son diferentes de las piedras que los cubren.
（埋葬された骨は、業績で得た大きな名声を享受できるのか？それのどこに意味があるのか？(...)墓場の中の肉体はそれを覆っている墓石となんら変わるところはない。）[25]（括弧内拙訳）

3.3. アントニオの主張

悲観的で厭世的な人生観を展開するアウレリオとは対照的に、アントニオは、キリスト教的視点から人間は神の似姿に作られた存在で、

[23] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 132.
[24] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 133.
[25] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 135.

神が創造した最も驚嘆すべきものとみなしている。

> me paresce que tengo delante los ojos la más admirable obra de cuantas Dios ha hecho.
> （目の前にあるのは、神がお造りになったもの中で最も驚嘆すべきものと私には思われる。）[26]（括弧内拙訳）

そして、マネッティやピーコと同じように、古代エジプトの神人ヘルメス・トリスメギストスの「人間は大いなる奇跡（gran milagro era el hombre）[27]」というフレーズを引用するとともに、人間はミクロコスモス[28]であると主張する。

> tiene ánima a Dios semejante, y cuerpo semejante al mundo; bive como planta, siente como bruto y entiende como ángel. Por lo cual bien dixeron los antiguos que es el hombre menor mundo cumplido de la perfección de todas las cosas.
> （人間の精神は神に似たもので、体は世界と似たものである。植物のように生き、野獣のように感じ、天使のように理解する。それゆえ、古代の人は、人間はすべてのものを完璧に体現した小さな世界であると適切に表現したのである。）[29]（括弧内拙訳）

続いてアントニオは、古代、町の創設者が自分の像を町の中心に置いたのと同様に、神はご自分が創造した世界に自分の似姿の人間を置いたと述べる。しかしそれは住人としてではなく、土地を追放された巡礼者としてであった。なぜなら人間にはすべてが与えられ望むものになれる自由があるので、たとえ堕落しても、理性の力により、神聖な世界へと高められうるからである。アントニオはここで人間の変幻自在さを強調している。

---

[26] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 138.
[27] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 138.
[28] リコはここにピーコの影響が見られることを指摘している。Rico (2005), pp. 112-113 を参照。
[29] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 142.

Porque como el hombre tiene en sí natural de todas las cosas, así tiene libertad de ser lo que quisiere: es como planta o piedra puesto en ocio; y si se da al deleite corporal es animal bruto; y si quisiere es ángel hecho para contemplar la cara del padre; (...) si le plazen las cosas viles y terrenas, con ellas se queda perdido para siempre y desamparado; mas si la razón lo ensalça a las cosas divinas, o al deseo dellas y cuidado de gozarlas, para él están guardados aquellos lugares del cielo que a ti, Aurelio, te parescen tan ilustres.

（なぜなら人間は自分自身の中にすべてのことの気質を有しているように、なりたいものになれる自由を有しているからである。娯楽に浸るならば植物か石のようになり、肉体的快楽に身をゆだねるならば野獣となり、神の御顔を見上げたいとするならば天使になるのである。(...) そしてもし悪くて地上的なものを好むなら、それとともに永遠に失われ、見捨てられるのである。しかし、もし理性が神的なものへと人間を高め、あるいは神的なものを望み、それを享受するようにしたならば、人間には、アウレリオ、君にとってあれほど名高いものであるところの天上にあの場所が確保されるのである。）[30]（括弧内拙訳）

またアントニオは、頭や顔、手などの身体の各部位について詳細に述べ、その機能を称賛する。そしてもし動物に与えられていて人間にないものがあるとすれば、それは人間がお互いに協力して生きていくためであると主張する。

Si bien consideras, hallarás que estas necesidades son las que ayuntan a los hombres a bivir en comunidad, (...) de aquí nascen las amistades de los hombres y suaves

[30] Pérez de Oliva, *Diálogo*, pp. 143-144.

conversaciones; de aquí viene que unos a otros se enseñan, y los cuidados de cada uno aprovechen para todos. (...) Así que lo que nos paresce falta de naturaleza, no es sino guía que nos lleva a hallar nuestra perfección.

（もしよく考えたらならば、これらの必要性はコミュニティーの中で生きていくように人間を結合させるためなのである。(...) ここから人間の友情が生まれ、優しい会話が生まれるのである。ここからお互いが教え合うことが生まれる。各人の注意が皆に恩恵を与える。(...) このように、私たちに生来欠けていると思われるものは、私たちに完成を見つけさせるためのガイドなのである。）[31]（括弧内拙訳）

さらにアウレリオにとって、理性よりも自然的欲求に傾く傾向の強い意志については、その揺れ幅は人間に選択の自由を与えるためであると述べる。

Así que esta incertidumbre en que Dios puso al hombre responde a la libertad del alma: unos quieren vestir lana, otros lienço, otros pieles; unos aman el pescado, otros la carne, otros las frutas. Quiso Dios cumplir la voluntad de todos haziéndolos en estado en que pudiesen escoger,

（それゆえ、神が人間に与えたこの不確かさは、魂の自由に呼応する。ある者は毛織物を着たがり、ある者は布を、ある者は革を着たがる。ある者は魚を愛し、ある者は肉を、ある者はフルーツを愛する。神はすべての者を選べる状態に置き、彼らの意思が果たされることを望む。）[32]（括弧内拙訳）

そして次にアントニオは、理解力の素晴らしさについて述べる。理解力により文字が生まれ、文字によってその場にいない人や過去の賢人のことばを聞くことができるとする。さらに文字により私たちは記憶しておくことができ、学問が生まれたのであると指摘する。そして理

[31] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 151.
[32] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 151.

解力にとって最も暗い闇は何かと言えば、意志の乱れである。つまり間違いを犯すのは理解力の欠如ではなく、私たちの悪徳によるものである。

> No es luego falta de entendimiento caer en errores, sino de nuestros vicios, que los ciegan y lo encuzian. Los cuales si evitamos, y seguimos la virtud, tenemos la vista clara y nunca erramos.
> （間違いを犯すのは理解力の欠如によるのではなく、理解力の目をくらませ汚す私たちの悪徳によるものである。私たちが悪徳を避け、徳（virtud）に従うならば、明るい視界を持ち、決して間違うことはないであろう。）[33]（括弧内拙訳）

そして英知（sabiduría）こそがすべてを統合する役割を持つと述べる。

> ¡Gran cosa es, Aurelio, la sabiduría, la cual nos muestra todo el mundo, y nos mete a lo secreto de las cosas, y nos lleva a veer a Dios, y nos da habla con Él y conversación, y nos muestra las sendas de la vida! Ésta nos da en el ánimo templança; ésta alumbra el entendimiento, concierta la voluntad, ordena al mundo, y muestra a cada uno el oficio de su estado; ésta es reina y señora de todas las virtudes; ésta enseña la justicia y tiempla la fortaleza; por ella reinan los reyes y los príncipes goviernan; y ella halló las leyes con que se rigen los hombres.
> （アウレリオよ、英知とは偉大なり。それは私たちに世界のすべてを見せてくれる。そして私たちを物事の秘密へと導いてくれる。また私たちに神を見させてくれる。そして神との会話を与えてくれる。そして人生の道を示してくれる。英知はわたしたちの精神に節度を与えてくれる。英知は理解に光を与え、意

[33] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 154.

志と協調させ、世界を整え、各々にその存在の役割を示してくれる。英知はすべての徳の女王であり、英知は正義を教え、要塞をやわらげる。英知によって王や君主は統治するのである。英知は法を発見し、それにより人間は統治されるのである。)[34]（括弧内拙訳）

そしてアントニオは最後に、死への恐れは人生の番人であると述べる。死を悪くとらえる者は、人生を悪いものと考える者にとってであり、よく生きた者にとっては褒美であり、素晴らしいあの世が待っているのである。

Así que los espantos de la muerte no son sino guardas de la vida, (...) No es la muerte mala sino para quien es mala la vida, que los que bien biven, en la muerte hallan el galardón, pues por ella pasan a la otra vida más excelente.
（だから死への怯えは人生の番人なのである。(...) 死が悪いのではなく、人生が悪い者にとって悪いのである。人生をよく生きた者は死に褒美を見出す。つまり死によって最も素晴らしいあの世へと行くことができるからである。)[35]（括弧内拙訳）

3.4. ディナルコの審判

ディナルコは、アウレリオの才能を称賛しつつ、アントニオに軍配をあげる。

Yo no tengo más que juzgar de tenerte, Antonio, por bien agradescido en conoscer y representar lo que Dios ha hecho por el hombre; y preciar también muncho tu ingenio, Aurelio, pues en causa tan manifiesta hallaste con tu agudeza tantas razones para defenderla.
（わたしはアントニオ、君に軍配を上げると言わざるを得ないだろう。神が人間に施してくれたことを知りそれを代弁するこ

[34] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 157.
[35] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 163.

とにおいてよく感謝しているということによって。またアウレリオ、君の才能の豊かさを称賛しよう。君の鋭い考察で自分の主張を弁護するための多くの理由を見出したことによって。）[36]（括弧内拙訳）

おわりに

これまで見てきた通り、アントニオによれば、人間はミクロコスモスであり、変幻自在の存在である。理性の力により、地上的なものにも、天上的なものにもなることができるのである。また同時にキリスト教的な立場に立ち、人間は神の似姿に創られた存在で、死後の栄光や恩寵による人間の救いもあると語るとともに、ストア的に道徳の価値、英知の価値を重視する。

このように人間の尊厳を人間のミクロコスモス性に見出す人間観はピーコに代表される15世紀イタリアの人間観と共通するものである。また人生の価値をその生き方に置くアントニオの考え方は、『エンキリディオン』に見られるエラスムス的人間観に共通するものである。ペレス・デ・オリーバが活躍した時代は、バタリョンに「エラスムスの侵略[37]」と評されたスペインにおけるエラスムス主義の拡大期（1516-1536）にあたる。そうした文化的思潮を鑑みれば、この作品がエラスムス主義にも影響を受けていると推察されよう。

一方のアウレリオの主張は、厭世的で悲観的である。人間は理解力が弱く、物事をそのまま見ることはできないと嘆き、動物の方がましだとする。また理性と自然的欲求の間で揺れ動く意志は自然的欲求の方に流されやすい。また人生は短く儚いもので、死後には宗教的救いもなく何もなくなると考えている。アウレリオは一度もDiosという単語を使っておらず、人間の悲惨な状況から神に救いを求めようとする中世の作品と比較しても、不信心な立場と言えよう。アウレリオのこうした考え方は、セロン・プガが指摘しているように、唯物論的快楽論的とされるエピクロスやルクレーティウスなどの古代哲学者に

[36] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 165.
[37] Bataillon (1991), p. 279.

基づいていると考えられる[38]。実際に作品の中でアントニオは、アウレリオはエピクロスを真似ているだけだと厳しく断罪している。

> Sólo Epicuro se quexava de la naturaleza humana, que le parecía desierta de bien y afligida de muchos males, alegando tales razones que me paresce que tú, Aurelio, lo has bien en ellas imitado.
> （ただエピクロスだけが人間の本性を嘆いている。彼にとって善は枯れ果て、多くの悪に苦しめられている。そのような理由を申し立て、アウレリオ、私の思うところでは、あなたはそれらを真似ているのである。）[39]（括弧内拙訳）

しかし、こうした唯物論的な人生観は、死後への恐怖から人間を解き放ち、さらにキリスト教的な呪縛から人間を解放するという面もあり、ルネサンス期の科学発展の礎にもなった。ペレス・デ・オリーバは、当時見られたこのような対極的な二つの人間観をこの作品の中で展開したと言えよう。

作者ペレス・デ・オリーバは、ディナルコを通して、アウレリオではなく、アントニオの主張を支持しているが、その支持は控え目である。それに対して、1546年版の編者セルバンテス・デ・サラサールは、テキストを大幅に付け足し、アントニオの勝利をより明確に示している。この点について、ブランダは、セルバンテス・デ・サラサールにとって、「人間の尊厳は議論の余地のあるテーマではなく、確かな真実なのである[40]」と述べている。しかし、セルバンテス・デ・サラサールと異なり、科学者の顔も併せ持ったペレス・デ・オリーバにとって、この二つの人間観のうちの一つを断定的に支持することにためらいがあったとは考えられないだろうか。

リコは、『人間の尊厳についての対話』の特徴は「様々な思想のつ

---

[38] Cerrón Puga (1995), p. 121を参照。エピクロスの宇宙論を解説したルクレーティウスの『事物の本質について』*De rerum natura*は、1417年にイタリア人人文主義者ポッジョ・ブラッチョリーニによりドイツの修道院で写本が発見され、ルネサンス期の原子論発展の原動力となった。
[39] Pérez de Oliva, *Diálogo*, p. 139.
[40] Branda (2003), p. 25.

ながりを整理し関係づけ統合する能力[41]」に見出されると述べているが、まさにペレス・デ・オリーバは、16 世紀前半のスペインにおける対極的な人間観を、対話というドラマ形式で見事に表していると言うことができよう。

参考文献

Abellán, José Luis; *El erasmismo español*, introducción de José Luis Gómez-Martínez, Madrid, Espasa Calpe, 1976; 2ª ed., 1982.

----------; *Historia crítica del pensamiento español, II. Edad de Oro*, Madrid, Espasa-Calpe, 1979; 2ª. ed., 1986.

Baranda, Consolación; "De Pérez de Oliva a Cervantes de Salazar: Homenaje y traición", en García de la Concha, V. (dir.), *Ínsula*, "Miseria y dignidad del hombre en el Renacimiento", nº 674 (2003), pp. 22-25.

Bataillon, Marcel; *Erasme et l'Espagne. Recherches sur l'histoire spirituelle de XVIe siècle,* París, Droz, 1937. (Trad. esp. de Antonio Alatorre, *Erasmo y España. Estudios sobre la historia espiritual del siglo XVI*, México, F.C.E., 1950; 2.ª ed. en español, corregida y aumentada, 1966; 4.ª reimpr., 1991.)

Cerrón Puga, María Luisa; "Introducción" en Pérez de Oliva, *Diálogo de la dignidad del hombre*, Madrid, Cátedra, 1995, pp. 9-108.

Pele, Antonio; *El discurso de la dignitas hominis en el humanismo del Renacimiento,* Madrid, Dykinson, 2012.

Pérez de Oliva, Fernán; *Diálogo de la dignidad del hombre*, María Luisa Cerrón Puga (ed.), Madrid, Cátedra, 1995.

Pico della Mirandola, Giovanni; *Oration on the Dignity of Man. A new translation and commentary*, edited by F. Borghesi, M.

[41] Rico (2005), p. 109.

Papio and M. Riva, New York, Cambride University Press, 2012.

Rico, Francisco; *El pequeño mundo del hombre. Varia fortuna de una idea en la cultura española*, Madrid, Castalia, 1970; Madrid, Alianza, 1986; Nueva edición, corregida y aumentada, Barcelona, Destino, 2005.

----------; *El sueño del humanismo. De Petrarca a Erasmo*, Madrid, Alianza, 1993; Nueva edición, corregida y aumentada, Barcelona, Destino, 2002.

----------; "Que sólo un punto parece", en García de la Concha, V. (dir.), *Ínsula*, nº 674 (2003), pp. 20-21.

Serés, Guillermo; "La *Fabula de Homine*, de Juan Luis Vives, en su tradición", en García de la Concha, V. (dir.), *Ínsula*, nº 674 (2003), pp. 15-18.

Vega, José María; "Miseria y dignidad del hombre en el Renacimiento: De Petrarca a Pérez de Oliva", en García de la Concha, V. (dir.), *Ínsula*, nº 674 (2003), pp. 6-9.

佐藤三夫『イタリア・ルネサンスにおける人間の尊厳』有信堂高文社、1981 年。

トリンカウス、チャールズ「ルネサンスにおける人間の尊厳」斎藤泰弘訳、『ルネサンスと人文主義』（叢書ヒストリー・オブ・アイディアス）平凡社、1987 年。

根占献一／伊藤博明他『イタリア・ルネサンスの霊魂論』三元社、1995 年。

ピコ・デッラ・ミランドラ、ジョヴァンニ『人間の尊厳について』大出哲／阿部包／伊藤博明訳、国分社、1985 年。

ピーコ・デッラ・ミランドラ「人間の尊厳と優越について」佐藤三夫訳、同訳編『ルネサンスの人間論 - 原典翻訳集』有信堂高文社、1984 年、pp. 63-108。

ペドロ・シモン・アブリルの教育思想と俗語擁護論
—フェリーペ2世宛書簡を中心として—

岡本　信照

0. はじめに

ペドロ・シモン・アブリル（Pedro Simón Abril）は16世紀後半の人文主義者である。中等教育機関である文法学校や大学において主にラテン語・ギリシア語など古典語教育に携わる一方、多数の翻訳を手がけながら生活していた。生没年については諸説がある。Breva-Claramonte（1994）は1530年生まれの1600年没としていたが、シモン・アブリルを題材とした最新のモノグラフを著したOlmos Gómez（2010）は1540年生まれの1595年没と明言している。いずれにせよ、この人文主義者が活躍した時期が16世紀の後半、すなわちフェリーペ2世の治世と重なることは確実である。

シモン・アブリルには定住地と呼べる場所が見当たらない。出身はアルバセテ近郊のアルカラス村であることは知られているものの、学歴については不明点が多い。最初はウエスカのある学校で文法と哲学を教えていたが、彼の講義内容がウエスカ大学に付与された特権に抵触することになり、破門を言い渡された。これを機に、ナバラ地方のトゥデラに移り、4年契約の教員職を市当局から得て、ラテン語、ギリシア語、論理学、形而上学などの教鞭を執った。契約が過ぎるとサラゴサへ赴き、サラゴサ大学の前身となるサラゴサ総合学院でラテン語と修辞学を教授している。サラゴサでは安定した生活を送ることができたにもかかわらず、1578年にこの地を離れ故郷のアルカラスで教授職を得た。しかし、1583年、再びサラゴサに戻ってラテン語とギリシア語を教え、さらに3年後、特別な理由もないままこの地を去った。晩年はアルカラに滞在していたこともあるようだが、その後の消息は判然としない。

シモン・アブリルが健筆家であったことは看過できない。先述のOlmos Gómez（2010）の巻末に掲載されたシモン・アブリルの著作リストによれば、古典語文法書、俗語の読み書き教科書、論理学関連著書、アリストテレス、キケロー、テレンティウスといった古代作家の俗語翻訳書など生前に出版された著作だけで35点を数える[1]。興味深いのは、子供の読み書き教科書として編纂した著作（*Instrucción para enseñar a los niños fácilmente el leer y escrivir*, 1590）のなかに自らがカスティーリャ語の文法書を独自に編纂していたことを暗示する箇所が見られることである[2]。現時点でそのような文法書の存在が確認されている訳ではないが、ネブリハ以来の同国人母語話者向けの俗語文法書がヒメネス・パトンやゴンサロ・コレアスに先立って16世紀の段階で存在していた可能性が否定できないことになる。

さて、本稿でシモン・アブリルについて最も着目したい点は、彼の言語教育思想である。1601年に「大学ではカスティーリャ語で説明文のついたネブリハのラテン文法の改良版を用いるべきこと」を規定した国王勅令が出された。これは17世紀初頭に大学において、中世以来ラテン語でラテン語を教える因習が打ち破られ、大学の教育言語（の一部）に俗語カスティーリャ語が入り込むのを当局が公認するという画期的な出来事であった。この動きを推進した中心人物こそシモン・アブリルに他ならなかった。もっとも、16世紀全般を通じて古典語教育を改革しようという動きは断続的に見られた。しかし、1589年、彼が時の国王フェリーペ2世に宛てた書状『学問とその教え方をいかに改革すべきかについての覚書』*Apuntamientos de cómo se deben reformar las doctrinas y la manera de enseñarlas*（以下、『覚書』）が決定的だったことは確かだ。この書簡は、必ずしもシモン・アブリル個人の教育理念ではない。そこに書かれた内容は大半の人文主義者の意向を代表するものと見なしてよい。したがって、この書簡を分析すれば、教育言語がラテン語からカスティーリャ語に移行する

[1] Olmos Gómez (2010), pp.478-482.

[2] "Los que la Teorica desto quisieren ver mas en particular, hallarla an en nuestra Gramatica de la lengua Castellana."（下線筆者）, Breva-Claramonte, ed., 1994, p.166.

プロセスが明らかとなり、16 世紀に展開されたスペイン人文主義教育の一側面を抽出することができるはずである。以上が本稿の目的とするところである。

1. シモン・アブリルの文法教育改革への提言

1-1 『覚書』に記されたラテン語教育に関する 4 つの誤謬

本稿の考察対象である『覚書』(スペイン国立図書館所蔵) は、国王フェリーペ 2 世に差し向けるべく 1589 年に作成されたものである。実を言うと、シモン・アブリルは 1586 年から 88 年にかけて国王顧問会議 (Consejo Real) にも教育言語の俗語化をはじめとする改革案を提出していた。しかしながら、その提案は議員に取り合ってもらうことは叶わず、一度は挫折を経験している。とはいえ、1577 年にテレンティウスの喜劇のカスティーリャ語訳をフェリーペ 2 世に献上するためエル・エスコリアル宮に赴いたことが示すように、シモン・アブリルはもともと国王から一定の信頼は得ていたと見られる。彼が国王への直訴状を書こうと思い立ったのは、こうしたことも背景にあるのだろう。

さて、シモン・アブリルの書状内容は、七自由学芸および医学・法学・神学の各学課における教育上の誤謬を指摘したうえで、それらの改善策を提起したものである。その中で第一に取り上げられているのが文法教育 (ここではラテン文法のこと) における 4 つの誤謬についてである。以下、当該の章である「文法における誤謬」(Errores en la Gramática) から問題となる箇所を抜粋してみよう (つづり字原文ママ ; 下線筆者)。

① ラテン文法以前にカスティーリャ語文法を教えていないこと。

El primer error en el enseñar la Gramatica es no enseñar primero a los niños la Gramatica de su propia lengua en las

escuelas, donde les enseñan leer y escreuir en ella, como se sabe, que lo hazianlos Latinos y Griegos en las suyas.[3]

② カスティーリャ語でラテン語を教えていないこと。

Segundo error en la Gramatica es enseñar a los niños las lenguas estrañas por Gramaticas escritas en las mismas lenguas, añadiendo trabajo a trabajo, y dificultad a dificultad.[4]

③ 細かな規則や例外事項の暗記を強要していること（=文法規則を実例に基づいて習得させようとしないこと）

Tercer error en la Gramatica es hazerles tomar de memoria a los niños las reglas de Gramatica, fatigandoles la memoria en cosas, que las han luego de oluidar, pudiendola exercitar con muy mayor fruto en decorar graues sentencias y dichos, que les siruan para toda la vida.[5]

④ いきなりカスティーリャ語をラテン語に翻訳させていること（=目標言語であるラテン語を母語に訳させるほうが先であるべきなのに、その順序が逆であること）。

Quarto error en la Gramatica es hazer traduzir a los niños cosas escritas de lengua vulgar en las estrañas, auiendose antes de hazer al contrario de las estrañas en la vulgar.[6]

つまり、シモン・アブリルは、子供にはまずカスティーリャ語文法を教え、次にカスティーリャ語でラテン文法の初歩を教え、ラテン語の細かな規則は実例と並行しながら自然に身につけさせ、ラテン語をカスティーリャ語に翻訳する訓練（いわゆる文法訳読法）を十分に行った後でラテン語作文の研修をさせるという順序を理想としていた

[3] Simón Abril (1589), *Apuntamientos...*, f.5-r.
[4] Ibid.
[5] Ibid., f.5-v.
[6] Ibid.

ことになる。ここで鍵となるのが「教育言語における俗語の介入」である。

シモン・アブリルは教育言語の俗語化という構想を、この書簡以前からしきりに打ち出していた。1569年以降、俗語によるラテン語文法を4点、1586年から87年にかけて俗語によるギリシア語文法を5点ほど出版している。また、1587年にはカスティーリャ語で書かれた最初の論理学書である『論理学と呼ばれる哲学第一部』*Primera parte de la filosofía llamada la Lógica*を出版し、そこでも古典語習得に先立つ俗語文法教育の便宜を主張している。その根拠が、「理解とは自然な順序に準拠すべきであるから」というものである（つづり字原文ママ；下線筆者）。

> En el enseñar pues un entendimiento devese de seguir la orden de la misma naturaleza, pues no es otra cosa el arte que una imitacion de la naturaleza. ... y la primera gramatica, que deve aprender, es la de su misma lengua: porque esta es la que aprenderá con facilidad, y sin error, y esta le servirá de guia para aprender la gramatica de las otras lenguas con facilidad ...[7]

シモン・アブリルの教育論について言語学的見地から体系的研究を行ったBreva-Claramonte(1991)は、この人文主義者を「スペインにおける初学者・中級者のための二言語教授法の代表」であると評した[8]。教育者であると同時に優れた翻訳家でもあったシモン・アブリルは、カスティーリャ語による古典語文法書を編纂したのみならず、『キケロー精選書簡集全2巻』*Los dos libros de las epístolas selectas* (1572)によって、キケロー書簡集の最初のカスティーリャ語を上梓している。Breva-Claramonteの見解によると、この翻訳には学生にとって「古典の注解」の実践をいかに行うべきかの模範例も含まれてい

[7] Simón Abril (1587), *Primera parte de la filosofía...*, f.2-v.
[8] Breva-Claramonte (1991), p.60.

た[9]。いずれにせよ、俗語を介しての古典語教育こそがこの人文主義者の目指す改革の方向であったことに疑いの余地はない。

それにしてもシモン・アブリルがこうした訴えを起こした歴史的背景は何だったのだろうか。この点を明らかにするためには当時のラテン語教育の実情を明確にする必要があろう。次節では、特にサラマンカ大学の規定の分析に基づいて検証してみたい。

1-2 16世紀におけるラテン語教育の実情

フェリーペ2世治下のサラマンカ大学の様子について、当時の大学規定（estatuto）を一次資料に用いて克明に描写したのが Alejo Montes（1998/ 2007）である。以下、この研究に基づいて、16世紀の大学の実情を関連する部分について概略を述べてみたい。

子供は6～7歳頃になると自国語の読み書き（ただし、文法ではない）が教えられるようになり、ここが初頭教育の始まりとなった。授業方法は旧態依然としたもので、無味乾燥な暗記や復唱が中心となり、覚えの良くない生徒には体罰が科せられることさえあったという。2～3年後に中等教育機関すなわち“escuela de gramática”または単に“colegio”と呼ばれた「文法学校」に進み、ラテン文法を教えられた。この文法学校はサラマンカ大学内部にも一つ設置されていた。教育機関の規定により教科書はネブリハ著のラテン文法が指定されており、現場の教員に教科書を選定する自由裁量は認められていなかった。それればかりか、教科書の理解を助けるための副教材を配布するといった教員独自の措置をとることさえ許されていなかった。真に難解な部分のみを例外的にロマンス語によって解説されることもあったようだが、文法説明自体を最初からラテン語で行うことが原則だった[10]。シモン・アブリルが問題提起した「第1の誤謬：ラテン文法以前の俗語文法の欠如」および「第2の誤謬：ロマンス語によるラテン文法解説の欠如」、さらには「第3の誤謬：細かな規則の暗記の強要」といっ

[9] Ibid.
[10] Alejo Montes (1998), p.150.

た一連の誤謬は、まさにこうした教育方法の実態を映し出したものに他ならなかった。

さて、文法講義は午前9時から始まり、その後実践練習へと連なった。午後1時からは動詞活用の復唱、3時頃からネブリハの教科書の講義が再開し、最後は教師が生徒にラテン語で質問をするというのがおおよそのルーティン・ワークだった。授業外でも教員は生徒にラテン語で話しかけることが義務づけられており、寮内で生徒同士が遊ぶ時でさえラテン語を話させたという。学長は年に3回監視の見回りを行い、規則に違反した教師や怠惰と見なされた教師には罰則が科せられた[11]。

土曜日になると、生徒たちにはオウィディウスやウェルギリウスといった古代作家の講読が待っていた。原文を読まされた後、教師から読んだ内容についての質疑が行われた。午後の時間帯も引き続き講読に充てられ、このときネブリハの文法を用いることもあればロマンス語語彙集を用いることもあった。それは生徒がロマンス語の語彙をラテン語に訳す練習のためであった。週に一度、生徒にはロマンス語で書かれた文書が与えられ、それをラテン語に翻訳しなければならなかった[12]。シモン・アブリルが「第4の誤謬」として指摘した翻訳の順序の問題、すなわち「ラテン語を俗語に訳す前に、いきなりカスティーリャ語をラテン語に訳させている」という部分は、当時の講読授業の実態を反映したものである。

授業内容は、中級・上級と学年を進むにつれ、生徒にとって厳しさを増した。中級学年に対してはネブリハ文法の第4巻が講義されるようになった。第1巻から3巻までは今日でいう形態論のみが説かれていたが、この第4巻は主に統語論を扱う内容だった。上級学年になると、午前の講義にはロレンツォ・ヴァッラが用いられ、午後は修辞学の規則や古典作家について教授された。中・上級学年の教師は、極度に困難な点を除いてラテン語で講義することが義務づけられていた。生徒には最初の40日間は教師を選ぶ猶予期間が与えられていた

11 Ibid., pp.152-153.
12 Ibid., p.153.

ようだが、一旦選んだ後で教師を変更することは認められていなかった。また、正規外の講師に密かに文法を教わることも禁じられていたという[13]。

以上のように16世紀の文法教育の様子を概観してみると、生徒にとっても教師にとってもいかに制約が多く、いかに柔軟性を欠くものであったかが鮮明に浮かび上がるであろう。手短に言えば、当時の講義は啓発のための営為というよりも、むしろ「儀式」という側面が強かったということである。生徒が「理解したかどうか」は二の次であり、形式上「因習的な営為が遂行されているかどうか」が最重要課題であったことになる。規定に書かれたことは果たす義務があり、決まっていないことを自由裁量で取り入れることは許されなかった。授業運営にとって「創意工夫」というものが基本的に容認される風潮ではなかった。理解を欠いた丸暗記を軽蔑し、基本原理の理解を重視する人文主義者[14]からこうした教授法に反発が出たのは、もはや必然の成り行きであった。

2. なぜ16世紀に文法教育改革が求められたのか?

2-1 ネブリハに対する16世紀人文主義者の評価

スペインの人文主義者の多くは、シモン・アブリルが活躍するよりはるか以前の15世紀末の段階から教育改革への高い意識を示していた。形骸化し、旧態依然としたアリストテレス一点張りの中世スコラ学に反発し、古代ギリシア・ローマという異教の価値観、人間中心の視点、合理性、ネオ・プラトニズムといった新しい思想を採り入れ、人々のモラルを向上させようとする人文主義者にとって、教育は何よりも重大事であった。七自由学芸をはじめとして、法学・医学・神学

---

13 Ibid., p.154.

14 文法学の教授法改革を志向していたサンチェス・デ・ラス・ブロサスが、なぜ文法の原理説明と統語論を中心とした合理主義に基づく理論書『ミネルヴァもしくはラテン語の諸原理について』*Minerva seu de causis linguae latinae*（1587）を著したのかを考察すれば、人文主義者が暗記中心の教育に疑義を呈していたことのさらなる裏づけとなる。

など諸学の基礎となるのがラテン文法であったことは、近世になっても変わらなかった。ただし、同じラテン語といえども、中世のスコラ学者とルネサンスの人文主義者とで目指すものに違いがあった点を看過してはならない。すなわち、前者が求める「スコラ学的ラテン語（latín escolástico）」とは、キリスト教義をめぐるスコラ学の抽象的議論のために創作された道具にすぎず、それは古代作家の文体から大きく乖離した高度に様式化されたラテン語だった。一方、後者が追求したラテン語とは日常生活に必要なラテン語であり、信仰よりも社会的要求に馴染みやすいものでなければならなかった。彼らはドグマよりもモラルを重視したため、教育は重要課題であり、ラテン語文体モデルとしての古代作家に回帰するようになったのである[15]。イベリア半島において、その先鞭をつけたのが他ならぬネブリハだった。

1495年、ネブリハ自身が『西羅辞典』の序文で「イベリア半島で最初のラテン語の店開きを行った」と豪語したように、このアンダルシア出身の人文主義者が著したラテン文法書は当時としては画期的な教科書であり、頻繁に版を重ねるほどの爆発的な成功を収めた。ネブリハ自身も生前に3回改訂を試みており、『文法再論』（*Recognitio*）と呼ばれた1495年版は、本文の周囲に膨大な情報量の注釈が追加され、きわめて大部なものに仕上がっていた。熱心な教育者であり自信家でもあったネブリハが、「まず教師たるものが正確に理解していないと正当な授業にならない」という信念から、教授者用マニュアルも兼ねたものとして膨大な注釈を施したのだった。しかも、ネブリハの死後、複数の文法教師がさらに注釈を追加したため、16世紀後半ともなると、初学者には難解極まりない複雑な文法書に仕上がっていたのだった。もはや、1481年の初版の原型は見る影もないほどの変貌ぶりであったにもかかわらず、“Elio Antonio de Nebrija”という著者名だけが表紙に残り、通称 *El Antonio* と呼ばれながら、「ネブリハが

[15] García López *et al.* (2013), pp. 33-34 参照。なお、ヴェルジュ（野口訳、2004）は「中世のラテン語は、ほとんど仲間内でしか通用しないような専門的・定型的なもので、文学的洗練とは無縁だった」と指摘する。人文主義者の古代回帰の背後には、このことへ反発があったであろうことは想像に難くない。

書いたラテン文法書」としてスペインの中等教育や大学で使用され続けた。その帰結として、著者不詳の『トルコ旅行』*Viaje de Turquía*（1550 年代）に見出される次のような辛辣な批判があったとしても何ら不思議ではなかった（つづり字原文ママ；下線筆者）。

Pedro: ¿Pues todavía se lee la gramática del Antonio?

Juan: ¿Pues cuál se había de leer? ¿Hay otra cosa en el mundo?

Pedro: Agora digo que no me marabillo que todos los españoles que sean bárbaros, porque el pecado original de la barbarie que todos nos ha tinido es esa arte.[16]

上記引用でペドロが発する「まだ『エル・アントニオ』が読まれているのか?」という台詞や、「イスパニア人のことば遣いが間違いに満ちている原罪はその文法書にある」という趣旨の箇所は、ネブリハ文法がいかに時流に反したものと見なされていたかを如実に物語る当時の証言として貴重である。もっとも、ネブリハという文法学者への個人攻撃というよりも、ネブリハの教科書しか使用を認めず、教授法の自由裁量を制限し、形骸化して時代に合わなくなった教育現場を変えようとしなかった国家当局や大学当局の見識の狭さへの批判と捉えるほうが正鵠を射ていると言えよう。

ネブリハのラテン文法（いわゆる *El Antonio*）に対する反発は 16 世紀の早い段階から見られた。例えば、ネブリハに薫陶を受けたペドロ・ヌニェス・デルガードは、ラテン語マスターの唯一の方法は古典作家を直接嗜むことだとして、文法原理を説くことを第一に、原典の読解は第二に位置づける師ネブリハの方法論に反発した[17]。同じくネブリハに師事した経験のあるファン・デ・マルドナードも、自著の『一群の文法家に対するさらに洗練された文学への教訓』*Paraenesis al politiores litteras adversus grammaticorum vulgum* (1529)のなか

[16] García Salinero (ed.), 2000, p.361.
[17] Kraye (1999), p.302.

でヌニェス・デルガードと同様の見解を示している[18]。この事実は、ネブリハの弟子でさえ *El Antonio* を妄信的に受け入れてきた訳ではなかったことを示している。否、それどころか、マルドナードの俗語による著作『一群の文法家に対抗する良き文学の薦め』*Exhortación a las buenas letras contra la turba de los gramáticos* (1529)はネブリハ批判の先鞭をつけることにさえなった。こうして、16 世紀の特に後半を通じて矢継ぎ早に出された新しいタイプのラテン文法書は、もはや時代に合わなくなったネブリハ文法に取って代えようという意図のもとに編まれたものであった。シモン・アブリルが俗語との二言語対照文法書として著した『ラテン語教授法と学習法』*Methodus Latinae linguae docendae atque ediscendae* (1569)や俗語で説明した『ラテン文法全 2 巻』*Los dos libros de la gramatica latina* (1583)などはまさにその典型例である。また、サンチェス・デ・ラス・ブロサスの『ミネルヴァ』*Minerva* (1587)もいかに合理主義的な観点からネブリハ文法を乗り越えるかを目論んだものであったことは明らかだ。

シモン・アブリル自身も『キケロー精選書簡集』の序文においてネブリハについて次のように言及している（つづり字原文ママ；下線筆者）。

> Todo esto se fatigará mucho el oyente por aprendello por la Gramática, que compuso el Maestro Antonio de Nebrissa. Porque aun-que conforme a sus tiempos fue mui docto, i escrivio bien, no guarda en sus preceptos la orden que buscamos: tiene muchas reglas no mui provechosas: i faltanle otras necessarias: i de mas desto dicelo en Latin, i en unos versos algo barbaros i dificultosos de entender: ...[19]

[18] Ibid., p.303.
[19] Simón Abril, *Los dos libros de epístolas selectas* (1770), en Breva-Claramonte (ed.), 1994, p.196.

シモン・アブリルのネブリハに対する評価もまた、他の16世紀の人文主義者と同様に否定的なものだった。上記の引用文ではネブリハが優れた学者であったことを認めつつも、その文法書は時代に適合しなくなっている点を指摘し、「聴講生はネブリハの編んだ文法を学ぶことに霹靂するであろう」と苦言を呈している。この時代の言語教育問題は、結局のところ、現場の教師がネブリハ文法を時代錯誤と認識しつつも規定により使用せざるを得なかったこと、つまり時流に適応した教授法を採用したくともできなかったことに尽きる。規定には、「指定教科書以外のことを講じてはならない」と明記されていたため、教師がオリジナルの副教材を使用することさえ叶わなかった。そこで採られた妥協策が、ネブリハ文法に自分の教えたいことを次々と追加していくというものだった。その結果、乱雑で大部な文法書が「ネブリハの著作」として受け継がれることになったのである。中・近世文法史の研究者である Sánchez Salor (2008)が「*El Antonio* はスペインにおける教育独占の実施に向けられた一種のバイブルになっていた」[20]と述べているように、ネブリハのラテン文法書は当時の言語教育界におけるウルガータ聖書のような位置づけにあったと見なすこともできる。

2-2 本当にネブリハは時代錯誤か?

16世紀において、ネブリハという学者がどの程度正確に伝えられ、理解されていたかについて、ここで掘り下げて考察してみたい。

シモン・アブリルが主張するまでもなく、古典語文法学習以前に自国語文法の理解を提唱したのはネブリハであった。1492年の『カスティーリャ語文法』の序文にもこのことが明記されている。しかも、それ以前の1488年頃にはラテン語・カスティーリャ語対照の二言語による文法書をイサベル女王に献上しており、俗語文法が古典語の理解の助けになることを実証している。ところが、本来なら言語学史的に注目すべきこの対照文法の先駆的著書は経済的理由で世に出回る

[20] Sánchez Salor (2008), p.159.

ことがなく、次世代に伝わるには至らなかった。さらには、現在でこそ広く知られるようになった『カスティーリャ語文法』でさえ、一握りの文法学者を除いて当時の知識人の座右に置かれて有効活用されていたという痕跡は見当たらない。16 世紀を通じて、ラテン文法書は膨大な数の版を重ねた[21]のとは対照的に、俗語文法書は 18 世紀になるまで一度も再版が出たことはなかった。

ネブリハの先見性は俗語文法だけではなかった。ラテン語で書かれた初頭教育についての論考である『子供の教育について』*De liberis educandis*（15 世紀末刊?）のなかで、ネブリハは生徒の習熟度に適合した教授法や体罰の反対を主張している。生徒の個性を尊重するいかにも人文主義的な教育観をシモン・アブリルよりも 1 世紀近く前に提唱し、先取りしているである。

こうした事実とは裏腹に 16 世紀のネブリハに対する負の評価が横行した理由は、彼の著作が非常に偏った形で断片的にしか伝わらなかったことに起因する。文法書の中身はオリジナル版から大きく変わっていたにもかかわらず、大学規定によりその表紙には「ネブリハ著」と記されたまま、いわば固有名詞だけが独り歩きをしていたのだった。このスペイン・ルネサンスの父ことネブリハこそが生徒の人間性や個性を尊重する人文主義教育の先駆けであるという本来の姿はもはや人々の忘却の淵に沈んでいた。

3. シモン・アブリルと俗語擁護論

3-1 中世とルネサンスのラテン語観の相違

シモン・アブリルが教育改革を提唱した時代背景をより良く理解するために、当時のラテン語観について整理しておく必要がある。まず、

[21] Sánchez Salor (2008: 166-167)には、1481 年から 1613 年までに刊行されたネブリハのラテン文法書がリストで掲載されている。それによると、この 132 年間で 86 回版を重ねたことになる。ただし、これは部分的な改編版や縮約版などをも含めた数値である。

近世に入ってもなお、ラテン語を用いることがそもそも無意味だったのかどうかである。

文化史家のP・バークは、中世におけるラテン語の位置づけを明快に述べている。ラテン語は中世を通じて教会組織や一部の行政、あるいは外交の公用語として機能していた事実は周知のことであろう。しかし、それらに加えて、例えば旅行者が異国でラテン語を用いて意思の疎通をはかるという光景は日常茶飯事だった点を挙げている。また、どの国の大学であっても講義はラテン語で実施されていたため、学生は出生地に関係なく、どこの大学ででも学べるというメリットもあった。つまり、ラテン語は決して死語ではなかったうえに、人はラテン語の前に平等だったという側面も窺えるのである。中・近世の大学でラテン語教育にダイレクト・メソッドが用いられたのは、このローマ帝国の言語がまだ失っていなかった実用性に裏打ちされていたからであった。しかしながら、当時の文法教育は、「理解させる」より「暗唱させる」ことが優先され、「個性に合わせた習熟度別授業」には程遠い一律的な教え方が主流だった。

また、ルネサンスという時代と地域を総合的に網羅した西本(2015)は、「特に初期の人文主義者がラテン語を用いたのは、内心の感情の表白ではなく、思想を伝えることを目指して書く場合は、語彙の豊富なラテン語のほうが楽だったのであり、かつ博識を示すにも好都合だったから」[22]だとする。つまり、近世に入って後にもラテン語が必要とされたのは所以なきことでは決してなかった。

こうした状況下でシモン・アブリルがカスティーリャ語で学問を教授することの意義をしきりに説く主だった理由は、「俗語によるほうが理解しやすいから」という至極当然といえる実学的なものだ。その根底には教育の普及を志向する目論見があったことはOlmos Gómez (2010)でも指摘されている通りである[23]。しかし、それとは別に、著者がギリシア語やラテン語を「古典語」とは言わずに「外国語」(lengua extraña, lengua peregrina)と表現している事実に着目し

[22] 西本(2015)『ルネッサンス史』、185頁。
[23] Olmos Gómez (2010), pp.110-111.

てみたい。というのは、ここに中世とは決定的に異なるルネサンスの言語観を読み取ることができ、この言語観の変貌が重要な鍵となっていると筆者は考えるからである。時代を16世紀から3世紀遡ってみよう。例えば、13世紀後半のアルフォンソ10世の著作には、日常の話しことばである俗語カスティーリャ語のことを“nuestro latín”と表現している箇所が散見される。この国王はラテン語とカスティーリャ語を「古典語vs現代語」という対立軸で認識するのではなく、「同一言語の文語体か口語体か」というレジスターの違いに帰しており、両者を必ずしも別言語として明確に捉えていなかった可能性が見受けられるのである[24]。ところが、近世に入り、国民国家形成およびナショナリズム勃興と軌を一にして、俗語に「カスティーリャ語」、「ポルトガル語」、「フランス語」などといった名称が付与されるようになった。おそらく、このことがラテン語を「外国語」と認識し始めた契機の一つだったのだろう。こうしてラテン語に対する認識が変化した瞬間、「なぜ学問を外国語で説かねばならないのか?」と人々は疑義を呈するようになったのである。

次の点はさらに重要である。1305年頃、ダンテが『俗語詩論』のなかで文法という規則を有するラテン語と、規則性なしに自然に獲得する俗語とを対置させ、両言語の相違を「人為vs自然」、あるいは「規則vs無秩序」に求めた[25]。しかし、1492年のネブリハを境に俗語にも規則性を見出すこと、すなわち文法に還元することが常軌を逸したことではなくなり、16世紀になると各国が競うようにして自国語の文法を世に出すようになった(同世紀後半には、大西洋を超えてアメリカ先住民語の文法書さえもが存在した)。こうして俗語が一旦文法整備化を経るや、日常の話しことばは古典語に比肩するだけの威信を持った言語であるとして、話し手は母語に自信を抱くようになる。こ

[24] Niederehe (1987), p.102.
[25] 岩倉具忠訳註『ダンテ俗語詩論』、3頁。当該箇所の原文: “...vulgarem locutionem asserimus quam sine omni regla nutricem imitantes accipimus. Est et inde alia locutio secundaria nobis, quam Romani grammaticam vocaverunt.”

うした当時の文人たちの間で異口同音に唱えられていた俗語擁護論[26]がシモン・アブリルの教育思想を後押ししたことは明確である。

3-2 他の学問もカスティーリャ語で教えることの提案

シモン・アブリルが『覚書』のなかで提唱している俗語による教育は文法学に留まるものではない。例えば修辞学のような他の自由学芸についても古典語（シモン・アブリルの表現を借りれば外国語）で教えることを誤謬として当時の教育の在り方を断罪している。当該箇所を引用してみよう（つづり字はすべて原文ママ；下線筆者）。

> Es pues graue error en la Retorica enseñalla en lenguas peregrinas, y no en la vulgar de cada nacion. Porque pues se á de exercitar con el pueblo, conuiene enseñalla y aprendella en la lengua, con que se trata y comunica con el pueblo:[27]

シモン・アブリルが1587年にカスティーリャ語で書かれた最初の論理学書を著したことは先に述べた。それから17年後の1604年に俗語カスティーリャ語で書かれた最初の修辞学書『イスパニア語雄弁術の書』*Libro de eloquencia española en arte*がヒメネス・パトンの手により上梓される。

シモン・アブリルが学問のカスティーリャ語化を推進したのは、自由学芸の言語的分野である三学においてだけではない。数学についても俗語で教えることの有用性を説いている。

> Este daño tan graue remediará facilmente V.M. mandando, que las Matematicas se enseñen en lengua vulgar, ...[28]

さらに著者は、俗語擁護論を医学や法学の域にも浸透させている。

---

[26] スペインにおける俗語擁護論の展開については、拙稿（2014）参照。
[27] Simón Abril, *op. cit.*, f.8-v.
[28] Ibid., f.10-r.

Demas desto pues de Griego se traduze mas facil, propia, y claramente en Castellano, que en Latin, por conformarse mas las maneras de hablar de la lengua Castellana con las de la Griega, que las de la Latina: y porque cada vno traduze mas propia y claramente en su misma lengua, que en la estraña, conuendria traduzir los libros de los medicos Griegos en lengua Castellana, ...[29]

かつてラテン語に疎いある医師が calyps（鋼鉄、便秘）という用語を cal（石灰）と誤解し、患者に誤った処置を施して大事に至らしめた事例を挙げ、ギリシア医学の書物を明晰なカスティーリャ語に翻訳しておけば、このような事態は回避できたであろうと述べ、医学の問題さえ言語問題に起因させている[30]。

次の引用は法学についての誤謬を扱った章からのものである。

Este pio zelo de los passados Reyes, lo han escurecido los Dotores, que pareciendoles, que les era mas honra escriuir barbaramente en Latin, que elegantemente en Castellano, ... A cuyo exemplo ellos las leyes Castellanas las auian de declarar en lengua Castellana, y no en Latina, para que entendiesse mejor el pueblo Castellano.[31]

シモン・アブリルは、歴史的にみて、モーセもカンディア王ミノスもアテナイ共和国のソロンも、あるいはカスティーリャ国王アルフォンソ10世もそれぞれ法律を自国語で書いたことを主張し、彼と同時代の法学者はラテン語という外国語でローマ法などの注釈を行うの

[29] Ibid. f.12-v.
[30] Alejo Montes (1998)によれば、当時の大学で医学については授業の4分の3がラテン語による講義だったという。
[31] Ibid., ff.14-v-15-r.

が名誉だと勘違いしている点を痛烈に批判する。いずれも、シモン・アブリルが問題視しているのは、それぞれの学問が「俗語で教えていない」あるいは重要な著作が「俗語に翻訳されていない」という点に収斂することから、彼の教育思想を引き出した根源的な問いかけは、つまるところ言語問題に他ならなかったことが窺える。さらには、本稿の中心テーマである『覚書』という書状は、当時の人文主義者が言語教育の現状を見つめながら抱いていた歯痒さや息苦しさを代弁するものでもあったと小括できよう。

4. むすびにかえて —シモン・アブリルによる建議後の顛末—

16 世紀の特に後半を通じて、ネブリハのラテン文法書に取って代わろうとする文法書が多数出されたという現実を前に、1594 年、国王採決が下された。国王顧問会議は、文法を見直して時流に適ったものに改編するように決めた。ようやく政府が文法説明にロマンス語を使用する必要性を認めた瞬間であった。この採決を受け、サラマンカ大学でガブリエル・エンリケス、ペレス・オルティス、サンチェス・デ・ラス・ブロサスらによって構成される委員会が任命された。委員会による検討の結果、1598 年 9 月の教授会で著者不詳の文法書を改良する採決が読み上げられた。ところが、事態はここから複雑化の様相を呈するようになる。

そもそも 1 世紀以上もの長きにわたって規定によりネブリハ文法の使用が義務づけられていたことの背景には、印刷・販売権という利権の問題が絡んでいた。アントニオ・デ・ネブリハの曾孫であるアグスティン・デ・レブリハがその権利を主張していた傍らで、マドリードの総合施療院がこの文法書の印刷権を有していたという事実があった。おそらく、この利権を手放したくない施療院側からの圧力により、ネブリハ以外の文法書の台頭が退けられてきたのであろう。言語学的・教育的側面とはまったく無関係のところで文法書の権威づけがなされていたことが最大の問題であった。

サラマンカ大学内部に設置された委員会の決議は結局のところ無視され、1601年7月1日付の国王勅令が下した結論は、イエズス会士フアン・ルイス・デ・ラ・セルダが既存のネブリハ文法にカスティーリャ語による解説を加えた*Arte Regia*と呼ばれる版を唯一の教科書に指定するというものだった。ルイス・デ・ラ・セルダとはマドリードの帝国学院（Colegio Imperial）で人文学と修辞学を教えたことのある教師であり、ウェルギリウスの優れた注解者として当時名を馳せていた人物だった。教皇ウルバヌス8世はルイス・デ・ラ・セルダを賞賛するあまり、自室に彼の上半身の彫像を飾っていたというエピソードがあるほどの高い名声を誇っていたと言われる。政府が指定したこのラテン語教科書は、俗語による文法解説・注釈こそルイス・デ・ラ・セルダの手によるものだが、「原著者アントニオ・デ・ネブリハ」の名前を相変わらず表紙に記さなければならなかったため、文法全体の枠組みを見直した新しい文法書からは程遠いものであった[32]。

1601年9月のサラマンカ大学教授会において、委員会決定とは異なる上述の勅令内容が読み上げられるや否や、たちまち議論に火がついた。同大学はこの勅令の承諾に難色を示す旨を告げる使者を宮廷に派遣した。それにもかかわらず、宮廷側は大学側の主張を聞き入れず、サラマンカ大学に*Arte Regia*すなわちルイス・デ・ラ・セルダ版ネブリハ文法を送り付けてきたのだった。大学側はこれを一度は黙殺したようだが、1604年、この*Arte Regia*を唯一の指定教科書とすることが認可され、17世紀を通じてのスペインにおけるラテン語教科書として使用され続けることになる。

シモン・アブリルをはじめとする16世紀の人文主義者が改革の声を上げたことが功を奏し、17世紀以降のスペインの学生たちは初歩段階からいきなりラテン語でラテン語を教わるという試練からはともかく解放された。たしかに、このことは大きな前進だとして評価できるかもしれない。しかしながら、ルイス・デ・ラ・セルダ版ラテン

32 ただし、ルイス・デ・ラ・セルダによる注記の大半はサンチェス・デ・ラス・ブロサスの学説を拝借したものだとする研究もあり、必ずしもネブリハ文法がそのまま継続されたとは断言できない。

文法が指定教科書になった顛末は、純然たる言語学的・教育学的観点よりもネブリハ文法書の印刷・販売という既得権益保護のほうが優先される目的でとられた強行採決によるものだった事実を考慮すれば、青少年の育成を純粋に志向して教育改革に取り組んだ人文主義者にとって不満の残る結果に終わったと結論づけざるを得ない。

しかも、大学の授業に俗語が採り込まれたのはあくまでラテン文法の基礎段階でのことであり、ほとんどの講義は中世と同様にラテン語で実施されていた。大学教育におけるカスティーリャ語化が国策として顕在化するには、1768年6月のカルロス3世による勅令まで待たねばならなかった。

資　料

De la Cerda, Juan Luis (1601/ 2013): *Arte Regia. Nebrija reformado por Juan Luis de la Cerda*, Introducción, edición crítica, traducción y notas de Juan María Gómez Gómez, Universidad de Extremadura, Cáceres.

Nebrija, Antonio de (1481/ 1981): *Introductiones latinae*, Salamanca, s.n.

---------- (1495/ 2009): *Grammatica nebrissensis cum commento*, Kissinger Publisher's Legacy Reprints.

Simón Abril, Pedro (1572): *Los dos libros de las epístolas selectas de Marco Tulio Cicerón*, Valencia. (En M. Breva-Claramonte, 1994)

---------- (1583): *Los dos libros de la gramática latina escritos en lengua castellana*, en Casa de Juan Gracián, Alcalá de Henares. (BNE)

---------- (1587): *La gramática griega escrita en lengua castellana*, en Casa de Pedro Madrigal, Madrid. (BNE)

---------- (1587): *Primera parte de la filosofía llamada la Lógica o parte racional*, en Casa de Juan Gracián, Alcalá de Henares. (BNE)

---------- (1589): *Apuntamientos de cómo se deben reformar las doctrinas y la manera de enseñarlas*, en Casa de Pedro Madrigal, Madrid. (BNE)

---------- (1590): *Instrucción para enseñar a los niños fácilmente el leer y el escrivir*, Zaragoza. (En M. Breva-Claramonte, 1994)

参考文献

Alejo Montes, F. Javier (1998): *La Universidad de Salamanca bajo Felipe II 1575-1598*, Junta de Castilla y León, Burgos.

---------- (2007): *La docencia en la Universidad de Salamanca en el siglo de oro*, Ediciones Universidad de Salamanca, Salamanca.

Anónimo (155-?/2000): *Viaje de Turquía*, F. García Salinero (ed.), Cátedra, Madrid.

Breva-Claramonte, Manuel (1991): «El uso y la *copia* en el método de Pedro Simón Abril (1530-1600)», *REL*, 21, Madrid, pp.47-64.

---------- (1994): *La didáctica de las lenguas en el Renacimiento. Juan Luis Vives y Pedro Simón Abril*, Universidad de Deusto, Bilbao.

---------- (2006):«La huella de la *Minerva* (1587) del Brocense en la gramática castellana del siglo XVII», J. J. Gómez Asencio (dir.), *El castellano y su codificación gramatical. Vol. II. De 1614 (B. Jiménez Patón) a 1697 (F. Sobrino)*, Instituto Castellano y Leonés de la Lengua, Burgos, pp.71-102.

Cañigral, Luis de (1987a): «Una obra desconocida de Pedro Simón Abril», *Al-Basit*, 20, Instituto de Estudios Albacetenses, Albacete, pp.79-103.

---------- (1987b):«P. Simón Abril y M. Sabuco: coincidencias programáti-cas en pedagogía y reforma de la enseñanza»,

Al-Basit, 22, Instituto de Estudios Albacetenses, Albacete, pp.43-53.

Esparza Torres, M. A. (1995): *Las ideas lingüísticas de Antonio de Nebrija*, Nodus, Münster.

García López, Jorge *et al.* (2013): *Historia de la literatura española 2. La conquista del clasicismo 1500-1598*, Crítica, Barcelona.

Gil Fernández, Luis (1997): *Panorama social del humanismo español (1500-1800)*, Tecnos, Madrid.

Kraye, Jill (1999): *Introducción al humanismo renacentista*, Cambridge University Press, Cambridge.

Negrín Fajardo, Olegario (coord.) (2011): *Historia de la educación española*, UNED, Madrid.

Niederehe, Hans-Josef (1987): *Alfonso X el Sabio y la lingüística de su tiempo*, SGEL, Madrid.

Olmos Gómez, Paula (2010): *Los negocios y las ciencias: Lógica, argumentación y metodología en la obra filosófica de Pedro Simón Abril (ca. 1540-1595)*, CSIC, Madrid.

Sánchez Salor, Eustaquio (2008): *Las ediciones del arte de gramática de Nebrija (1481-1700)*, Editora Regional de Extremadura, Mérida.

アリギエーリ、D.（岩倉具忠訳註、1984）『ダンテ俗語詩論』東海大学古典叢書。

ヴェルジュ、J.（野口洋二訳、2004）『ヨーロッパ中世末期の学識者』創文社。

岡本信照（2014）「黄金世紀における俗語擁護論の系譜」『スペイン学』16、京都セルバンテス懇話会、84-105頁。

西本晃二（2015）『ルネッサンス史』東京大学出版会。

バーク、P.（原聖訳、2009）『近世ヨーロッパの言語と社会』岩波書店。

付記

本稿は、平成28年度JSPS科学研究費補助金（基盤研究C「16世紀スペインにおける人文主義教育思想の展開と実践」安藤真次郎代表：課題番号15K02089）による成果の一部である。

メキシコ第二帝政再考
－皇帝マキシミリアンと皇后カルロッタの往復書簡を中心として－

立岩礼子

はじめに

メキシコ第二帝政[1]は、オーストリア皇位継承権第2位を有するマキシミリアン（1832－1867）[2]とその妻カルロッタ（1840－1927）[3]のロイヤル・カップルによるわずか3年間の統治（1864－1867）を指す。当時メキシコではすでに先住民ベニト・フアレス（1806－1872）が1858年より大統領の座に就いて共和制政権を樹立し、自由主義政策を進めていた。そこへ、フランスのナポレオン3世の傀儡政権として送り込まれたのが、この外来のロイヤル・カップルであった。従来、メキシコの歴史家たちはこの第二帝政の3年間が自由主義の台頭を阻んだとして正史から切り離し、むしろ不幸な歴史の一幕として位置づけてきた[4]。そして、マキシミリアンがメキシコの古代遺跡や熱帯の動植物に強い関心を示して旅を繰り返し、政治を皇后に任せ、カルロッタは帝国が立ち行かなくなって発狂してしまったとして、歴史研

---

[1] この第二帝政に先んずるメキシコ第一帝政とは、スペインから独立した直後の1822年5月に、独立達成に貢献した将校アグスティン・デ・イトゥルビデ（1793－1823）が皇帝アグスティン一世として即位し、1823年3月に退位するまでの、わずか1年足らずの統治を指す。

[2] Archiduque Fernando Maximiliano de Habsburgo. オーストリア大公ヨーゼフ・カール・フランツを父に持ち、その妹がナポレオンの二人目の妻となったマリー・ルイーズであった。オーストリア＝ハンガリー帝国皇帝となった兄フランツ・ヨーゼフを海軍提督として支え、イタリア北部ロンバルディア＝ベネトの統治経験もある。カルロッタと結婚した後、ポルトガルが王室を移したブラジルを単身で訪問し、3ヶ月滞在した。アドリア海を臨んだミラマール城を構え、その城の造園に熱心で、メキシコからも多くの熱帯植物を移植することを計画していた。マキシミリアンは、ナポレオンの傀儡であることを好まなかったが、フランス軍がメキシコを撤退すると、帝国軍はフアレス軍に敗れ、皇帝は銃殺刑に処された。印象派の画家マネはその銃殺刑を描き、マキシミリアンを見放したナポレオン三世を非難した。

[3] María Carlota Amelia Victoria Clementina Leopoldina de Sajonia Coburgo y Orleáns Borbón Dos Sicilias y de Habsburgo-Lorena. ヨーロッパ大陸で最も早く産業革命を成し遂げたベルギーの王室に生まれた。父はベルギー王レオポルド一世で、母はフランス王家の王女ルイーズ・マリーであった。イギリスのヴィクトリア女王は父方の叔母にあたる。

[4] Pani, 1998, p. 571.

究の対象というよりは、小説、テレビドラマ、演劇の格好の題材に選ばれてきた[5]。しかし、1990年代になってこの第二帝政を客観的に評価しようとする研究が発表され[6]、2000年以降はメキシコの保守派の流れを捉えようとする動きも見られるようになっている[7]。しかし、第二帝政を研究することは容易ではない。資料がメキシコのみならず、ウィーン、ベルギー、フランス、イギリス、イタリア、バチカン、アメリカ合衆国に散逸して保管されており、使用されている言語も多岐にわたっているため、その扱いは容易とは言い難いからである。

そこで本稿では、歴史家ラッツ・コンラッド（1931－2014）によって刊行された皇帝夫妻の往復書簡合計270通を主たる資料として、第二帝政の考察を試みる。この往復書簡は、夫妻がメキシコに到着してから皇帝が銃殺されるまでの3年間に交わされた分である。マキシミリアンは1864年8月から10月にかけてメキシコ中央部の、1865年4月から8月にかけてベラクルスの軍事視察を実施した。その後、1865年11月から12月にかけてカルロッタは、マキシミリアンに代わって、メリダを中心にユカタン半島を視察した。1866年2月以降、カルロッタはクエルナバカに住み、6月にナポレオン三世との交渉のためヨーロッパへ向かった。このように、ふたりは別行動をとることが多く、手紙で連絡をとりあっていたのである。そこには、メキシコ国内外の情勢をはじめ、第二帝政の統治について二人の考えが綴られている。

今回、資料として用いる書簡は、すでにスペイン語に翻訳されている。書簡はもともとドイツ語で書かれていて、時折フランス語のフレーズも織り込まれている。スペイン語は単語が使われる程度である。しかし、両人ともスペイン語も堪能であった。マキシミリアンはスペインに外交文書をスペイン語で書き、スペイン語文にほぼ誤りがなかったことをカルロッタに報告している[8]。マキシミリアンの母語はドイツ語とマジャール語（ハンガリー語）である。また、外交や社交に

---

[5] とりわけデル・パソ著 *Noticias del Imperio* はフィクション小説でありながら、史実をベースにし、発狂した皇后カルロッタの独白で綴られていることから、1987年の発売以来ベストセラーとなっている。
[6] Arenal, 1991 や Krauze, 1994 などが挙げられる。
[7] Díaz, 2000 や Pani, 2009 などが挙げられる。
[8] Konrad, 2004, p. 201.

欠かせない英語とフランス語はもちろんのこと、イタリア統治時代にイタリア語も習得していた。一方、カルロッタはフランス語を母語としながらも、叔母にあたるイギリスのヴィクトリア女王とは英語で会話し、嫁ぎ先の言葉であるドイツ語やハンガリー語を習得した。フランスのナポレオン三世の妻ユージェニー皇后はスペイン人で、カルロッタとは親しい間柄であった。皇帝夫妻がフランス語やスペイン語ではなくドイツ語を使ったのは、オーストリア帝国の公用語がドイツ語であり、二人の間での共通語であったからだが、当然フランス側やメキシコ側に本音が漏れないようにという配慮はあったと思われる。

資料の問題だけでなく、この帝政は短命で崩壊し、実現された政策は多くないことから、その重要性や結果、影響あるいは意義などについて評価することは難しい[9]。そこで帝政開始時期にあたる 1864 年から 1865 年にかけての 139 点の往復書簡を重点的に参照し、皇帝夫妻が統治初期に抱えた課題を 3 つに分けて考察する。具体的には、メキシコ人が外国人の二人を君主として受け入れたか（第 1 節）、皇帝夫妻が目指した国家はどのようなものであったか（第 2 節）、帝政の維持はいかにして図られたか（第 3 節）である。今回の考察は、質的にも量的に限られている統治者側の資料であり、皇帝夫妻の心情が前面に出たものが多い。従って、客観性を担保するには、困難な面も否定できない。しかし、共和派側に銃殺刑にされた皇帝や発狂してしまった皇后には、自らの立場を弁明する機会を与えられなかったことを考えれば、彼らの立場で第二帝政を見直すことは、少なからず意義ある作業だと判断できる[10]。

1．メキシコ人による第二帝政の受け入れ

メキシコに第二帝政が樹立されることになった理由は、以下の 4 つに大別される。すなわち、1）皇帝夫妻それぞれが君主として一国を統治したいという個人的な野心を有していたこと、2）夫妻の後ろ盾となったナポレオン 3 世がメキシコを植民地化し、フランスの市場拡

9 例えば、Díaz, *op. cit.* は第二帝政の政策について一切言及がない。
10 第二帝政崩壊の原因の 1 つに、教会との関係に亀裂が入ったことが挙げられる。しかし、今回資料とした書簡には、教会との問題については言及がないため、本稿では分析の対象に含まない。

大を狙ったこと、3）自由主義派の非難の対象となったキリスト教教会が権力強化と拡大のためにヨーロッパ以外での布教活動を展開したこと、4）メキシコの保守派が自らの地位と財産を守ろうと保守派政権の樹立を画策したことである[11]。

とりわけ、最後に挙げた4つ目の理由は、近年、見直されている。19世紀前半のメキシコの政治混乱のなかで、メキシコが近代化を図るには、いかなる政治体制が望ましいのかを考えたとき、君主制は1つの選択肢であったというものである[12]。しかし、スペインから独立して50年経っていた当時、メキシコ国民が再びハプスブルグ朝の皇帝を歓迎したいと思ったどうか、基本的な疑問を解消する必要はあるだろう。そこで、本節では、第二帝政に対するメキシコ人の反応を分析する。

マキシミリアンは、メキシコ皇帝に即位するにあたって、兄であるオーストリア＝ハンガリー帝国皇帝の要求に従って、同帝国の皇位継承権を放棄せざるを得なかった[13]。そのため、メキシコ国民の揺るぎない総意として自分が皇帝の地位に就くことにこだわった[14]。また、臣民の信頼を勝ち取って統治することの重要性は十分に認識しており、それは少なくともイタリア・ヴェネトの総督としての経験に裏打ちされていた。マキシミリアン自身もマキシミリアンを皇帝に担いだメキシコの保守派も、かつてのメキシコがハプスブルグ朝スペインの支配下にあったことを引き合いに出して、ほかの誰よりもマキシミリアンが皇帝カール五世以来の当然とも言えるメキシコ統治の権利を生まれながらに有すると考えていた。

1864年5月28日、皇帝夫妻はベラクルスの港に上陸した。しかし、そもそも夫妻の到着日が1日早まったこともあり、出迎えの準備

---

11 Díaz, *op. cit.*, pp. 606-608.

12 Pani教授は、19世紀メキシコの政治はまだ成熟していなかったが、君主制は決して植民地時代への逆戻りではなく、治安回復と国家安定のための1つの選択肢であったと考えるべきであると解説している。Pani, Érika, "Maximiliano de Habsburgo, Monarca ciudadano", Ciclo de Conferencias Otoño 2016 "Nuevas interpretaciones de la historia nacional", el Centro de Estudios Historia de México Fundación Carlos Slim, México, el 22 de agosto de 2016参照。

13 オーストリア皇帝フランツとマキシミリアンの間での取り決めのスペイン語訳についてはReinach Foussemagne, 2014, pp. 146-147, nota 39参照。

14 Zamora, 2012, p.76.

が間に合わなかった。カルロッタはショックのあまり涙したとも伝えられる[15]。こうした事情を排除して、ベラクルスでの出迎えの人の少なかったという事実だけが独り歩きし、第二帝政は歓迎されなかったとされる。これは早計である。その証拠に、歓迎の準備や式典に関する指示書の存在が確認されている[16]。

実際は、別の事情があった。当時のベラクルスは非常に不衛生な町で、黄熱病などにかかりやすかったことから、フランス大使館側もメキシコ保守派も港での出迎えを想定していなかった。加えて、港は共和派フアレス軍の手中にあり、皇帝夫妻は敵陣に乗り込んだ恰好となった[17]。フアレス軍に連行されなかったのは、共和政府がこれ以上のナポレオン3世の介入を回避したかったのだと推測される。証拠写真の代わりにフランス側の従軍画家が描いた皇帝夫妻ベラクルス到着の絵が存在するが、そこに描きこまれた人々は、港の警備にあたっていたフアレス軍やそこで商売に従事していた貿易商のほか、物珍しさに集まった地元の人たちであったということになる。

マキシミリアーノとカルロッタが皇帝夫妻にふさわしい歓迎を受けるのは、6月5日にプエブラに到着してからである。プエブラは教会の権力基盤が強固な保守派の都市であった。「金持ちも貧乏人も待ち望んだ」ロイヤル・カップルの到着であったと伝えられている[18]。メキシコ帝国の紋章や二人の顔が彫刻された凱旋門が用意された。滞在中の6月7日に皇后が24歳の誕生日を迎えたこともあり、ことさらに盛大な歓迎となった。カルロッタは、「今日の歓迎は私が新しい祖国にいることを実感させてくれました」と、メキシコでの最初のスピーチを行った[19]。

その後、彼らはメキシコ市へ向かった。途中、聖母グアダルーペ寺院に寄っている。ふたりを歓迎したのが、200台の馬車に乗った着飾った女性たち、500の騎馬兵、葉のついた枝を振る大勢の先住民であ

---

15 Reinach Foussemagne, *op. cit.*, pp. 173-174.
16 Mohssine y Quirarte, 2010, pp.217-224. 原本は Archivo del Centro de Estudios de Historia de México Carso に所蔵されている。
17 Flores Salinas, 2001, p. 112.
18 Archivo General Municipal de Puebla, Publicaciones, *Boletín oficial de la prefectura política del Departamento de Puebla*, Miércoles, 8 de junio de 1864.
19 Zamora, *op. cit.*, pp. 114-115.

った[20]。皇后付きの侍女コロニッツ伯爵人は、この歓迎ぶりにベラクルスでの失望が払拭され、カルロッタはメキシコの国と人々をすっかり受け入れたようだと記している[21]。皇帝夫妻はミラノの職人に特注させた馬車に乗り、2列に配された合計200台の馬車を従え、500の騎馬兵に護衛されて、首都に入った。首都はメキシコだけでなくフランスの三色旗も飾られ、「マキシミリアン皇帝万歳」のみならず「ナポレオン三世万歳」も聞かれたと、カルロッタはフランス皇后ウージェニーに書き送っている[22]。憲法広場は、樹木や花や植物で埋め尽くされ、さながらジャングルのようであった[23]。

首都の大聖堂ではミサが執り行われたが、通常より早目にで切り上げられた。そのため、フアレス軍による攻撃を避けるために中止されたとも伝えられる。しかし、実際には、皇帝が長いミサが嫌いで、短時間で執り行うことを自ら希望したのであった[24]。マキシミリアンは皇帝が教会権力の後ろ盾を必要としなかったことを端的に表しているとも捉えることができる。その後、晩餐、中央広場での花火打ち上げなど華やかな行事が続いた[25]。翌日は、正式な戴冠式が執り行われた。

一連の歓迎式典を通じて明らかなことは、独立後50年経ったメキシコにおいて、なお植民地時代を彷彿とさせる副王や大司教の着任式と同様の凱旋門が建てられたり、当時と変わらず海を越えて到着する支配者に対する賛辞の詩が何篇も作られたりしていることである。つまり、17世紀エフィメラルな祝祭の伝統は、独立以後も継承されていたとみなすことができる。さらには、イトゥルビデ将軍の第一帝政やサンタ・アナ将軍の大統領の座への度重なる返り咲きに見られるように、メキシコ国民が独立後もなお強いリーダーを求め、中央主義あるいは寡頭支配に依存する政治的傾向の表れと見なすことも可能だ。

---

[20] Reinach Foussemagne, *op. cit.*, p. 176.
[21] *Ibid.*
[22] *Ibid.*, p. 178.
[23] *Ibid.* 広場を植物で飾る演出は、16世紀初代副王アントニオ・デ・メンドーサの着任式典に行われている。植民地時代を通じてこの演出が頻繁に流用されたかどうかは確かではないが、植民地時代を通じて定着し、独立以降も行われ、伝統と化していた可能性もあり、興味深い。
[24] Zamora, *op. cit.*, p. 119.
[25] Mohssine y Quirarte, *op. cit.*, p. 222.

十余年に及ぶ独立戦争の混乱とアメリカ合衆国の首都占拠と国土の半分の割譲という危機を経て、人々がフアレスであれ、マキシミリアンであれ、強い指導力を発揮できるリーダーを望んだことは自然なこととも考えられる。皇帝が皇后に宛てた10月11日付けの書簡には、モレリアの町ではメキシコの聖母グアダルーペを詣でる以上の人出に歓迎され、人々が自分を肩に担ごうとしたと報告している[26]。夫妻はメキシコ人にとっての聖母グアダルーペの存在の重要性を理解しており、人々が皇帝を闘牛士のように英雄視したのか、それとも聖的存在として触れたいと願ったのか、文面だけでは判断がつかない。しかし、異国からの皇帝を歓迎する雰囲気は存在したことは間違いないのである。

一方、皇帝マキシミリアン自身は、この歓迎ムードをメキシコ国民の帝政への確固たる支持につなげようと努力した。8月初旬から10月中旬までの皇后への書簡には、妻に会えない寂しさとともに、視察の先々で滞在を延ばして、土地の者たちと対話をすることを優先していることが記されている。視察先にて質素な宿舎に泊まり、人々と食事を共にし、祭りにも参加した。例えば、皇帝の8月27日付けの書簡では、滞在していたイラプアトの町でプエブラに勝る歓迎を受け、翌日、次の目的地に出発しようとしたが、歓迎ムードが収まらない住民たちに引き留められ、滞在を延長したと皇后に知らせ、首都への帰途が先延ばしになっていることを詫びているほどである[27]。9月28日付けの書簡では、首都に次いで人口が多いレオンに入り、メキシコ人、イギリス人、ドイツ人、フランス人の総勢150人と会ったと報告している[28]。合わせて、共和派の新聞では、皇帝が多くの人々の心をつかんでいることを警戒していると報じたとことも書き添えられている[29]。帝国政府の組閣人事を見ても、その人選は外国人も多いが、メキシコ人からは自由主義的な考えを持った者たちが登用されている[30]。政治信条や思想が異なっても第二帝政に協力したという事実からも、少なくとも、マキシミリアンがメキシコの人々から歓迎されな

[26] Konrad, *op. cit.*, p. 156.
[27] *Ibid.*, p. 127.
[28] *Ibid.*, p. 144.
[29] *Ibid.*
[30] Zamora, *op. cit.*, pp. 134-135.

かったとは結論付け難い。

2．帝国統治

19 世紀のメキシコにおいては、植民地時代の遺制の温存あるいは緩やかな改革を望む都市の保守派、自由と平等の下に特権階級ばかりでなく先住民共同体の土地まで解体を進める急進的な自由主義派、地方に権力の基盤を持ちながら中央集権主義に反対する地方ボスが存在し、中央の政権が安定しない状態にあった。この状況を打破したのがフアレスであり、大統領として共和国政府を樹立し、自由主義を掲げて教会権力の一掃を図っていた。レフォルマ戦争としても知られる時代である。

フアレス大統領が外国人への債務返済停止を宣言したことに端を発して、ナポレオン三世がメキシコへ派兵し、その支配を強固なものにするために第二帝政の樹立をもくろんだ。フランスはすでにイギリス大英帝国に植民地経営で出し抜かれており、ナポレオン三世は、すでにアジアに進出してインドシナを占領した後、フランスとアジアの間に位置するメキシコ獲得に乗り出したのであった。イギリスが占領するインドを回避し、メキシコのテワンテペック地峡（幅 220 キロメートル）を通って、日本と中国との直接貿易を実現することが目的であった[31]。いわゆるフランス干渉の時代である。

フアレスはアメリカ合衆国から共和制政府の承認を得るため、このテワンテペック地峡永久通行権をアメリカ合衆国に譲ろうとしていた[32]。フランスは、南北戦争に乗じて、この通行権をいわば横取りしようと画策したのである。

つまり、ヨーロッパを揺るがせていた自由主義派と保守派の対立や列強間の植民地や貿易航路の争奪戦が、大西洋を越えたメキシコの地において、フアレス率いる共和派とマキシミリアンを戴く帝国派との代理戦争の様相を呈したとも言える。フアレス軍と皇帝軍はそれぞれ一進一退を繰り返した。一方、メキシコの隣国アメリカ合衆国の北軍

---

[31] Flores Salinas, *op. cit.*, p. 34.

[32] 1858 年に調印されたマックレーン・オカンポ法によって、アメリカ合衆国はメキシコのテワンテペック地峡永久通行権を獲得し、メキシコ政府の要請があれば、同地峡防衛のためにメキシコ領土内で軍事力を行使できることが約束された。しかし、アメリカ合衆国上院がこれを否決した。

は、南北戦争の勢いに乗って、フアレス軍を支持し、フランスを牽制した。マキシミリアンはフランス軍のほかに、オーストリア軍やベルギー軍の応援を得た。しかし、最終的には、主力部隊であるフランス軍は撤退を決め、マキシミリアンは兵力を失って、敗北を認めざるを得なかった。

第二帝政で計画された事業は多くある。道路整備、銀生産のための水銀精製、炭鉱や銅山開発、道路整備、食糧確保のための農業や牧畜業の振興、国民の健康と衛生、初等教育、子女教育、先住民問題、教会の改革、軍隊の編成などである。3年間で実施できたことは、十進法や度量衡を世界市場のスタンダードに合わせたことなど、わずかであった。

その原因の1つは、内閣が「バベルの塔のような多言語使用」[33]の政権で、意思疎通が図れなかったことにある。正式に任命された24人中、スペイン語を母語とするメキシコ人が9人、スペイン人が1人、フランス語を母語とするフランス人が4人とベルギー人が2人、ドイツ語を母語とするオーストリア人6人であった[34]。会議には通訳が必要とされた。

とくに皇帝は、フアレス軍との戦争と新しい国家建設という二つの現実を統括すべく、軍総司令官にフランス人指揮官シャルル・ロワゼルを、国家建設を預かる内務省大臣にはベルギー人フェリックス・エロワを置いた。その後、マキシミリアンは軍事視察に出かけ、カルロッタに宛てて、内務省設置法のとりまとめを急がせている。しかし、カルロッタが「褐色の肌の大臣の方が信用できる」[35]とマキシミリアンに吐露することもあり、実質的に組閣は困難を極め、1年近くかかった。財政関係はナポレオン三世がフランスから送った大臣たちが担当し、外国人はメキシコについての理解が及んでおらず、その上、マキシミリアンが登用したメキシコ人には自由主義的な考えを持つ者が多かった。マキシミリアンを担いだ保守派は失望し、第二帝政は内部から支持を失っていった。

ここでは紙幅や資料の都合もあり、第二帝政の政策について詳細に

---

[33] Zamora, *op. cit.*, p. 134.
[34] *Ibid.*, pp. 134-135.
[35] Konrad, *op. cit.*, p. 172.

分析することはできないが、今回主たる資料とする書簡から第二帝政が試みようとした政策の特徴的なものについて言及する。

1）軍の再編について

第二帝政の統治は、まず何よりもフアレス率いる共和軍との戦いに勝利しなければならなかった。そして、ナポレオン三世の要求に従ってフランス軍を本国に撤退させ、メキシコ人から成る軍隊を再編成して治安を確保することから始めなければならなかった。マキシミリアンは、到着2か月後の1864年8月初旬から10月中旬まで、メキシコ駐留中のフランス軍を率いて首都以北へ軍事視察に出る。その間ほぼ毎日のように皇后カルロッタに宛てて、視察先の様子を詳細に報告している。8月15日付けの書簡では、首都の北に位置するケレタロ州サン・フアン・デル・リオへ赴き、フランス軍とメキシコ軍の士官及び兵士300人を夕食会に招待し、士気を高めるべくスピーチも行った。ケレタロは首都防衛の重要な都市であることから、住民が共和政府に寝返らないように、人々との親交の時間を確保すべく、翌日も滞在している[36]。

9月15日付けでマキシミリアンがカルロッタに宛てた書簡によれば、フアレス軍は後退しており、陥落は時間の問題だろうとの見通しを伝えている。また、ゲリラ化した先住民については、フアレスと心中することになるため気の毒に思っている一方で、治安を安定させるためにはゲリラと盗賊を厳しく取り締まり、処分することが急務だとして、法律の整備も急がせていた[37]。

ナポレオン三世からの再三によるフランス軍の撤退の要請に、マキシミリアンは共和軍と戦う帝国軍の編成を余儀なくされた。つまり、農民である先住民を兵士として養成しなければならなかった。この点について、フランス将校アンリ・ピエール・ロワズィヨンが、メキシコの農民は独立戦争に続く国の混乱の中で、戦闘には慣れていて、弾に当たることのない俊敏さを備え、1,000メートル先の敵を狙えるほどの技量を持ち、一日中撃ち続けることのできる体力も持ち合わせて

36 *Ibid.*, p. 116.
37 *Ibid.*, p. 136.

いると評価している[38]。しかし、彼らは戦闘意欲に欠け、臆病風に吹かれるのか、戦うより死を選ぶ向きがあるとこぼしていることからもわかるように[39]、先住民を帝国軍として組織することはできなかった。前述の将校の報告を受けたのか、先住民は敵を見ると武器を放り出して逃げ出してしまうと、カルロッタも嘆いている。帝国軍が組織できない状況にあって、皇后カルロッタの護衛のために送られたベルギー軍が戦力として投入されることにもなり、皇帝は母国オーストリアにも援軍を要請した。

1867 年初頭、ついにフランス軍は撤退する。ロワズィヨンは、両親に向けて次のように書き送った。

「ミラモン将軍の指揮下にあるマキシミリアン軍は、激戦の末、サカテカスを陥落させ、フアレスとその軍を撤退させた。マキシミリアンが我が軍なしで帝政を保つことができるか注目していたが、アメリカ合衆国が介入してこない限り、ひょっとして大丈夫かもしれないと思われる。」[40]

しかし、この予測は外れた。フランス軍撤退とともに、フアレス軍は息を吹き返し、勢い付いて、皇帝軍を包囲した[41]。皇帝には、ヨーロッパへ向かう途中、カルロッタは死んだと嘘の知らせがもたらされた[42]。第二帝政は何ら手段を講じることができずに崩壊した。

2）インフラ整備について

9 月 11 日付けの書簡で、皇帝は国内の主要な道路と鉄道の地図とベラクルス－首都間の軍事要塞を示した地図の作成をカルロッタに命じていた[43]。軍事作戦上、地図は必要不可欠な情報であることは当然のことだが、当時のメキシコの道路の悪さについては、カルロッタも閉口している。

「ここまで見た限り、君主制はこの国において機能し、人々の必要

---

38 Flores Salinas, *op. cit.*, p. 70. ロワズィヨンがメキシコ駐留中に家族に宛てた書簡はのちにパリにて刊行されている。
39 *Ibid.*
40 *Ibid.*, p. 191.
41 フランス軍撤退時、皇帝軍の勢力範囲は、首都、プエブラ、ベラクルス、ケレタロ、モレリアのみであった。
42 Díaz, *op. cit.*, p. 630.
43 Konrad, *op. cit.*, p. 133.

に応えていると思います。でも、これは壮大な実験です。なぜなら、砂漠は何とかしなければならないし、国の端から端まで距離も何とかしなければならないし、道の悪さも何とかしなければならないのです。つまり、すべてがカオスなのです。」[44]

マキシミリアンは、独立戦争以来の政治混乱で、すでに底をついていた国庫の立て直しのため、閉山も同然であった鉱山開発[45]を再開して産業振興を図るべく、交通網のインフラ整備が喫緊の課題となった。カルロッタはフランス皇后に宛てて、メキシコは鉱山資源に恵まれているが、鉄道が導入されていないと報告している[46]。この鉄道の導入は、経済発展の起爆剤となり得る重要なインフラ整備ではあったが、その前に帝国そのものが崩壊してしまった。

9月23日付けの書簡では、皇帝が産業振興担当のルイス・ロブレスの案内で、バヒオ地区の鉱山を訪ね、銀の精錬を見学していることがわかる。皇帝は、ロブレスが有能で、教養があり、かつ自由主義的思想の持主であり、国の近代化に貢献する人物として高く評価していた[47]。この評価は、第二帝政ではとかく外国人の登用が目立つと批判されるが、産業振興の要には現地の事情に精通した人材を配置していることの一例とみなすことができる。

マキシミリアンの宮廷や政府には、フアレスに仕えた者も重用されていた[48]。カルロッタが祖母に宛てた書簡によれば、マキシミリアンは人々に好かれ、尊敬され、熱狂的に支持されており、共和国政府側は、多くが君主派に寝返ったというよりマキシミリアン支持派を形成しているとして、その勢力を認めていることがわかる[49]。

しかし、この支持は長続きしなかった。政策が複数の言語で練られ、法律は国民にナワトル語に訳して伝える必要もあった。意思疎通や情報伝達において時間と労力を要し、実行に移すのに手間取った。さらに、皇帝夫妻が首都の居城であったチャプルテペック城の修繕維持費

---

44 Reinach Foussemagne, *ob. cit.*, p. 179.
45 カリフォルニアのゴールドラッシュの影響で金が発掘されはじめると、銀が貨幣として流通している国々では、金本位制に耐えるために、銀を確保することは重要であった。
46 *Ibid.*, p. 183.
47 Konrad, *op. cit.*, p. 142.
48 Reinach Foussemagne, *op. cit.*, p. 195.
49 *Ibid.*, p. 196.

を賄いきれず、首都から約 56.5 キロメートル離れたクエルナバカの荘園に移ったこともあり、皇帝による統治がどれほど確立されたかについては定かではなく、むしろ弱体の一途をたどったと考えるのが妥当であろう。

3）先住民に対する政策

第二帝政の紋章にも掲げられた言葉が、Equidad en la Justicia（司法の下での平等）であった。この精神を反映している政策の1つが先住民政策であったと考えられる。その先住民を近代国家の一員とするために、メキシコの新憲法を用意して、上陸したのであった[50]。メキシコに到着して間もなく、皇帝の留守を預かるカルロッタは、先住民3人に会い、地方警備隊の職権乱用の被害についての訴えを聴き入れている[51]。

先住民についての印象は、カルロッタが多く残している。以下はヘレン・レイナシュ・フサマージュ公爵夫人によって 1925 年に初めて公にされたカルロッタの書簡である。宛名は不明である。

「ここの人たちはもともと気取らず、性格が善いのです。彼らを首切り族だと思っている人たちがいますが、それは誤っています。軍隊をしっかり組織すれば、この人たちを従わせることは簡単です。なぜなら、彼らが自ら望んで蜂起しているわけではないからです。彼らは賢く、教えれば何でも学びます。従って、将来の明るい材料はあるのです。ただ、それはあちこちに散らばっていて、どこにあるのかわからなくなっているのです。ですから、それらを探し集め、成長させてやることは実現可能で、やりがいのある仕事ですが、その道のりは長く険しいでしょう。」[52]

カルロッタは同様の内容を次のように祖母に宛てている。

「（先住民たちは）はマックス[53]に絶大なる信頼を寄せていて、彼も彼らに力を貸してほしいと願っています。彼らは素直で、今では軍事蜂起するなど考えられないことです。彼らは誰も愛したことがない

50 全文のスペイン語訳は Zamora, *op. cit.*, pp. 612-618 を参照のこと。
51 Konrad, *op. cit.*, p.117.
52 Reinach Foussemagne, *op. cit.*, p. 194.
53 マキシミリアンのこと。

のです。なぜかと言うと、誰も彼らを愛さないからです。しかし、彼らは優秀で、向上心があり、愛国心も持ち合わせていて、漠然とではありますが、明るい未来が待っていると予感しています。」[54]

皇帝は先住民に関わる案件を積極的に皇后に委ねていたようである。1865年4月に先住民保護委員会(Junta Protectora de las Clases Menesterosas)の発足を提案し、カルロッタに法案成立を託した。

「皇后に先住民保護委員会の件は任せてある。皇后が万事、うまくいくように準備し、法案を内閣に問題なく通す見通しが立てば、そのようにし、私にも報告することになっている。法案成立後に大臣たちが本件に宿る自由主義の精神を逆戻りさせないためである。これは700万のメキシコ人、つまり国民の大部分にとって、これほど重要で、意義深いものなのである。」[55]

カルロッタは法案を通し、マキシミリアンに下記のように報告した。

「私のプロジェクトはすべて通りました[56]。先住民のもです。提出したときにはどよめきが起こりましたが、歓迎されたようでした。反対票は1票だけでした。」[57]

もともと複数のヨーロッパ言語を操る二人は、先住民言語であるナワトル語を学び、法令をナワトル語でも発布するように命じていた。この委員会では、先住民が政府に対して直接苦情申し立てができ、解決に向けての忠告を得ることができた。また、先住民のための法律を作ることができた。先住民は労働者であり、彼らに体罰を与えること、負債の肩代わりに労働を強いることが禁じられ、労働時間の制限も設けられ、事業主はそこで働く子供たちのための学校を設立することが義務付けられた[58]。フアレスも初等教育の導入に力を注いだが、教会財産の解体を推進し、教会のみならず市参事会をはじめ先住民共同体の共有地までも接収した。しかし、第二帝政では、先住民の置かれた経済状況を改善するために、先住民の共有地の没収は行わず、彼らの

---

54 *Ibid.*, p. 194.
55 Konrad, *op. cit.*, p. 216.
56 書簡はドイツ語で書かれている。スペイン語訳は han pasado todos mis proyectos である。所有形容詞の一人称が使われている点で、皇后が皇帝代理としての務めを果たしていたことが表れていると考えられる。
57 *Ibid.*, p. 220.
58 Pani, 1998, p. 584.

財産を保証した。

1865 年夏、カルロッタは先住民のグループから、地主たちに土地を乗っ取られたとの苦情申し立てを数件受けた。カルロッタは、次のように答えている。

「もう少し辛抱してほしい。もうすぐ援助と保護の手が行きますから。彼らの中にはチマルポポカのことを知らない者がいたので、彼に相談するように言いました。すると、『その先生（Licenciado）にいくら支払えば、我々の話を聞いてくれるのか』と尋ねてくるので、「払う必要はないのですよ。彼も先住民で、あなたがたを大切に思い、助けてくれます。」[59]

その先生とは、ファウスティーノ・ガリシア・チマルポポカ（1805-1877）のことで、先住民保護委員会の委員長を務めることになる人物であった[60]。もともと大学でもナワトル語の講座を持っていた彼は、皇帝夫妻にナワトル語を教えていた。おそらく、法令のナワトル語翻訳なども担当したのだろう。当時は、先住民の土地を巡視する役目にあったと考えられる[61]。

しかし、いずれの政策は十分に実現されなかった。皇帝軍は敗退を強いられ、国庫も底をついていたからであった。また、アメリカ合衆国は再び北の国境を脅かし、南ではユカタン半島が分離運動の兆しを見せ始めていた。皇帝は、最も信用できる人物としてカルロッタをヨーロッパに送り、この危機を乗り越えようとした。

3．帝政の維持

マキシミリアンは帝政がメキシコ国民に歓迎されていることを確認すると、体制維持のために基盤固めを図っていく。第 1 節で検証したように国民と距離が近い皇帝の存在を印象づけることに成功し、第 2 節で分析したようにメキシコの近代化の必要性を政策として打ち出すだけではなく、ローマ以来の理想国家の形としての帝国の存続を意図したのである。

---

59 Konrad, *op. cit.*, p. 217.
60 *Ibid.*, p. 582.
61 Visitador General de Posesiones y Pueblos de Indios.

1）独立記念日

その1つの表れに、独立記念日祝賀行事をドローレス村のイダルゴ神父の家で実施するというものであった。祝祭を利用して、君主の権力を顕示するというルネサンス以来の伝統的な手法である。1864年9月13日付けの書簡では、「ハプスブルグ朝の皇帝が独立を祝うとは、さぞ滑稽に映るだろう」
とも[62]、9月20日付けの書簡では独立記念日のスピーチがうまくいったと満足気であった。宿舎に戻ると、メキシコ人たちが「万歳（ビバ）！」と祝福した。翌日70人を招待して午餐会を主催し、独立の英雄たちに乾杯して、祝っている[63]。

マキシミリアンはメキシコには祝祭が多いとして、休日の削減を命じる一方で、帝政の確立のために祝賀行事が重要だと考えたようである。そこで、この独立記念日を帝政の基盤確立のため効果的に利用した。イダルゴ神父に代わって独立宣言を唱えるだけではなく、後述するように、世継ぎの披露目も、この日に行っている。

1866年は皇帝になって3度目で、最後の独立記念日であった。マキシミリアンは、パリからローマへ向かっていたカルロッタに宛てて次のように書き送っている。

「（今年の）9月16日はこれまでよりも立派で、ずっとよかった。今年ほど宮殿に人が集まったことはないほどだ。とても立派で、品格があって、感動的だった。誰も欠席しなかったし、遅刻しなかった。僕がスピーチをしたら、皆が熱狂して、大声で叫んだ。『皇帝万歳！』『皇后万歳！』の声が、美しい長い＜イトゥルビデの廊下＞に響いたんだ。」[64]

この時マキシミリアンは、「真のハプスブルグの皇帝であれば、苦難の時に皇帝の座を降りることはない」[65]とスピーチし、退位を思いとどまった。彼はこの独立記念日を重要なメッセージを国民に発信する場所としていた。

---

62 Konrad, *op. cit.*, p. 136.
63 *Ibid.*, p. 141.
64 *Ibid.*, p. 330.
65 *Ibid.*, nota 181.

2）世継ぎ問題

帝政は世襲とされていた[66]。つまり、世継ぎが必要であった。カルロッタ自筆のメキシコ帝国憲法草案第10条には、憲法が皇帝に授けた権力はハプスブルグ＝ロレナ朝フェルナンド一世（マキシミリアンのこと）の直系による世襲制であると明記されている。直系の子孫が生まれない場合は、皇位継承権を決定する法案を3年以内に上院に提出するとしている[67]。

しかし、皇帝夫妻には当時まだ子供がなかった。マキシミリアンはカルロッタを残して度々首都を長期間留守にし、また当時の王侯貴族は別々の寝室で寝るのが常であったこともあり、夫婦仲は良くなかったと考えられている。実際、多くの上流階級の女性がマキシミリアンの寝室に出入りしたという証言も伝わっている[68]。いずれにせよ、マキシミリアンは常に「愛する天使へ」と手紙を書き出し、カルロッタは「愛する宝物へ」と返信している。カルロッタは病弱な夫を心配する文章が多いのに比べて、マキシミリアンの手紙は愛情に溢れている。例えば、「私の命、私の慰め」「ここ[69]は楽園のようなところだけれど、もし、私の天使、君がそばにいてくれたら、ここは天国だよ」「いつになく気分はよいが、一つだけ足りないものがある。それは君だ。もちろん、いつも私にとっては君が第一なのだけれど。いつになったら一緒に二人で幸せに静かな時間を送れるのだろうか。二人で頑張っていれば、その日はきっと来るだろう」と書き送り、「真実の深い愛で君を抱擁する」と締めくくっている[70]。

しかし、夫妻は世継ぎ問題を解決しなければならなかった。マキシミリアンが先住民の子供に自分の名前を授けて洗礼を受けさせ、皇子として迎えたというエピソードは有名である。しかし、マキシミリアンの書簡によれば、事情はやや異なる。

「君に言い忘れていたが、ケレタロでは、ゴルダ山脈の人たちからの贈り物だとして先住民の赤ん坊をもらったよ。その子の親が誰だか

---

66 Zamora, *op. cit.*, p. 613.
67 *Ibid.*
68 Reinach Foussemagne, *op. cit.*, p. 249.
69 首都からベラクルスの港に向かう途中にあるオリサバ（Orizaba）の町のこと。
70 Konrad, *op. cit.*, pp. 186-187.

誰も知らないそうだ。いずれにしても洗礼できないほど貧しかったんだろう。引き取って、洗礼をしてもらって、フェルナンド・マキシミリアン・カルロス・ホセという名前になった。いい乳母を探させているから、ケレタロで育てて、成長したらメキシコ・シティーに送るようにする。」[71]

これはマキシミリアンとカルロッタがメキシコに到着して間もない1864年8月に起こった出来事で、文面からは、先住民の孤児を放っておけなかったということが伝わってくる。カルロッタは「生まれたばかりの赤ん坊を乳母から早々に引き離してはいけないわ。でも、私たちの子供に会うのは楽しみだわ。象徴的な贈り物ね」[72]と返事を書いている。赤ん坊は数日後に死んでしまったが[73]、帝政が発行する新聞は、皇帝が先住民を世継ぎにしたと報じたのであった[74]。

それから約1年経った1865年9月16日、皇帝夫妻は初代メキシコ皇帝となったイトゥルビデ将軍の孫で、わずか2歳のアグスティンを皇位継承者として宮廷に迎える[75]。マキシミリアン自身によれば、世継ぎには弟カール・ルイスの息子を譲ってもらうことを考えていたが、揺さぶりをかけるために芝居を打ったという。つまり、ハプスブルグ朝の血を引かないアグスティンに財産が渡ってしまうと脅しをかけたというのであった[76]。カール・ルイスからの返事を待つ間、アグスティンとの見せかけ養子縁組が進んだ。しかし、子供を皇帝に渡してパリで暮らしていたアメリカ人の母親アリス・グリーンが後悔して、再三にわたって在仏アメリカ大使館を通じて返還を求めてきた。皇帝夫妻は子供を母親に返すことに異存はなかった。しかし、これは世継ぎがいないことを内外に示すことになり、とりわけアメリカ合衆国に対して第二帝政の不安定さを露呈することになりかねないと躊躇したようであった。最終的には、フアレス軍を前に第二帝政の崩壊が避けられないと悟った皇帝は、アグスティンを返すことを決意した[77]。

---

71 *Ibid.*, p. 127.
72 *Ibid.*, p. 129.
73 Zamora, *op. cit.*, p. 180.
74 Konrad, *op. cit.*, p. 128, nota 14.
75 Reinach Foussemagne, *op. cit.*, pp. 245-247.
76 Zamora, *op. cit.*, p. 188.
77 *Ibid.*, p. 186.

1865年12月23日付けで、カルロッタ自身は祖母に次のように書き送っている。

「私には世継ぎも別の王位継承者候補もいません。今のところは、別の役目をあれこれと果たさなければならないのです。でも、こうしたことで本来しなければならないことを怠るようなことがないように努めます。それ以外では、マックス[78]と私は政治やそのほかすべてにおいてお互いに心を一つにしていて、何があっても二人が離れることなどありません。」[79]

実際、カルロッタは妊娠しようとメキシコの薬草をいろいろ試したようである。そして、様々な薬草を飲んだことが毒殺の恐怖へと転じていき、発狂する引き金の1つになったようである。

おわりに

このロイヤル・カップルは伝統的なヨーロッパの帝王学を継承しつつも、自由主義的な思想のもとに教育を受け、それを帝国の統治に反映させようとした。つまり、メキシコの君主派が求めていたほど保守的な考えの持ち主ではなく、共和派より一層、自由主義的であったため、双方から受け入れられず、第二帝政は信頼と支持を失っていくことになった。

本稿では、質的にも量的にも制約があったマキシミリアンとカルロッタの往復書簡を主たる資料として、第二帝政についてメキシコ人が外国人の二人を君主として受け入れたかどうか、皇帝夫妻が目指した国家はどのようなものであったか、帝政の維持はいかにして図られたかの3点について考察を試みた。今回は皇帝夫妻による主観的な印象からの考察ではあったが、それでもメキシコ人がフアレス軍との戦時下にあったにもかかわらず皇帝夫妻を歓迎したことは確認できた。世継ぎ問題で揉め、財政がひっ迫してくると、マキシミリアンは執務室や荘園に引きこもるようになっていき、自ら国民から距離を置いたとも考えられる。また、目指した政治も実現しないままに終わった。組閣の遅れ、使用言語、メキシコの保守派への失望、登用すべき人材不足、など多くの問題を抱えたが、産業革命が進行するヨーロッパ列強

78 カルロッタは夫を「マックス」の愛称で呼んでいた。
79 Reinach Foussemagne, *op. cit.*, p. 238.

並みの国家を志向していたことは明らかである。しかし、ナポレオンの支援も届かず、すべてが手遅れであった。

マキシミリアンの最後の手段は、カルロッタを使者としてナポレオン三世と交渉し、フランスの支援をとりつけることであった。マキシミリアンがカルロッタに寄せた信頼は絶大であり、彼女の政治力に第二帝政の将来を賭けたと言ってよい。次の文面から、それを伺うことができる。

「君に新たな指示は送らない。だから自分の直観を信じて、自分自身で判断してくれ。これほどにも重大な事態になったときは、瞬時に判断できなくてはならない。大西洋を越えて指示を送るなどは不可能だから。」[80]

しかし、この時すでにカルロッタは精神を病んでおり、メキシコ第二帝政を建て直すための支援をとりつけることは叶わなかった。かつてカルロッタは第二帝政の組閣人事が進まない時に、マキシミリアンに宛て、「赤ん坊を生む時の痛みにも似て、真の人生が一人の人間に活力を与える前に、帝国を立ち上げるには様々な難局を乗り越えていかなければならないのです」、と書き送ったことがある[81]。こうした覚悟を礎にして始まったメキシコ第二帝政は、決して歴史の休止ではなく、独立後に混乱の半世紀を経たメキシコがヨーロッパ諸国と並ぶ国家を建設する上で、必要なプロセスであったと言えるだろう。

資料

Archivo General Municipal de Puebla, Puebla, México Publicaciones, *Boletín oficial de la prefectura política del Departamento de Puebla.*

参考文献

Advenimiento de SS. MM. II Maximiliano y Carlota al trono de México, Documentos relativos y narración del viaje de nuestros soberanos, de Miramar a Veracruz y el recibimiento que se las hizo en este último puerto y en las ciudades Córdoba, Orizaba,

[80] Konrad, *op. cit.*, p. 312.
[81] *Ibid.*, p. 175.

Puebla y México, Edición de "La Sociedad", México, 1864.

Arenal Fenochio, Jaime M., del, "La protección del indio en el Segundo Imperio Mexicano: la Junta protectora de las clases menesterosas", en *Ars Iuris*, 6, 1991, pp. 1-35.

Conte Corti, Egon Caesar, *Maximiliano y Carlota*, Fondo de Cultura Económica, México, 1997.

Crespo Orozco, María Elena, "Afirmación de un destino, Festividades por el cumpleaños de la emperatriz Carlota (1864-1867)", *Históricas*, núm. 98, 2013, pp. 2-10.

Díaz, Lilia, "El liberalismo militante", en *Historia General de México*, El Colegio de México, México, 2000, pp. 583-631.

Flores Salinas, Berta, *Cartas desde México. Dos fuentes militares para el estudio de la Intervención francesa. 1862-1867*, Miguel Ángel Porrúa, México, 2001.

Galeana, Patricia, *Las relaciones Iglesia-Estado durante el segundo imperio*, Universidad Nacional Autónoma de México, México, 1991.

-----, *El tratado McLane-Ocampo. La comunicación interoceánica y el libre comercio,* Centro de Investigaciones sobre América del Norte / Editorial Porrúa / Universidad Nacional Autónoma de México, México, 2006.

Kollonitz, Paula, *Un viaje a México en 1864*, Traducción de N. Bertlán, México, Secretaría de Educación Pública, 1976.

Konrad, Ratz, *Correspondencia inédita entre Maximiliano y Carlota*, Traducción de Elsa Cecilia Frost, Fondo de Cultura Económica, México, 2004.

Krauze, Enrique, *Siglo de caudillos. Biografía política de México*, Tusquet, México, 1994.

Loizillon, Hanri Pierre, *Lettres sur l'expédition du Mexique, 1862-1867*, Ernest Flammarion Editeur, Paris, s/f.

Mohssine Assia, y Vicente Quirarte, "Rito, sacralidad y fiesta: escenografías de la ciudad de México durante el segundo imperio", *Sociocriticism*, Vol. XXV, 1 y 2, 2010, pp. 197-216.

Moyano Pahissa, Ángela, *Los belgas de Carlota. La expedición belga al imperio de Maximiliano*, Pearson, México, 2011.

Pani, Érika, "¿<Verdaderas figuras de Cooper> o <pobres inditos infelices>?", *Historia mexicana*, (67) enero-marzo, 1998, pp. 571-604.

-----, *Conservadurismo y derechas en la historia de México*, 2 vols., Fondo de Cultura Económica, México, 2009.

Paso, Fernando del, *Noticias del Imperio*, Mondadori, 1987.

Quiarte, Martín, *Historiografía sobre el Imperio de Maximiliano*, México, Universidad Nacional Autónoma de México, México, 1970.

Reinach Foussemagne, Hélène, *Carlota de Bélgica. Emperatriz de México*, Traducción y edición de Martha Zamora, Gráfica, Creatividad y Diseño, S. A., México, 2014.

Weckmann, Luis, *Carlota de Bélgica. Correspondencia y escritos sobre México en los archivos europeos*, Editorial Porrúa, México, 1989.

Zamora, Martha, *Maximiliano y Carlota. Memoria presente*, Gráfica, Creatividad y Diseño, S. A., México, 2012.

Web 資料

Pani, Érika, "Maximiliano de Habsburgo, Monarca ciudadano", Ciclo de Conferencias Otoño 2016 "Nuevas interpretaciones de la historia nacional", el Centro de Estudios de Historia de México, Fundación Carlos Slim, México, el 22 de agosto de 2016.
https://youtube.com/watch?v=WhVuTcseiYo（2016 年 9 月 5 日確認）

Rivas Gómez, Tomás, "Las virtudes de Maximiliano, en el imaginario conservador, el candidato natural al trono de México", Repositorio Digital Institucional, Instituto Politécnico Nacional, México, 27pp.
http://www.repositoriodigital.ipn.mx/handle/123456789/5442?s

how=full（2016 年 9 月 4 日閲覧）

スペイン語統語論における「内心構造／外心構造」概念の発展
—「単心構造／複心構造／二心構造」の提案—

仲井邦佳

0. はじめに

言語における「内心構造」(estructura endocéntrica)と「外心構造」(estructura exocéntrica)は，Bloomfieldが提唱し，その後の言語学者によって受容され，発展させられてきた概念として知られている。文法記述にとって有益な道具となる概念であることは間違いないであろう。これらの概念のおかげで「構成要素」(constituyente),「核」(núcleo),「修飾」(modificación),「補文」(complementación)などといった概念も規定することができる。しかし，Bloomfieldの提唱した「内心構造／外心構造」の解釈はその後の研究者によって，または言語学の様々な方法論において一様ではなく，様々な立場から様々な捉え方がされている。そもそも彼の提唱自体(*Language*, 1933)が決して詳細なものではなく，後々に発展，修正されるべき運命にあったと言えるだろう[1]。

また，言語の統語関係を表す概念には他に「等位 coordinación／従位 subordinación」がある。さらにこれと密接な関係があるギリシア語起源の「並列 parataxis／従列 hipotaxis」にも辿り着く[2]。内心構造と外心構造という概念とこれらの関係も整理しつつ，内心構造／外心構造の概念を修正，再編を行うこととする。

スペインの言語学者でBloomfieldの「内心構造／外心構造」の概念の有用性に着目し，批判的考察を加えたうえに独自の修正を加えたのがTomás Jiménezである。本稿では彼の論説に沿いつつ，それに論評を加えたうえで，最終的には筆者独自の新概念の提案へと展開する。Bloomfieldが提唱した概念は，「内心／外心」という2分法であったが最終的に筆者が提唱するのは3分法であることを予め明らかにしておきたい。

---

[1] 「内心／外心」の概念を使用した学者の例として Hockett (1958), Tesnière (1959), Martinet (1965), etc.
[2] Cfr. Nida (1948).

筆者の提案する概念の特徴は，スペイン語のいわゆる「比較構文」，「結果構文」の分析のもとに第3のカテゴリーを立てるものである。いったん文レベルの構造に基づいて「内心構造」と「外心構造」に代わる3構造を規定したのち，それを句レベルに応用する。筆者の構造分類の試みはレベルにかかわりなく統一的に適応できるものを目指しているので，文構造の新分類は句構造においてもそのまま応用可能であることを確認する。

1. Bloomfield の概念

1.1. *Language* (1933)での記述

Bloomfield はその主著 *Language* (1933)[3]の統語論の章において統語構造をまず内心構造(endocentric)と外心構造(exocentric)の2つに大別する。彼自身が挙げている例でいうと *poor John* は内心構造，*John ran* は外心構造となる。

その後，内心構造はさらに「等位構造」(co-ordinative)と「従位構造」(subordinative)の2種類に分岐する。まず後者の例からいうと「形成句」(resultant phrase)はその成分のうちのいずれかと同じ「形式部類」(form class)[4]に属するという。この成分を「主要部」(head)と呼ぶ。*poor John* という例では，全体の *poor John* はその部分的要素である *John* と同じ形式部類(名詞句)に属しているので主要部である。一方の *poor* はそれを修飾している要素である。言い換えれば，名詞句全体 *poor John* とその構成要素の名詞 *John* は同じ機能を持ち，このような構造のことを内心構造と定義する。

さて，内心構造のもう1つのタイプ(等位構造)であるが，Bloomfield は例として *boys and girls* を挙げている。この句においてその構成要素である *boys*, あるいは *girls* は全体の *boys and girls* と同じ形式部類に属するのでやはりこれも内心構造であるとする。この構造の構成要素は3つであり，2つのメンバー(member)と等位詞(co-ordinator)

---

[3] 本稿では日本語訳(三宅，日野：1962)を参考にした。ただし，出版時期が古いため文法用語で現在定着しているものと異なることが多く，そのような場合では筆者自身の判断で適切な用語を用いた。例えば翻訳版では“Endocentric Structure”を「内心的組立」としているが，「内心構造」としている。

[4] 「形式部類」(form class)とは，同じ統語環境に現れえる要素の集合である。Cfr. 1933, p. 185.

であるとする。

この例ではメンバーは2つであるが，等位構造は3つ以上のメンバーを持つこともちろんあり得る。また，結成句とその構成メンバー間には微細な差異があることがあり，その例として彼は *Bill and John* を挙げる。それぞれの要素は単数だが，全体は複数であるからである。

さて，内心構造に対置する外心構造であるが，Bloomfieldは次の3種類を挙げている。

a)「主語＋定動詞」
b) 前置詞句
c) 従位構造(従属節，従属句)

a)の例は *John ran* である。全体の動詞句はその構成要素の主語とも動詞ともその形式部類が異なるので内心構造ではなく外心構造であるというのである(Bloomfieldの用語でいうと，その構成要素はそれぞれ「主格表現」「定動詞表現」である)。この種の構文を果たしてBloomfieldの主張するように外心構造と看做してよいのかは議論の余地がある。

次にb)であるが，いわゆる前置詞句は外心構造であると言う(ただし，Bloomfieldは「前置詞句」という語は使ってはいない)。例として，*beside John*, *with me*, *in the house*, *by running* を挙げている。それぞれの直接構成要素は「前置詞」と「(代)名詞(句)」であるが，どちらもが全体の構造の性質とは異なっている[5]。

3つ目の外心構造の種類は「従位節」である。例として *If John ran away* 等を挙げている。構成要素の1つは接続詞 *if* でもう1つはそれ以外の *John ran away* であるが，いずれの要素も全体の要素とはその所属する形式部類が異なっている。

先ほどの例文は節(clause subordination)であったが，全体が句の場合(phrase subordination)もある。例として *as I* や *than John* を

[5] Bloomfieldの用語ではそれぞれ「前置詞表現」(prepositional expression)と「対格表現」(accusative expression)である(§12.10)。

挙げている[6]。

なお，Bloomfield は外心構造には，全体の性格を特徴づける構成要素があり，それは先に挙げた 3 つのタイプではそれぞれ定動詞，前置詞，接続詞であると言っている。

Bloomfield は「内心構造／外心構造」の概念を語レベル，つまり形態論レベルの分析にも使用している。例えば，*blackbird*（クロウドリ）は一種の *bird* であるので複合語 *blackbird* がその主要メンバーと同じ機能を持ち，内心構造だと言う。一方，*turnkey*（看守）では，その構成員は *turn* という不定動詞と *key* というその目的語であるが，全体は「看守」という人を表す名詞であり，全体とその構成メンバーのいずれとも同じ機能ではない。したがって外心構造とする。

しかし，そもそも語の内部構造分析のレベルでも「内心構造／外心構造」の概念を応用すべきなのか[7]。言い換えれば，そもそも形態素レベルで構造があるのか。もちろん意味的には *black* と *bird* の関係を考えることは可能であろう。しかしその関係は統語関係ではない。Bloomfield 自身が複合語においては，メンバー間の関係は必然的に曖昧であり，「内心／外心」の概念はしばしば当てはめることができないと述べている(§14.5)。つまり，できないことが多いことを認めているわけである。実際に言語学者によって様々な解釈がされているわけであるが[8]，筆者は形態素レベルでの「内部構造／外部構造」の必要性も妥当性も認めない立場であるので本稿では形態素レベルはこれ以上扱わない。

いずれにせよ，最初の定義からして内心構造は積極的定義だが，外心構造は消極的定義，つまりその他諸々が含まれるものとなっている。なお，Bloomfield は「いかなる言語でもその構造の大部分は内心構造である」と言っている(§12.11)。そして，内心構造はその下位区分(等位構造／従位構造)は明確であるが，外心構造の下位区

---

[6] Bloomfield は比較構文の後半部(*as I* や *than John*)を節とは認めていないが，前置詞句とも考えていないようである。あえて「句」(phrase)とは呼んでいるもののその位置づけに関しては特に言及がない。比較構文の位置づけについては後に考察する(第 3 節)。

[7] Hincha (1962, p. 272)は“endocentric”と”exocentric”は統語構造の分析にのみ用いるべきとして，形態素レベルには“tautocentric”と“heterocentric“という語を提案している。

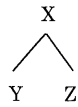
[8] Nida (1948)のように形態素レベルでも「内心／外心」の概念を認める者もいれば，Hincha (1962)のように統語構造に限定する者もいる。

分はあまり明確ではない。

1.2. Bloomfield 理論の問題点

さて続いて Bloomfield の「内心構造／外心構造」概念の問題点を考えたい。まず，Bloomfield が使用する形式部類(form-class)の問題点であるが，Jiménez (1997)が実に適切な指摘をしている。分布主義の原理を考慮してみれば，形式部類の概念の曖昧さはむしろ当然の帰結であると言う。分布主義においては同じ「環境」(environment)に現れる要素をもって形式部類を定義しているからである。つまり，以下に見られるような枠組みが考えられる。

図 3



ある環境において X が Y と Z の構成要素から成っているとき，以下の 3 通りの可能性がある。

a) X が Y または Z と同じ形式クラスであるとき
X=Y≠Z，または X=Z≠Y) → 内心構造(従位)：*poor John*
b) X が Y とも Z とも同じ形式クラスであるとき
X=Y=Z → 内心構造(等位)：*boys and girls*
c) X が Y とも Z とも異なる形式クラスであるとき
X≠Y≠Z → 外心構造：*beside John*

このようにある構造 X の内部構造は，全体とその構成要素との関係のみで規定される。必然的に上記のように 3 通りの組み合わせがあり，それぞれ「内心構造(従位)」，「内心構造(等位)」，「外心構造」に相当する。それ以外の関係はあり得ないのである。結局のところ Bloomfield の基準自体はたいへん明確である。しかし，分布主義にはその限界がある。

2. スペイン語におけるその後の発展

スペイン語の言語学で「内心構造／外心構造」の概念を自身の研究に適用した研究者として García Berrio (1970)や Gutiérrez (1994)らが挙げられるが，中でも Jiménez (1997)は詳細に両概念を批判し発展させたものである。

2.1. Jiménez の概要

続いて Jiménez による既存の「内心構造／外心構造」理論に対する批判と修正を見ていくことにする。主に Jiménez (1997)を参照したが，合わせて(1993ab, 1994, 2000)も参考にしている。

Jiménez は Bloomfield の分布主義における当該概念の規定に対して自身が掲げる機能主義(funcionalismo)の観点から「内心構造／外心構造」を再解釈，再配置する。彼によれば，全ての言語単位を構成するメカニズムは極めて単純なもので，次の 2 種類に還元できる。

a) A (＋B)
b) A& B

上記の枠組みで使用される記号であるが，「＋」は「付加」(adición)を意味し，「&」は「連鎖」(concatenación)を意味する。まず，a)の表すところは，要素 A は別の要素 B によって「拡張」(expansión)されることができる。しかし，この B の付加によって元の A の文法的性格が変化することはなく，B の付加による変化はあくまで量的な変化にとどまる。A は必要不可欠な要素であるが，B はオプションである。機能文法的に言えば，A は「核」(núcleo)であり，B は「修飾語」(modificador)である。また，別の言い方をすれば，これは「従列」(hipotaxis)の構造である。この構文がまさに内心構造に相当する。

一方，b)で表されている構造は，A と B の&を介した「連合」(asociación)である。A と B は同じ階層(jerarquía)にある。Jiménez はこれを「連合構造」(construcción asociativa)と呼ぶ。またこれは，「並列構造」(parataxis)に相当する。これを上述の図に書き加えると以下のようになる。Jiménez が挙げている例文も添えておく。

a) 内心構造(従列)： A (＋B)　**Lo haré** *con tu oposición.*

b) 連合構造(並列)： A&B　**Lo haré** aunque **te opongas.**

さて，連合構造であるが実は一様なものではなく，その内部にさらなる分類が必要であるとし，Jiménezはその下位区分として「等位構造」と「外心構造」を位置づける。図示すると，

図 4

- 内心構造(従列) → A (＋B)
- 連合構造(並列)
  - 等位構造 → A&B...&n
  - 外心構造 → A&B

等位構造の「A&B...&n」の意味するところは，等位構造においてはその構成要素の数は理論的に無限であることである。

2.2. 内心構造

上記のように3つに大きく分類したが，最も理解しやすいのは内心構造であろう。Bloomfield の従位構造に相当している。いわゆる完全語(palabra plena: 実詞[9]，形容詞，副詞，動詞)が修飾語を伴い，句になったとき(それぞれ実詞句，形容詞句，副詞句，動詞句)，それらの句の構造は内心構造である。以下に例を挙げる。

(1) Comprendo tus [*desgraciadas* **circunstancias**]　—実詞句

(2) Tus circunstancias son [*francamente* **desgraciadas**].　—形容詞句

(3) Lo hizo [*muy* **rápidamente**].　—副詞句

(4) [**Llegamos** *a nuestro destino*].　—動詞句[10]

[9] Jiménezは「名詞句」(frase nominal)と「実詞句」(frase sustantiva)を異なった構造として記述している。本稿ではJiménezの論説として使用されている場合のみ訳を区別し，それ以外では「名詞句」を一般的な意味で用いることにする。

[10] Jiménezは「動詞句」(frase verbal)という用語を使用しているのでここではそれに従っているが，研究者によっては「節」(cláusula)や「文」(oración)であることはいうまでもない。

それぞれの例で[　]で囲まれた部分が内心構造である。ボールドが内心構造の核であり，イタリックが修飾語である。

上記の例のいずれの場合も核となる語が拡張を受けているが，その基本的な意味と統語的性格には変化がない。つまり，その変化は単に量的なものであって質的な変化ではない。例えば，(1)の例でいえば，最初の名詞 *circunstancias* が形容詞 *desgraciadas* の修飾を受けることによって意味的に豊富化，限定が行われたが，文法的には名詞が名詞句になっただけで本質的な変化は見られない。他の形容詞句，副詞句，動詞句においても全く同じことが言える。

次に文より上位の単位が内心構造である場合を見る。

(5)[*Pensándolo bien*, **iré y veré qué pasa**]. —拡張された等位文

(6)[*Verdaderamente*, **si no vienes, eres tonto**].

—拡張された外心構造文

まず，内心構造であるのは，[　]で囲まれた全体のことであって，その構成要素内のことではない。(5)の例でいえば，*iré y veré qué pasa* という等位文が *Verdaderamente* の修飾を受けている。この *Verdaderamente* はいわゆる「文修飾語」(modificador oracional)と呼ばれるもので後続の文全体を修飾するものである。そして，全体の構造が *iré y veré qué pasa* という等位文を核とする内心構造となっている。

2.3. 等位構造

既に見たように等位構造は Bloomfield においては内心構造のうちの 1 つとされた。Jiménez はこれを内心構造から分離した。しかし，かといって外心構造の方に入れ込んだのではなく，外心構造でもない第 3 の構造とした。ただ，「並列／従列」の区分で言うと「並列」であるとし，その下位区分として外心構造と対立させた(既に図 4 で見たとおりである)。

Bloomfield 以降の研究者の多くが既に等位構造を内心構造の一種

とはしなかったが[11], Jiménez は明確にそれを内心構造でも外心構造でもない第三の構造(等位構造)であることを明確にしたことは評価に値することである。

内心構造ではない理由として,内心構造は1つの核を持っている構造とすべきであり,逆に言うと1つの核が拡張によって別の構成要素を付加された結果が内心構造であるとすべきである。

(7a) **Carmen estudia y Juan trabaja.**
(7b) *Carmen trabaja y.

例(7a)の後半部を削除すると(7b)となり等位文としての構造が崩れてしまう(非文となる)。この等位構造は2つの要素から成っているのではなく、3つである。つまり、「要素 A+接続詞+要素 B」が基本構造であり、従位の内心構造とは決定的に異なっている。内心構造は唯一の核を持つ従位構造に限り,これとは根本的に異なっているという構造は内心構造から分離すべきである。

ただし, Jiménez の定義する等位構造には一点大きな特徴がある。通常の研究者よりもその範囲を狭く取っている。以下の例文は典型的な等位構造である。

(8) Me duele la cabeza y tengo sueño.
(9) Vete, quédate, o haz lo que te dé la gana

(8)と(9)は等位構造の例であるが, 前者は連結されている要素が2つであるが,後者では3つである。理論的にはさらに4つ,5つ...n,とその数は無限であり,この開かれた性格を等位構造を定義するのに重要視している。したがって, Jiménez にとっては等位文は連結文(Copulativa)と「離接文」(Disyuntiva)のみであり, 多くの文法家が含めている「逆接文」(Adeversativa)等は等位文に含めない。筆者は逆接文等も等位に含める立場である(Nakai, 2014)。

[11] 例えば, Dik は等位はその構成要素に還元できない文法的特性を持っていると言って Bloomfield が等位構造を内心構造に含めたことを批判している(1968, pp. 21-24)。

また，Jiménezは「等位句」とか「等位文」という語を避けて「等位構造」(estructura coordinativa)と呼んでいる。これは，等位構造は様々な種類があり得るので全てを包括するには「構造」と呼んでおくしかないという理由による。

2.4. 外心構造

以上見てきた内心構造と等位構造に比べて最後に残った外心構造はより多くの問題を孕んでいる。そもそも，先に見たようにその定義が消極的なもの，つまり内心構造でないものを外心構造としたことから統一性に乏しいカテゴリーになっている面は否めない。

さて，Jiménezによれば外心構造にはそれを構成する要素が3つの場合と2つの場合がある。彼の用語によると「三肢構造」(estructura trimembre)と「二肢構造」(estructura bimembre)である。まずは前者の方から考察する。

2.4.1. 三肢構造(trimembre)

外心構造においては，うち2つが構成要素(miembro)で残りが連結要素(nexo)となる。連結要素にはさらに2種類があり，接続詞の場合と *ser* や *estar* のようなコプラである場合である。例えば，

(10) **Ven** si **te atreves**.[12]
(11) **Antonio** está **cansado**.

(10)と(11)はともに三肢構造の例であるが，前者は接続要素が接続詞である場合であり，後者が繋辞動詞である場合(叙述構文)である。これらの構造は筆者には根本的に大きく異なると思われるが，Jiménezは同じ三項構造の下位区分として扱っている。

まず前者の条件文であるが，いわゆる「二極文」(oración bipolar)のことである[13]。二極文においてはそれを構成する2つの節のいずれもが全体の文と同じ機能を持っていないとされる。例文で言うと，*si*

[12] ただし，Jiménezはのちになって条件文や譲歩文を二極文とみなすことを止めて従位構造とみなすようになる。Jiménez (2011)参照。
[13] 二極文については Rojo (1978)を参照。

te atreves が「条件節」(condicionante), *ven* が「帰結節」(condicionado)であるが，これらのうちどちらが欠けても条件文が成立しないので両者ともに必須要素であるとされ，したがって二極文とされている。

二極構造は文のレベルだけでなくより小さい単位でもあり得る。例えば，

(12) Es [**simpático** aunque **desafortunado**].

この文では *simpático aunque desafortunado* という構文自体は文ではなく，全体の文の叙述補語の働きをしている。

ところで Bloomfield は外心構造の一例として *If John ran away* を挙げていた。一見これが先ほど挙げた条件文の例 *Ven si te atreves* に相当すると思われるかもしれないが，そうではない。Bloomfield が問題にしたのは，接続詞 *if* と残りの語句 *John ran away* の関係であった。一方，Jiménez は条件文を二極文と捉えていて，先ほど見たように「帰結節＋接続詞＋前提節」の 3 要素があって初めて二極文をなすとの考えであるから if と *John ran away* との関係は想定しない。そもそも二極文という概念は Rojo (1987)で確立された比較的新しいもので Bloomfield にとっては存在していなかった。

一方の「繋辞構造」(estructura copulativa)も Jiménez は三肢の外心構造の一種であるとする。(11)の *Antonio está cansado* という構造では「主語＋動詞＋叙述補語」のいずれもが必須要素でいずれが欠けても当該構文をなさないと考えている。動詞は，*ser* と *estar* の他に *parecer* 等の「準繋辞動詞」(semicopulativo)やその他叙述構文になるもの(*Llegamos todos muy cansados*)もここに含まれるとする。

2.4.2. 二肢構造(bimembre)

残るは二肢構造だけであるが，代表的なものは前置詞句である。前置詞句は Bloomfield の外心構造の代表的な構造である。Jiménez もまた前置詞句を外心構造の一種とする。

もう 1 種類の二肢構造は，「名詞句」(frase nominal)である。ここ

では名詞句と実詞句の使い分けをしていることに注意されたい[14]。名詞句とは「限定詞(determinante)＋名詞(nominal)」からなるものをいう。代表的な限定詞は定冠詞である。例えば *los alumnos* では *los* も *alumnos* も全体の核であるとは言えず，したがってこの構文は外心構造とする[15]。

2.5. Jiménez の概念のまとめ

Jiménez の「内心構造／等位構造／外心構造」を表で示すと以下の通りになる。Jiménez (1997)の表(§6)を一部簡略化し，明らかな間違いの修正を行った[16]。また，一番右の例文の欄はもともとないが理解を助けるために筆者が付加した（例文は Jiménez 1997, 1994 から採用した)。

[14] ここでは Jiménez の理論を説明するために彼の区別を採用しているであって筆者は区別の必要性を認めない。

[15] 後になって Jiménez は上記の前置詞句と名詞句は通常の外心構造ではなく，準形態素的(paramorfológico)であるとする。理由は前置詞や冠詞はそもそも完全語ではない。自立した単語ではないし移動の自由もない。しかし，かといって完全な形態素とまではいかないからである(Jiménez, 2007, §24.1, etc.)。しかしながら，Bloomfield と筆者は前置詞句を含めているので本稿では除外しないことにする。

[16] 誤：bimembre (A#&B#) → 正：trimembre (#A&B#)，誤：Est. exocéntrica [A = conj.] → 正：Est. exocéntrica [& = conj.]

表 1：Jiménez (1997, p. 21)

メカニズム	構造	タイプ	下位タイプ	例文
内心構造 A+(B)	内心構造	句以外の内心構造		*Verdaderamente*, **ni Juan estudia ni Pedro trabaja.**
		句(=拡張された語)	実詞句	**ejercicio** ***de fácil realización***
			形容詞句	***muy*** **fácil**
			副詞句	***muy*** **bien**
			動詞句	**Llegamos** ***a nuestro destino.***
連合構造 A&B	外心構造	三肢	繋辞構造	**Antonio** está **cansado.**
			外心構造[17]	**Ven** si **te atreves**.
		二肢	名詞句	**los de allí arriba**
			前置詞句	**sin que nadie se diera cuenta**.
	等位構造(A&B ... n)			**Vete**, **quédate**, o **haz lo que te dé la gana**.

これまで見てきたようにJiménezの構造分類はたいへん示唆に富み，その適応性も高いと思われる。等位構造を内心構造から切り離し，かつ外心構造でもないとした点は評価できる。しかし，Jiménezは等位構造の定義を狭く取りすぎている。つまり，連結される要素が無数であること，つまり「開放性」(abierta)，「連続性」(serial)を重視するあまり，他の等位構造を外心構造に残したままにしてしまった。この問題については後に検討する。

3. 複文3分類

3.1. Rojoの二極文と後の修正

これまでBloomfieldの提唱した「内心構造／外心構造」からJiménezでの新展開までを軸に見てきたが，これから先は筆者自身の

[17] この表では「外心構造」となっているがこれは実質的に「二極文」(oración bipolar)を指していると思われる。ただし，Jiménezは後になって二極文に関する考えを一部修正して条件文，譲歩文，原因文は従属文と看做すようになる。Cfr. Jiménez (2011).

新たな提案に進むことにする。筆者はスペイン語の複文構造に関して3分類を提唱している。この3分類に合わせて「内心構造／等位構造／外心構造」の概念を修正し，適応することによって独自の分類に達することができる。詳細は仲井(2014)に譲るが，複文の3分類を簡単に紹介することから始めることにする。

3.2. 比較構文と結果構文の定義

Guillermo Rojo は *Cláusulas y oraciones* (1978)で伝統的な等位文と従位文に加えて第3の「二極文」(Bipolares)を提唱した。具体的には以下の6種類である。

a) 条件文(Condicionales): No saldré si llueve.
b) 譲歩文(Concesivas): Saldré aunque llueva.
c) 原因文(Causales): Es feliz porque es bueno.
d) 逆接文(Adversativas): Es bueno, pero tonto.
e) 比較文(Comparativas): Es más alto que María.
f) 結果文(Consecutivas): Corrí tanto que me quedé agotado.

しかし，後の研究者たちによって Rojo の想定したものには等位とすべきもの(d)と従属とすべきもの(a-c)が混ざっていると批判があり，それらを除いたとすると比較文と結果文のみが残ることになった。

筆者はこれらのみを二極文とするが，それはこれらを「相関文」と定義することによる。「相関」(correlación)とは2つの要素がお互いに要求する(remisión endofórica mutua)統語関係のことである。これらの2つ要素とは，いわゆる「比較詞」(comparativo)と呼ばれるものである。例を挙げると，不等比較の *más...que* の *más* を「第1比較詞」，*que* を「第2比較詞」と呼ぶ[18]。

全ての比較構文を生成する潜在的なプロトタイプ的構造として次のようなものを想定することができる。

---

18 比較構文の構成要素については Nakai(1997)参照。

(13)
Seg.A: $\pm Suj_a \pm V_a \pm OD_a \pm OI_a \pm CC_a \pm Atr_a$ ... +1.er comparativo
Seg.B: $\pm Suj_b \pm V_b \pm OD_b \pm OI_b \pm CC_b \pm Atr_b$ ... +2.º comparativo

両比較詞のみが必須の要素でそれ以外はオプションである。ただし，第一比較詞はA部の中で何らかの統語的機能(主語，目的語など)を果たしている。B部においては比較された要素を除いて両部に共通する要素は全て省略される。例えば，

(14a) Juan escribe cartas a sus amigos más frecuentemente que María.

は以下のように分析できる。

(14b)

Seg.A:	Juan	escribe	cartas	a sus amigos	*más* frecuentemente	
	Suj_a	V_a	OD_a	OI_a	CC_a	
Seg.B:	*que* María	(escribe)	(cartas)	(a sus amigos)		(frecuentemente)
	Suj_b	V_b	OD_b	OI_b		CC_b

A部とB部で共通の要素は，両者間で比較される要素1つ(María)を除いてB部では全て省略される。このようなタイプの構文を「単焦点比較構文」(Comparativa Unifocal)と呼んでいる。最も頻繁に見られる形式である。

また一方で，2つあるいは2つ以上の要素が省略されずにB部に残った構文もある。このタイプの例を以下に見てみよう。

(15a) Pedro regala más claveles a su novia en primavera que rosas envía Luis a su madre en verano.

(15b)

Seg.A:	Pedro	regala	*más* claveles	a su novia	en primavera
	Suj_a	V_a	OD_a	OI_a	CC_a
Seg.B:	*que* Luis	envía	rosas	a su madre	en verano
	Suj_b	V_b	OD_b	OI_b	CC_b

この例では比較される要素は5組で,後半部でも全てが省略されずに残っている。この構文を「複焦点比較構文」(Comparativa Plurifocal)と呼ぶ。

(14)のタイプも(15)のタイプも見かけはかなり異なるが,その潜在的構造としては全く同じものである。それが(13)の比較構文のプロトタイプである。

(15)のような後半部に省略がない比較構文を見た後では,結果構文も実は同じ構造であることに気づくであろう。

(16a) Juan es tan alto que llega al techo.

(16b)

Seg.A:	Juan	es	*tan* alto		
	Suj_a	V_a	Atr_a		
Seg.B:	*que*	llega		al techo	
		V_b		CC_b	

結果構文のB部に省略される要素はなく,B部の構造はA部の構造と並行関係がない。つまり,比較構文は「対称構造」(estructura simétrica)であり,結果構文は「非対称構造」(estructura asimétrica)をなしている。しかし,いずれも同じ構文の2つのバリアントであると考えることができる。

3.3. 複文の新たな3分類

仲井(2014)では比較文と結果文を我々独自の方法で定義したのち以下のような新たな分類の提案を行った。

表 2: 仲井(2014, p. 39)

文のタイプ	下位区分		代表的接続詞
等位文(結合文) Cooridinadas (Conectivas)	多重等位 Coord. Múltiple	連結文 Copulativas	*y, ni*
		離接文 Disyuntivas[19]	*o*
	単純等位 Coord. Simple	逆接文 Adversativas	*pero, sino*
		推断文 Ilativas[20]	*luego, entonces, pues*
二極文(相関文) Bipolares (Correlativas)	比較文 Comparativas		*más...que, menos...que, tan(to)...como, el mismo...que, otro...que*
	結果文 Consecutivas		*tan(to)...que, tal...que, así...que*
従属文(填込文) Subordinadas[21] (Incrustadas)	本質的副詞文 Adv. Propias	時況文 Temporal	*cuando*
		場所文 Locativas	*donde*
		様態文 Modales	*como*
	非本質的副詞文 Adv. Impropias	原因文 Causales	*porque, ya que, como*
		目的文 Finales[22]	*para que*
		譲歩文 Concesivas	*aunque*
		条件文 Condicionales	*si, como*

逆接文と非本質的副詞文を二極文に入れないことは既に論じたの

[19] 我々は配分文を離接文の一種と考える。非連続配分文(*bien... bien..., ya... ya...*, etc.)は, "expresan más bien alternancia que distribución" (*NGLE*, 31.3p)。

[20] 我々の分類の特徴の 1 つは, 推断文(Ilativa)を等位文とみなしていることである。この種の文については研究者間に合意がないが(*NGLE*, 31.1e), 本稿の直接のテーマではないのでここではこれ以上触れないことにする。

[21] この図では従属文のうち"Sustantiva"と"Adjetivas"は省いている。

[22] 現在でも「目的文」(Final)に関して研究者間で意見一致がないと言ってよいだろう。以前のように名詞節の一種と考える者もあれば,「原因」(Causal)と同じで従属文だとする者もいる。

で繰り返さない(仲井, 2014)。また, Rojo や Jiménez は等位文の条件として 2 つ以上の要素を結ぶことができることを挙げているが, 我々の立場はこの条件を用いないことは既に述べた。2 つ以上の要素を導入できるかどうかは後に, 等位文の下位区分を立てるにあたり用いたい。つまり, 等位文の下に(i)2 つまたは 2 つ以上の要素を導入できる, (ii)2 つの要素のみを導入する, とさらに 2 つに区分し, 前者(Coordinada Múltiple)に連結文と離接文, 後者(Coordinada Simple)に逆接文と推断文を所属させる立場である。

4.「内心構造／外心構造」への応用

4.1. 概要

ここまで見てきた複文の 3 分類は文ではない単位(つまり句レベル)にも応用可能である。以下これを利用して「内心／等位／外心」の概念を修正し, 新たな 3 分類を提案する。

まず, Jiménez のいう内心構造は我々もほぼそのまま引き継ぐことになる。ただし, 彼のいう動詞句を我々は文的な単位の方に分類するが, 「動詞句」, 「節」, 「文」の定義と命名の問題であって本論においては本質的な問題ではない。

次に Jiménez の等位構造であるが, 彼はこれを要素 3 つ以上連続できる連結文と離接文に限っている。しかし,

(17) Hoy hace buen tiempo *y* salimos de paseo. —等位構文

(18) Hoy hace buen tiempo *pero* nos quedaremos en casa. —逆接構文

この 2 つの構文が根本的に異なった構造を持っているとは考え難い。つまり, 開放性の連結文(～*y*～)であれ, 離接文(～*o*～)であれ, 結びつける要素が 2 つの時もあれば 3 つ以上のこともあるだけのことであって, ことさらその数でもって別構造とする十分な理由になるとは

考え難い[23]。逆接文が2つ以上の構成要素を持ち得ないのはその「逆接」という意味的側面がそう限定しているからに過ぎない[24]。

新分類では多くの研究者と同じように構成要素2つだけの逆接文と推断文を新メンバーに加える。推断文についてはその名称も含め様々な議論があろうが,本稿の中心的テーマではないのでこれ以上論じない。等位文の構造を核が2つ以上あると看做すことから「複心構造」(estructura policéntrica)と呼ぶ[25]。

最後にJiménezの外心構造であるが,三肢構造のうちの二極文はこの中でも中心的ともいえるものと看做しているが,これを相関構文(比較構文と結果構文)に限ったうえ,「二極構造」(estructura bicéntrica)とレッテルを変える。残りの条件文,譲歩文,原因文はRojo以前のステータス,つまり従位構造と看做し内心構図へ合流させることになる。

もう1つの三肢構造である繋辞構造を二極文の一種とみなす言語学者は少ないと思われる。コプラは確かに意味的には空に近いが統語的には文の核であることには違いがないと考え,通常の動詞文と同じ扱いをしたい(単心構造に移す)。

残されたのは二肢構造(前置詞句と名詞句)であるが,これらはいずれも文レベルではなく,複文3分類をそのまま応用することはできないので以下で別途検討する。

4.2. 句構造への応用

「内心／複心／二心」の概念は句のレベルにも応用できる。

(19) **lechuga** *fresca*

(20) casa [**pequeña** pero **cómoda**]

(21) Es un libro [**tan voluminoso como interesante**].

---

[23] Dik(1968)は等位のもとに下位区分として"binay"と"n-ary"を設けているが,それをもって別構造とするには至っていない(pp. 48-50)。
[24] Dik (1968), p. 48.
[25] "policéntrico"という語はBerrio (1970, p. 219)が既に使用している。

(19)は単心構造，(20)は複心構造のそれぞれの例であるが説明は不要であろう。(21)は二心構造，つまり比較構文の例であるが，構造自体([ ]で囲まれた部分)は文でなく句のレベルにとどまる。また，以下の例文(22)に見られるようないわゆる「等配接続詞」(coordinador copulativo) の *tanto...como...*は句レベルでよく使用される比較構文の特殊な一例である。

(22) Visitan la ciudad turistas *tanto* europeos *como* asiáticos.

なお，結果文(tanto...que, etc.)関しては句レベルの構造はないと考えられる。後半部の que 以降に必ず動詞的要素が必要だからである。

ところで，Jiménez の分類では，句は内心構造と外心構造に分かれていた。名詞句，形容詞句，副詞句，動詞句は内心構造であり，一方，前置詞句と名詞句は外心構造の一種であるとされた。我々の分類ではこれを一元的に内心構造と位置付けたい。

4.2.1 前置詞句の扱い

前置詞句は既に見たように Bloomfield が外心構構造の例として挙げた典型的な構造である(1933, §12.10)。前置詞句は「支配項」(director)である前置詞と「被制項」(término)である後接の名詞等から成る。果たしてどちらが全体の構造の核であるのだろうか。Jiménez にとってはどちらも核ではなかった。だからこそこの構文を外心構造と看做していたのである。しかし，Jiménez は前置詞句を外心構造であるとはしているが，より正確に言えば，「内心構造／外心構造」の概念を必ずしも適用すべきでないと考えているようである。前置詞句の構造を「準形態素的」(paramorfológico)と呼んでいる[26]。先に見たように Bloomfield が形態素レベルにまで両概念を適用していることに関しては疑問があり，前置詞句の場合は形態素のケースにに近い。

[26] Jiménez (2000), §2.2.2.

一方，近年の研究者の間には前置詞句を核がある，つまり内心構造と看做す者が多い。それではどちらが核であるかということには両論ある。前置詞は後続の名詞句を支配しているのであるから，この支配項が核であるという意見がある(Bosque, 1989, etc.)[27]。

他方，非制項の方が核であるという説もある。そもそも前置詞の働きとは何かを考えてみることが必要であろう。前置詞は非制項の文法的働きを規定する働きがある。つまり，名詞等の基本的意味を変化させるのではなく，文法的機能を付加するものである。例えば，*Voy a Roma*, *Vengo de Roma*, *Pasaré por Roma*, *hablamos de Roma*, *Es un recuerdo de Roma* で名詞 *Roma* が持っている意味には何ら変わりはなく，それを保持したうえで「到達点」,「起点」,「通過点」,「テーマ」,「対象」などの意味を付加し，同時にその名詞の統語的機能(状況補語，補完補語，名詞の補語等)を決定している[28]。ラテン語では格変化があり，前置詞は必要ない場合が多かった。ロマンス語に変化する際に格変化が失われたのでそれを補う意味もあって前置詞の使用が一般化したといえる。したがって，前置詞句の核は，前置詞に後続する名詞等であって前置詞句全体は内心構造であると考える。

一部例外を除いてほぼすべての前置詞は弱勢語である。また前置詞は単独で現れることは決してない。これらは自立語ではなく機能語であるので当然のことといえるが，前置詞を前置詞核の核とは看做せない理由にもなろう[29]。

核の定義として「義務性」を重要視する研究者は多い。例えば，Escribano (1979-80)は，「それなしでは聞き手にとって解釈できなく

---

27 前置詞が核であるという主張に対して Jiménez は詳細な考察を加えて明確にこれを否定している。Cfr.(2000, §2.2.) Bosque がそう主張する根拠はいくつかあるが，その説に反論するには以下の根拠に対してだけで十分であろう。Bosque は，"Teniendo la ventana abierta"と"Con la ventana abierta"が同義であるとし，前者において"Teniendo"が核であるので，後者においても"Con"が核であるとするのである(Bosque, 1989: pp. 61-62)。しかし，これはそもそも両表現を同等と看做したことが間違っているとする。分布主義的考えだけでは限界があろう。

28 ラテン語においては *Eo Romam* が一般的な形であったが，さらに個別的な表現として *Eo in Romam* や *Eo ad Romam* があった。つまり，後者の2つは前置詞の付加によってより意味を詳細にしたものであって必須の要素ではなかった。Cfr. Jiménez (2002), p. 458.

29 Cfr. Gutiérrez (1997-98), pp. 716-717.

なる構成要素」と考える(pp. 298-299)。この考え方を用いれば，前置詞と後接する名詞ではその義務性は明らかであろう。
Jiménez自身が挙げている例であるが，

(23a) Veo niños.
(23b) Veo unos niños.
(23c) Veo a unos niños.

のいずれもが可能であることからやはり *niños* が上記の目的語中の核であるとすべきではないか[30]。

さらに言語習得の過程(幼児や外国人の言語使用)を想像してみれば，前置詞を間違ったり，または使用しなかったりしている場合でもコミュニケーションは成立していることが多い。これらの観点から言っても前置詞句においては前置詞ではなく，名詞(句)が核と考えてよいであろう。

我々の立場に戻るが，詳細な研究の必要性を認めるのであくまで一定の留保を伴った現時点での判断ということになるが，前置詞句は内心構造であると看做す。

4.2.2. 名詞句の扱い

Jiménezは名詞句(frase nominal)と実詞句(frase sustantiva)を区別していて，実詞句を内心構造，名詞句を外心構造とする。しかし，これは一般的に言語学者の間で受け入れられているとは言い難い[31]。筆者も区別する必要性を認めない立場であるが，以下の理由による。

名詞句における限定詞(determinante)は，確かに多くの場合必須ではあるが，絶対に必要な要素ではない。先にみたように(23a-c)，*Veo unos niños*から *unos*を取った形 *Veo niños*も可能であるからである。*los niños*や *unos niños*において必要不可欠なのは *niños*であって *los*

[30] Jimenez がこれらの例を挙げた理由は実は逆でこのような例外的に事象もあるが，核とは認められないという主張である。(1994,3.1.4.1)
[31] 例えば，Gutiérrez (1997-98): pp. 719-722.

や *unos* といった限定詞ではないことは明らかである。したがって構造の核は *niños* である。冠詞や指示代名詞は名詞を現実化(actualización)する働き等を持つので形容詞等の「修飾」と区別すべきであるとJiménezは主張する。しかし，だからといって実詞句(修飾による)は内心構造で，名詞句(限定による)は外心構造とするのには十分な理由があるとは考えない。したがって，Jiménezのいう名詞句も内心構造の一種であるとするのが筆者の立場である。もはや名詞句と実詞句を区別する必要はないので以下では「名詞句」で統一する。

以下，筆者の提案する3分類を表にまとめて提示する。

表3：Nakai (2016)

構造	タイプ	下位タイプ	例文
単心構造 (Monocéntrica)	文的	単文	**Hablamos** *del viaje*.
		複文	**Aprobarás** *si estudias*.
	句的	名詞句	**lechuga** *fresca* / *los* **niños**
		形容詞句	*bastante* **difícil**
		副詞句	*muy* **bien**
		前置詞句	*en* **Santiago**
複心構造 (Policéntrica)	文的	多重等位	**Vete, quédate o haz lo que quieras.**
		単純等位	**Pienso luego existo.**
	句的	多重等位	(Hay) **naranjas, peras y fresas.**
		単純等位	(casa) **pequeña pero cómoda**
二心構造 (Bicéntrica)	文的	比較構文	**Te quiero tanto como tú a mí.**
		結果構文	**Es tan alto que llega al techo.**
	句的	比較構文	(Es un libro) **tan voluminoso como interesante.**

言語学用語は，他の学問分野でもそうであるが，必ずしもその要素や現象を的確に表しているとは限らない(むしろ表しえない)。本論のテーマでいえば「外心構造」(exocentrismo)はあまり適切ではない。この用語は「内心」に対置するために使われた用語であろうが，言葉

の原義からすると「中心」がその構造の「外に」存在するかのイメージを与えてしまうが，正確ではない。もし外に存在するならばその構造自体には中心がないことになるので「無心構造」(estructura acéntrica)とでも呼ぶ方がより適切であろう。または，「非‐内心構造」(estructura no-endocéntrica)がよりふさわしいかもしれない。一方の内心構造であるが，Bloomfield の定義によれば中心が 1 つの場合もあれば複数の場合でもある。複数といってもさらに「2 つ」のケースと「3 つ以上」のケースがある。これが上で見た「二心構造」と「複心構造」にそれぞれ相当する。

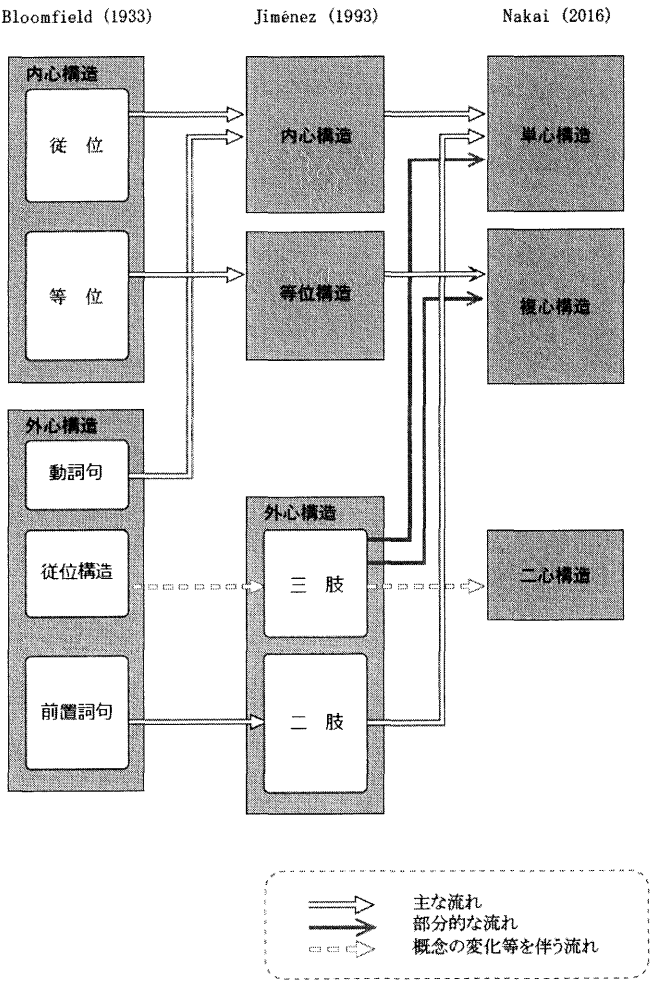
Bloomfield は内心構造の中に等位構造を位置づけたことから考えて，構造内に核が 2 つある構造を想定していたと考えられる。Bloomfield は「複心構造」という語こそ使わなかったが筆者と結果的に同じことを考えていたことになる。

一方，Jiménez は等位構造は唯一ではなく 2 つの義務的な単位を持つとはしながらも，等位構造では核の存在について話すことに意味がないとしている(2000)。

5. まとめ

本論で考察してきた主要な説(Bloomfield と Jiménez)とここで主張する新たな 3 分類の関係を概観するために以下の図を参照されたい。

図 9：対応表



残る課題は非常に多いが特に最後に論じた前置詞句と名詞句の構造に関してのさらなる研究は必須であろう。

Bibliografía

Bloomfield (1933): *Language*, New York, Holt, 和訳：三宅，日野 (1962)：大修館.

Bosque, I. (1989): *Las categorías gramaticales. Relaciones y diferencias*, Madrid, Síntesis.

Dik, Simon (1968): *Coordination: Its Implications for the Theory of General Linguistics*, Amsterdam, North-Holland Publishing.

Escribano, J.L.G. (1979-80): "Reflexiones acerca del concepto 'Núcleo' en la gramática tagmémica", *Archivum,* 29-30, pp. 265-310.

García Berrio, A. (1970): *Bosquejo para una descripción de la frase compuesta en español*, Universidad de Murcia, pp. 209-231.

Gutiérrez, S. (1997-98): "La interdependencia en sintaxis", *Cauce,* 20-21, Sevilla, pp. 703-725.

——— (1994): "El artículo sí sustantiva", A. Alonso, B. Garza y J. A. Pascual: *II encuentro de lingüistas y filólogos de España y México*, Salamanca, Junta de Castilla y León, Ediciones Univ. de Salamanca, pp. 483-507.

Hincha, G. (1962): "Endocentric vs. exocentric constructions", *Lingua,* 11, pp. 267-274.

Hockett, Ch. F. (1958): *A Course in Modern Linguistics*, New York, MacMillan, Versión española de E. Gregores y J. A. Suárez, *Curso de lingüística moderna*, Buenos Aires, Eudeba, 1971.

Jiménez Juliá, T. (1993a): "La caracterización de las unidades sintácticas en español", *Actas del III Congreso de la Asociación Asiática de Hispanistas, Tokio 8-10 de enero de 1993*, Tokio, pp. 146-156.

——— (1993b): "Constituyentes clausales y niveles de estructura jerárquica", *Lingüística Hispánica*, 16, Círculo de Lingüística Hispánica de Kansai, pp. 15-44.

——— (1994): "Clases de construcciones, tipos de unidad y oraciones", en F. Hernández Paricio (ed.), *Perspectivas sobre la oración*, Col. *Grammaticalia* nº 1, Seminario de Estudios lingüísticos, Univ. de Zaragoza, pp. 145-183.

——— (1995): *La coordinación en español. Aspectos teóricos y descriptivos,* Anexo 39 de *Verba,* Univ. de Santiago de Compostela.

——— (1997): "Endocentrismo y exocentrismo en un marco funcional" en Iglesias Bango, M. (ed.), *Gramma temas*-2, Centro de Estudios Metodológicos e Interdisciplinares, Univ. de León, pp. 297-331.

——— (2000): "Núcleos en gramática constitutivo-funcional", *Verba* 27, pp. 87-132.

——— (2002): "Notas sobre combinatoria de preposiciones en español" en R. Lorenzo (coord.), *Homenaxe a Fernando R. Tato Plaza*, Univ. de Santiago de Compostela, pp. 457-472.

——— (2011): "Conjunciones y subordinación en español". *Verba*, 38, pp. 7-50.

Martinet, André (1965): *Elementos de lingüística general*, Madrid, Gredos.

Nakai, K. (1997): "Reflexión en torno a los componentes de la Comparativa del español", *Academic Bulletin*, 48, Univ. de Estudios Extranjeros de Kioto, pp. 61-67.

——— (2014): 「スペイン語複文の新たな分類の試み —二極文再定義を通じて—」『立命館大学産業社会論叢』, 第50巻第1号, pp. 33-43.

Nida, E. A. (1948): "The Analysis of Grammatical Constituents", *Language*, 24, pp. 168-177.

Real Academia Española (1973): *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe.

Real Academia Española y la Asociación de Academias de la Lengua Española (2009): *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa Libros.

Rojo, Guillermo (1978): *Cláusulas y oraciones*, Anexo 14 de *Verba*, Univ. de Santiago de Compostela.

Tesnière, L. (1959): *Éléments de syntaxe structural*, París, Klincksieck.

ドレイク世界周航における巨人表象に関する一考察

長尾直洋

はじめに

本稿では、フランシス・ドレイク（Francis Drake）の世界周航（1577-1580年）に関する諸報告を用いて、南米大西洋岸における巨人表象を考察し、植民地言説としての機能を検証する。これらの報告における巨人描写を分析、比較することで、フェルナン・デ・マガリャンイス（Fernão de Magalhães）一行の巨人表象が、ドレイク世界周航を契機として如何に変化したかを明らかにする。

ドレイクの世界周航に関するテクストは、パタゴニア先住民の巨人性を否定した代表例として挙げられる[1]。そのテクストは、ドレイク自身の名が冠された『フランシス・ドレイク卿の世界周航[2]』（以下、『世界周航』と略記）である。編者はドレイクの遺産を相続した同名の甥フランシス・ドレイク卿であり、同書が出版されたのは航海から約半世紀後の1628年であった。その内容に関しては、ドレイク自身の記録ではなく、航海参加者による諸報告を甥が編纂したものであることが明らかとなっている[3]。

イングランド初の世界周航中、ドレイクは自身の手で航海記録を書いていたが、航海直後に自身の航海誌を公刊することは叶わなかった。当時のイングランド女王エリザベス一世（Elizabeth I）は、父の遺志を継いでイングランド国教会を復活させた。カトリックとは決別しつつも、スペインとの完全な敵対に躊躇したエリザベス一世は、スペイン領アメリカで私掠行為を行ったドレイクの周航の記録を発禁処分とした[4]。その手稿は女王の元へ渡った後に、失われたと言われて

[1] Duviols, 1985, p. 63; 長尾, 2006, p. 54.
[2] Drake, 1854[1628], pp. 1-162.
[3] Vaux, 1854, pp. xi－xii.
[4] Bawlf, 2004, p. 6.

いる[5]。

ドレイク自身の記録が公開されない中、その世界周航情報の最初の公刊は、当時のイングランドにおける海外植民事業の推進者リチャード・ハクルート（Richard Hakluyt）の『航海集』（1589年）において、周航航海参加者であるフランシス・プレッティ（Francis Pretty）の名義でなされた[6]。しかしながら、ドレイクの私掠行為に対するスペインへの政治的配慮から、初版には予定されたドレイク周航の詳細は掲載されなかった。その後、初版への追加として十数ページほどの要約が載せられ[7]、また1598年から1600年にかけて第2版が出版されると、航海参加者による同時代の諸報告も付け加えられた[8]。

そこで本稿では、まずドレイク世界周航直後からハクルートによる公刊までに発表された諸報告におけるパタゴニア先住民表象について、特にその巨人性に焦点を当てて概観する。次に、ドレイク旗艦付き説教師のフランシス・フレッチャー（Francis Fletcher）の報告を分析することで、ドレイク世界周航直後における巨人表象の詳細を明らかにする。続いて、フレッチャー報告と『世界周航』における巨人表象を比較する。そして、約半世紀の間における巨人表象の変化について明らかにし、『世界周航』における巨人表象の否定の持つ意味を示す。

---

[5] Quinn, 1990, p. 185. 秘匿された世界周航情報は、ドレイク自身によって知人であるオランダの地図製作者らに送られた。その情報の一部は、ニコラ・ヴァン・サイプ（Nicola van Sype）作成の地図によって公開されている（Cummins, 1997, p. 274）。なお、"La Heroike Enterprinse Faict Par le Signeur Draeck D'Avoir Cirquit Toute la Terre"と題されたサイプ作の地図には「巨人の地」との記述がある（Suarez, 1992, pp. 116-117）。

[6] Hakluyt, 1965[1589], pp. 643c-643d.

[7] Quinn, op. cit., p. 180.

[8] Ibid., p. 191.

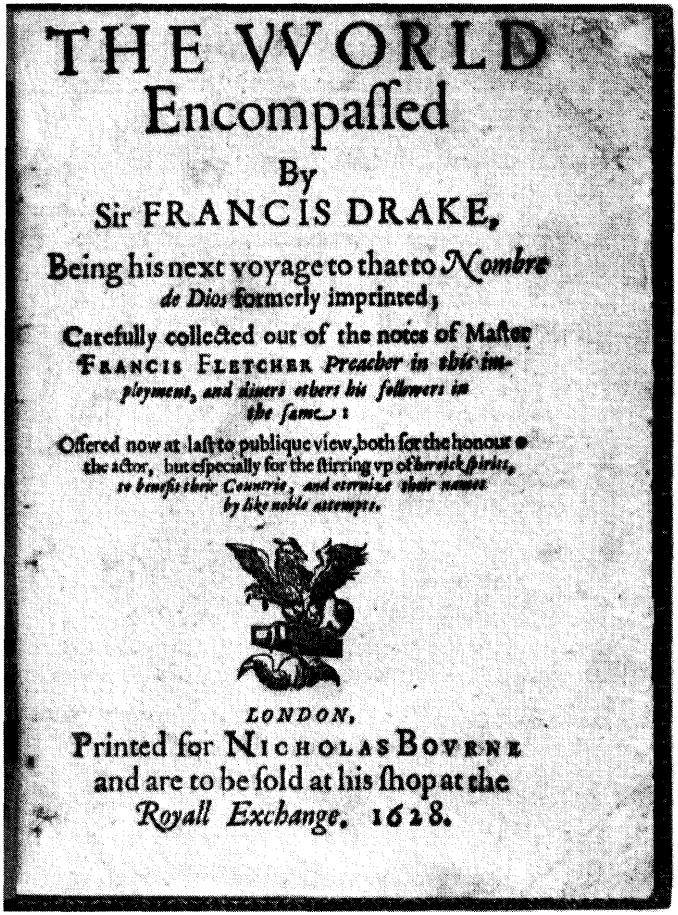

THE WORLD
Encompaſſed
By
Sir FRANCIS DRAKE,
Being his next voyage to that to *Nombre de Dios* formerly imprinted,
Carefully collected out of the notes of Maſter FRANCIS FLETCHER *Preacher in this imployment, and diuers others his followers in the ſame:*
Offered now at laſt to publique view, both for the honour of the actor, but eſpecially for the ſtirring vp of *heroick ſpirits, to benefit their Country, and eternize their names by like noble attempts.*
LONDON,
Printed for NICHOLAS BOVRNE and are to be ſold at his ſhop at the *Royall Exchange.* 1628.

図 1.『世界周航』標題（1628 年）

1. 世界周航テクストとパタゴニア先住民表象

本節では、ドレイク世界周航直後からハクルート『航海集』公刊までの先住民表象について概観する。最初に言及するのは、ハクルートによる公刊報告及びドレイク甥による『世界周航』の主要情報源となったフレッチャー報告である[9]。フレッチャーはドレイクの旗艦ペリカン号（後にゴールデン・ハインド号と改名）付きの牧師として航海に参加しており、他の参加者の記録と比べて、航海の内容について非常に詳しい描写を行っている。彼は、南米大西洋岸のかなりの部分に巨人の存在を認めており、巨人の足跡を見つけた後、ラプラタからマガリャンイス海峡まで巨人の住む地である、と述べている[10]。彼の記録に関しては、他の記録について検討した後に分析を行う。

次に、ハクルート報告と『世界周航』の双方に同じく用いられたとされる未刊史料2点を検討する。1つ目は、エリザベス号乗組員のジョン・コーク（John Cooke）によるものである[11]。同報告はサン・フリアン港におけるトマス・ドウティ（Thomas Doughty）の処刑に関して詳述しているが、先住民描写についてはフレッチャー報告と比べて簡素である。彼は、マガリャンイスが巨人先住民と出会ったサン・フリアン港の先住民について、「その地の人々」[12]としか記述していない。

もう1つの未刊史料は、ドレイクの父方いとこのジョン・ドレイク（John Drake）による記録である。ジョンは旗艦ペリカン号に乗船し、世界周航後は別の航海にて再びアメリカへ向かったが、スペイン船に捕えられ、捕虜となった。彼は周航に関する報告を1584年[13]及

---

9 フレッチャーのテクストについては、ドレイク（Drake, 1854）脚注の、フレッチャーによって最初に用いられたノートの原語のコピーとされるBritish Museum所蔵の手稿（Sloane, No. 61）を使用している（Fletcher, 1854[1577], pp. 7-96）。

10 Ibid., pp. 39-69.

11 コークのテクストについては、ドレイク（Drake, op. cit.）内に付された手稿（Harl., MS., 540, fol. 93）を使用した（Cooke, 1854[1577], pp. 187-218）。

12 'the contry people', ibid., p. 201.

13 Drake, 1914a[1584], pp. 18-34. 本稿ではセビーリャのArchivo General de Indias所蔵"Declarations made on March 24, 1584, by some Englishmen in Santa Fé, province of the River Plate, about the voyage that the Corsair John Drake [sic] made to the Strait of Magellan."（Archivo

び 1587 年[14]にスペイン側へ提出している。前者では巨人先住民描写はほとんど見られなかったが、後者ではサン・フリアン港で巨人[15]と遭遇したことを記している。

1589 年以降は、ハクルートによってドレイク周航情報が公開された。同航海の参加者であるプレッティ著とされる最初の公刊報告は、フレッチャーのものと比べて簡素な記述であった。先住民への巨人描写については、ジョイ岬での巨人の足跡の発見[16]について言及している一方で、サン・フリアン港の先住民については「その地の住民は粗暴な野蛮人である[17]」との記述しかなされていない。

ハクルートは初版出版後も継続して航海誌を収集し、その結果を反映させた第 2 版（全 3 巻）を 1598 年から 1600 年にかけて出版した。新世界関連の航海誌が所収された第 3 巻（1600 年）のドレイク航海部分についても、同行者による諸報告が付け加えられている。その一つは、ドレイクがカボ・ヴェルデ沖で拿捕したポルトガル船の乗船者ヌーノ・ダ・シウヴァ（Nuno da Silva）によるものである[18]。シウヴァはブラジル航海の水先案内人としてドレイクに重用されていたが、周航途中、1579 年 4 月に南米太平洋岸のウァツルコにてスペインに捕まり、メキシコシティへ送られ、副王による尋問を受けた。シウヴァの報告は、副王マルティン・エンリケス（Martín Enríquez）の命によって書かれたものである。その報告では、サン・フリアン港で先住民に出会っており、その特徴として、「強靭で高い身長[19]」を挙げている。

General de Indias, Sevilla, E. 2, C. 5, L. 2-21）を所収したナットール版（Nuttall, 1914）を使用した。

[14] Drake, 1914b[1587], pp. 34-56. 本稿では、1587 年 1 月 8 日、9 日、10 日にそれぞれ書かれた“An account of his parentage and life-history, and religious faith. ”A narrative of the Voyage of Circumnavigation he had made with Francis Drake ” “Account of his voyage with Edward Fenton.”（Archivo General de Indias, Sevilla, E.2, C.5, L. 2-21, 49）を所収したナットール版（Nuttall, op. cit.）を使用した。

[15] ‘giant’, Drake, op. cit., p. 39.

[16] ‘fhewyng that they were men of great ftature’, Hakluyt, op. cit.

[17] ‘the countrey people, rude savages’, ibid.

[18] Silva, 1854[1579], pp. 254-268. 本稿では、ハクルートによる 1600 年版を所収したドレイク版（Drake, 1854）を使用した。

[19] ‘well formed people, and strong and high of stature’, Silva, op. cit., p. 255.

ハクルートによる航海集の第2版には、エリザベス号乗組員で、ドレイク旗艦とはぐれた後に一足先に帰国したエドワード・クリフ（Edward Cliffe）による報告も加えられた[20]。クリフの報告の特徴としては、フレッチャー報告とは逆に、サン・フリアン港で遭遇したパタゴン[21]の巨人性を否定していることが挙げられる。クリフは「スペイン人報告ほどの身長ではない[22]」、「イングランド人の身長のそれである[23]」、「彼らの誰よりも背の高い人をイングランドで見たことがある[24]」など、その巨人性を完全に否定している。

このように、周航直後からハクルート報告公刊までには、パタゴニア先住民の巨人性について、肯定、否定、言及せずという3通りの見解が存在していた。以上を踏まえて、次節では、諸報告の中でもっとも詳細な先住民描写を行い、『世界周航』及びハクルート報告の主要情報源となった[25]フレッチャー報告を分析することで、ドレイク周航直後における南米大西洋岸の巨人表象を明らかにする。

2. フレッチャー報告

ドレイク一行は南米大西洋岸の5箇所（ブラジル沿岸、ジョイ岬、ホープ岬、デザイア港、サン・フリアン港）において先住民と接触した。以下では、フレッチャーによる各地の先住民描写を分析する。

①ブラジル沿岸[26]

同地の先住民は、「我々と会うのを大変喜んでいるように見える[27]」、「貧しく害のない人々である[28]」が、「無慈悲で殺人的な[29]」ポルトガ

---

[20] Cliffe, 1854[1600], pp. 269-284. 本稿では、ハクルートによる1600年版を所収したドレイク版（Drake, op. cit.）を使用した。
[21] 'Patagons', Cliffe, op. cit., p. 278.
[22] 'no such satature as the Spaniardes report', ibid.
[23] 'being but of the height of English men', ibid.
[24] 'for I haue seene men in England taller than I could see any of them', ibid.
[25] Vaux, op. cit., p. xi; Quinn, op. cit., pp. 183-184.
[26] Fletcher, op. cit., pp. 34-36.
[27] 'in sight did shew themselves very joyful to see us', ibid., p. 35.
[28] 'the poore and harmless people', ibid.

ルの暴政のせいで「悪魔崇拝に走ってしまい[30]」、侵略する船に対して悪天候を願うために、ドレイク一行は接岸できなかった。したがって、友好的で無害、しかしポルトガルの影響で堕落した、といった特徴が抽出できる。

②ジョイ岬[31]

柔らかい地面に「巨人のものとしかいえない足跡[32]」を発見したフレッチャーは、ラプラタからマガリャンイス海峡まで「すべて巨人が住んでいると認識[33]」した。ここには直接的な接触はないが、南米大西洋岸の広範囲において、先住民に巨人という特徴が付与されている。

③ホープ岬[34]

同地の巨人たちは「無害なだけでなく[35]」、「我々をもてなす準備があり[36]」、「私自身の国の、神の教会に仕える聖職者の多くの同胞の間で見受けられるそれ以上の[37]」親切さで、食料供給までした。したがって、巨人、友好的、無害、有用といった特徴が抽出できる。

④デザイア港[38]

男女共に並外れた大きさを誇る巨人たちは、直接ではなく一度地面に置いてから物を受け取る習慣や、盗みに対する懺悔としての矢による自傷行為を行い、またセタボス[39]という名前の悪魔を崇拝していた。

同航海においてドレイクはマガリャンイス航海の報告を持参しており、フレッチャーも自身の報告の中でいくつかマガリャンイス航海の報告について言及している。先住民のセタボス信仰はマガリャンイ

---

29 'the unmercifull and murthering', ibid.
30 'driven to yelde themselves into the hands of divells', ibid., p. 36.
31 Ibid., pp. 39-40.
32 'which could be no other than the foote of a giant', ibid., p. 40.
33 'perceaved that...is wholly inhabited of the giants', ibid.
34 Ibid., pp. 40-42.
35 'not only harmless', ibid., p. 40.
36 'most ready to do us any good and pleasure', ibid.
37 'nay more than I have for my own part found among many of my brethren of the ministry in the Church of God, at whom in my own country', ibid.
38 Ibid., pp. 46-52.
39 'Settaboth', ibid., p. 48.

ス一行が報告したセテボス信仰[40]を裏付けるものであり、フレッチャーはここで、同地の先住民をマガリャンイス報告における先住民と同定している。

⑤サン・フリアン港[41]

フレッチャーは、同地の巨人について、大変親切で愛情溢れ、無害と判断していた他の南米大西洋岸先住民と比べて、大変堕落している[42]とした。一行は同地にて先住民による攻撃を受け、乗組員を2人殺されている。フレッチャーは、同地先住民の暴力性について、自然や気候の違いから生じるものではなく、偶然の出来事によるものであり、マガリャンイス航海時にマガリャンイス一行によって仲間が傷つけられ、何人かが連れ去られてしまったために、その事件が後世まで伝えられ、以降よそ者に対し、復讐を行うようになった[43]と説明している。その際、先住民は国家の違いが解らないため、我々イングランド人をも攻撃した、と加えられている。サン・フリアン港はマガリャンイスが先住民をパタゴンと命名した場所である。したがって、巨人、非友好的、マガリャンイス一行との接触によって堕落、といった特徴が抽出できる。

以上から、フレッチャー報告は、基本的にはマガリャンイス一行の航海報告を踏襲しており、先住民を無害で友好的な存在とし、ブラジル沿岸以外の先住民に巨人性を付与している。ただし、ブラジル沿岸やサン・フリアン港の先住民については、ポルトガルやマガリャンイス一行の接触によって悪影響を受けたとしている。

3. フレッチャー報告と『世界周航』の比較

『世界周航』には、フレッチャー報告と比べて幾つかの相違点が存

---

40 Pigafetta, 1999[1525], p. 9.
41 Ibid., pp. 56-58, 68-69.
42 'degenerate', ibid., p. 68.
43 'the Spanish cruelties there vsed, haue made them more monstrous in minde and manners, then they are in body, and more inhospitable to deale with any strangers that shall come hereafter', ibid., p. 61.

在している。以下では、『世界周航』とフレッチャー報告双方の先住民表象を比較する。

①ブラジル沿岸[44]

同地の先住民描写はフレッチャー報告と同様だが、『世界周航』では、マガリャンイス航海の報告を踏まえて次のように述べられている。「マゼラン航海の報告では、この人々は何にも祈らないとされる[45]」のに、マガリャンイスが去った後には「悪魔の神を作り出すほどに堕落してしまった[46]」「これが本当ならば、マゼラン航海以降、先住民は驚くほど変質してしまったように見える[47]」。ここでは、マガリャンイス航海を分岐として先住民が悪しき方向へと変化してしまったことが特筆されている。

②ジョイ岬[48]

フレッチャー報告を含む幾つかの報告において巨人の足跡を見つけたとされるジョイ岬だが、『世界周航』ではこの巨人の足跡のエピソードが存在しない。

③ホープ岬[49]

友好的で無害、そして有用といった同地の先住民への肯定的描写はフレッチャー報告と同様であるが、フレッチャー報告に見られた先住民への巨人描写は『世界周航』にはない。

---

44 Drake, 1854[1628], pp. 34-37.
45 'In the reports of Magellanes voyage, it is said that this people pray to no maner of thing', ibid., p. 35.
46 'being fallen...to make Gods of Deuills', ibid., p. 36.
47 'which if it were true, there should seee to be a wonderfull alteration in them, since that time', ibid.
48 Ibid., pp. 37-38.
49 Ibid., pp. 43-45.

④デザイア港[50]

同地の先住民について、フレッチャーはマガリャンイス航海報告にて描かれた先住民と同定している。『世界周航』でも、一度地面に置いてから物を受け取るという習慣や、盗みに対する懺悔としての自傷行為といった特徴的な行動は同様に描写されているが、3つの大きな相違点が存在している。その1つ目は、身長への言及がない点である。2つ目は、フレッチャーがセタボス信仰とした先住民の信仰行為が、黒い太陽、白い月を特徴とする神への信仰[51]とされている点である。そして3つ目は、フレッチャー報告にはなかった描写として、同地の先住民は「この時までキリスト教徒に知られることのなかった[52]」人々とされ、その地はキリスト教国が進出するに値する[53]と、土地の豊かさや住民の従順さについて触れているという点である。

⑤サン・フリアン港[54]

同地での先住民との敵対過程及び理由については、フレッチャー報告と同様の描写である。しかし、先住民の巨人性、また先住民との接触過程の結末について相違点が存在している。巨大な身長と強靭な均整からPatagousまたはPentagoursとマガリャンイスが命名した先住民は、確かに立派な体格をしてはいる[55]が、同様の身長はイングランド人の中にもいるとし、マガリャンイス航海の報告ほど怪物的でも巨人的でもない[56]、と描写している。そして、先住民への巨人表象は、他国民による検証がないと思ったスペイン人による大胆な嘘である

---

50 Ibid., pp. 47-55.
51 'The black part hath set vpon it white moones, and the white part blacke Suns, being the marks and characters of their gods', ibid., p. 53.
52 'being neuer knowne to Christians before this time', ibid., p. 54.
53 'a land sufficient to recompence any Christian Prince in the world', ibid.
54 Ibid., pp. 58-61.
55 'Magellane was not altogether deceiued in naming them Giants, foe they generally differ from the common sort of men, both in stature, bignes, and strength of body', ibid., p. 60.
56 'but yet they are nothing so monstrous or giantlike as they were reported, there being some English men as tall as the highest of any that we could see', ibid.

[57]、と結論づけている。このくだりについては、第2章で紹介したクリフ報告を踏襲したものと考えられる。最終的に『世界周航』では、先住民の名前はPentagonesで、その身長は最高でも身長2.2から2.3メートルであるとされている[58]。また、接触過程の最後についても付け足しがなされており、他の諸報告では乗組員2人が殺された後、撤退したところで記述が終わっていたが、『世界周航』では、イングランド人との接触以降、先住民による攻撃はなくなり、平和になった[59]、と説明している。

以上、『世界周航』におけるフレッチャー報告との相違点を確認した。両報告における先住民描写の諸要素について表にすると次のようになる。

---

[57] 'but peraduenture the Spaniards did not thinke that ever any English man would come thither to reproue them, and thereupon might presume the more boldly to lie', ibid., pp. 60-61.

[58] 'the name Pentagones, Fiue cubits, viz., 7 foote and halfe, describing the full height (if not somewhat more) of the highest of them.', ibid., p. 61.

[59] 'Notwithstanding, the terrour which they had conceiued of vs, did henceforward so quench their heate, and take down their edge, that they both forgate reuenge, and seeming by their countenance to repent them no harme, suffered vs to doe what we would the whole space of two monethes after this, without any interruption or molestation by them; and it may perhaps be a meanes to breede a peace in that people towards all that may hereafter this, come that way', ibid.

表 1. フレッチャー報告と『世界周航』における先住民描写の比較

	フレッチャー報告	『世界周航』
ブラジル沿岸	友好的 堕落 (ポルトガルの影響)	友好的 堕落 (マガリャンイス航海の影響)
ジョイ岬	巨人(足跡)	
ホープ岬	巨人 友好的	友好的
デザイア港	巨人 セタボス信仰 (マガリャンイス 航海と同定)	黒い太陽と月の信仰 (未踏地)
サン・フリアン港	巨人 非友好的 堕落 (スペインの影響)	巨人性否定 非友好的 堕落(スペインの影響) 平和(イングランドの影響)

4. フレッチャー報告と『世界周航』の相違点が持つ意味

ドレイク世界周航直後の諸報告において、各先住民との接触過程は同様であったが、パタゴニア先住民の巨人性については肯定（フレッチャー、ジョン・ドレイク、シウヴァ）、否定（クリフ）、言及せず（コーク、ハクルート）、と3つに大別できた[60]。一方で、航海から約半世紀を経て公刊された『世界周航』では、パタゴニア先住民の巨人性について否定が選択され、その他の先住民描写に関しても、主要情報源であるフレッチャー報告とは異なる部分が2点確認できた。ブラジル沿岸における先住民の無信仰から悪魔崇拝への移行について、フレッチャー報告では同地先住民の堕落はポルトガルの影響とされていたが、『世界周航』ではマガリャンイス一行の影響とされている。また、デザイア港における先住民信仰について、『世界周航』ではマガリャンイス航海由来のセタボス信仰ではない、太陽と月を特徴とする神への信仰が描写されている。

フレッチャー報告について注目した先行研究では、ドレイクのイメージを貶めるような描写、すなわちドレイクや乗組員たちの犯罪や暴力描写に対してこの編集が行われていたとの指摘がなされている[61]。しかしながら、先に挙げた2点の相違点は、この指摘に当てはまらない。では、これらの相違点は何を意味するのか。以下において、『世界周航』を植民地言説の観点から分析した先行研究を踏まえて考察してゆく。

歴史学者のジョージ・カニザーレス-エスゲーラ（Jorge Cañizares-esguerra）は、アメリカの植民地支配におけるスペインの征服者とイングランドの海賊の類似性に言及した上で、エルナン・コルテス（Hernán Cortés）がアステカの悪魔と対峙したように、ドレ

60 16世紀末にロンドンにて出版されたジョージ・アボット（George Abbot）による世界地誌は、航海直後のドレイク航海に関する諸報告を反映した内容であった（Hamlin, 1996, pp. 409-410）。同書はペルーの先住民の一部について「巨大な人々で、普通のヨーロッパ人より高い身長である」（'Men of great ftature: yea, fome of them farre higher then the ordinaire forte of men in Europe'）と描写している（Abbot, 1970[1599]）。ここから、ドレイク周航直後における巨人先住民表象を否定した報告の影響は限定的であったと考えられる。

61 Hodgkins, 1997, p. 448; Grimm, 2015, pp. 39-40.

イクはスペイン人を悪魔と見做していたと論じ、『世界周航』においてはスペイン人が純真な先住民へ暴君的な支配を行う悪魔として描かれていたと指摘している[62]。文芸評論家のスティーブン・グリーンブラット（Stephen Greenblatt）の「驚異[63]」概念を援用して『世界周航』を読み解いた、英文学者のソフィー・ルメルシエ－ゴダール（Sophie Lemercier-Goddard）は、『世界周航』において、アメリカ先住民を奴隷化したスペインとポルトガルが「怪物的なカトリック[64]」として他者化され、同時に先住民は「プロテスタントのジェントルマンであるもう一人の自分[65]」として描かれたと論じている。また、ドレイクの存在が持つ政治的意味を考察した英文学者のマーク・ネッツロフ（Mark Netzloff）は、『世界周航』によるドレイク航海の再評価が、当時のスペイン支配地へのイングランドの干渉を擁護するものであったと指摘している[66]。

これらの先行研究から、『世界周航』には、アメリカにおける、イングランドによるスペインやポルトガルといったカトリック教国への対抗という題目が潜んでいることが解る。本稿で検討したフレッチャー報告と『世界周航』における相違点についてこの観点から読み解くと、ブラジル沿岸では、両報告ともにカトリック教国による先住民への悪影響を描いているが、『世界周航』ではその原因をマガリャンイス航海に求めることで、同航海を主導したスペインによる南米先住民への伝道（及び、それに伴う植民地支配）への疑義が強調されたと解釈できる。またデザイア港では、マガリャンイス航海由来の先住民信仰とは別の信仰が描写されることで、同地がマガリャンイス航海にて一行が訪れた地とは別の未踏地であること、すなわち同地におけるスペインの権利の否定が示唆されたと言える。

以上から、『世界周航』の先住民描写におけるフレッチャー報告との相違点は、スペインによるアメリカ支配への疑義そして否定を意味

62 Cañizares-esguerra, 2007, p. 1428.
63 グリーンブラットは驚異という概念について、「この表象全体を用いて、中世末期及びルネサンス期の人々は、見慣れぬもの、異質なるもの、恐ろしいもの、望ましいもの、また嫌うべきものを理解し、それ故にそれらを占有、もしくは捨て去っていった」と説明している（Greenblatt, 1991, pp. 21-23）。
64 'monstrous Catholic', Lemercier-Goddad, 2016, p. 45.
65 'alter ego of the Prtestant gentleman', ibid.
66 Netzloff, 2007, p. 148.

しているという解釈が成り立つ。

では、『世界周航』におけるパタゴニア先住民描写についてはどうか。

ルメルシエ－ゴダールは、『世界周航』の先住民描写における裸やボディペインティングといった特徴を、他者性の徴ではなく、自世界の内なる他者であるイングランド人女性に近似した徴であると論じており、パタゴニア先住民についても同様の解釈から、その巨人性を否定することで他者を自世界の内側へ取り込んだ、としている[67]。

しかし、ルメルシエ－ゴダールの論は、『世界周航』におけるパタゴニア先住民描写が、航海直後の主要情報源であったフレッチャー報告とは別の報告を基にしたものである、という点を見逃している。フレッチャーを含めた3つの報告が参照したマガリャンイス航海由来の巨人性は退けられ、クリフ報告のみにて描写された巨人性の否定説が採用されたというこの恣意的な取捨選択から、『世界周航』においてスペイン主導のマガリャンイス航海情報の否定が重要な意味を持っていたことが解る。したがって、単なるイングランドの内的世界への先住民の取り込みではなく、スペイン、先住民、そしてイングランドという三者間の関係において、この表象は読み解かれるべきであろう。

おわりに

グリーンブラットの「驚異」概念を援用するならば、マガリャンイス航海において巨人という「驚異」表象がなされ、スペインの支配下へと取り込まれたパタゴニアの巨人先住民は、しかしながら『世界周航』においてその「驚異」の徴である巨人性を除去された。さらに、巨人性の除去に付随して、マガリャンイス航海由来のパタゴンという先住民名も変化し、英語読みが可能なペンタゴンと命名[68]される。最

67 Lemercier-Goddad, op. cit., p. 44.

68 先に挙げたシウヴァ報告には、フレッチャー報告にも記された先住民の酒の嗜好について、命名という行為に関連した描写が存在している。フレッチャー報告では酒を気に入った先住民は「ワイン」という言葉を覚えて連呼した（Fletcher, op. cit., p. 49）と記述があるのに対し、シウヴァ報告では

後には、スペイン人との接触で凶暴化した同地の先住民はイングランド人との接触で平和化した。ここに、「巨人性の除去によってスペインの支配下から解放され、付随して行われた命名によりイングランドの支配下に入り、平和に暮らす」という、先住民を軸とした、スペインのアメリカ支配を否定しつつイングランドの進出を肯定する植民地言説を読み取ることができよう。

以上から、『世界周航』におけるパタゴニア先住民の巨人性の否定[69]は、スペインによるアメリカの植民地支配を否定すると同時に、イングランドによる同地への進出を肯定する植民地言説として機能していたと言える。

参考文献

Abbot, G. 1970[1599] *A Briefe Description of the Whole Worlde. Wherein is Particularly Defcribed, all the Monarchies, Empires, and Kingdomes of the Fame: with Their Feuerall Titles and Fcituations Thereunto Adioyning*. New York, Amsterdam: Da Capo Press, Theatrum Orbis Terrarum LTD [London. T. Iudfon].

Bawlf, S. 2004 *The Secret Voyage of Sir Francis Drake : 1577-1580*. new ed., New York: Penguin Books.

'Magallanes, Esta he minha Terra'（Silva, op.cit., p. 256）すなわち私の地（の名前）はマガリャンイスです、と先住民が言ったと描写されている。元々ポルトガル人であり、スペインに捕まったシウヴァによるこの描写の挿入は、メキシコ副王の命により書いたという経緯もあり（Corbett, 2007, p. 406）、スペイン側における命名と植民地支配との関連を示した事例として興味深い。

[69] フレッチャー報告の手稿を1677年に転写したジョン・コンヤーズ（John Conyers）は、『世界周航』からさらに半世紀後の、パタゴニア先住民への巨人表象の否定について自身の意見を述べている。コンヤーズによると、これまで巨人の存在には賛否両論あり、地図や地球儀における巨人描写についても同様であったという。コンヤーズは、パタゴニアの巨大なダチョウやハーブの摂取、また子供に油を塗る習慣によって先住民は巨人化したが、スペイン人によって同地方から追放されたことで、その巨大さを維持できなくなり、小人化したとしている。結論として、かつてはそれらの地に巨人はおり、現在はスペインによる迫害の結果、巨人はもう発見できない、としている（Conyers, 1854[1677], p. 96）。同描写では、本稿とは異なる文脈において先住民の巨人性とスペインの植民地支配との関連が示されており、非常に興味深い。

Cañizares-esguerra, J. 2007 "AHR Exchange The Core and Peripheries of Our National Narratives: A Response from IH – 35." in *American Historical Review*, Dec., pp. 1423-1431.

Cliffe, E. 1854[1600] "The Voyage of M. John Winter into the South Sea by the Streight of Magellan, in Consort with M. Francis Drake, Begun in the Yeere 1577." in *The World Encompassed by Sir Francis Drake,* W.S.W. Vaux. Printed for the Hakluyt Society, no. 16: pp. 269-284.

Conyers, J. 1854[1677] "Ex Libris." in *The World Encompassed by Sir Francis Drake*, W.S.W. Vaux. Printed for the Hakluyt Society, no.16: pp. 96-97.

Cooke, J. 1854[1577] "For Francis Drake. Anno dñi 1577." in *The World Encompassed by Sir Francis Drake*, W.S.W. Vaux. Printed for the Hakluyt Society, no. 16: pp. 187-218.

Corbett, J. S. 2007 *Drake and the Tudor Navy - With a History of the Rise of England as a Maritime Power.* Alcester: Delany Press.

Cummins, J. G. 1997 *Francis Drake: the Lives of a Hero.* New York: Palgrave Macmillan.

Drake, J. 1914a[1584] "First Account of the Voyage of Circumnavigation Given by John Drake." in *New Light on Drake: A Collection of Documents Relating to His Voyage of Circumnavigation, 1577-1580.* Printed for the Hakluyt Society: pp. 18-34.

— — — 1914b[1587] "Second Narrative of the Voyage of Circumnavigation Given by John Drake." in *New Light on Drake: A Collection of Documents Relating to His Voyage of Circumnavigation, 1577-1580.* Printed for the Hakluyt Society: pp. 34-56.

Drake, Sir F. 1854[1628] "The World Encompassed by Sir Francis Drake." in *The World Encompassed by Sir Francis Drake,* W.S.W. Vaux. Printed for the Hakluyt Society, no. 16: pp. 1-162.

———1854 *The World Encompassed by Sir Francis Drake*, W.S.W.

Vaux. Printed for the Hakluyt Society, no. 16.

Duviols, J-P. 1985 *L'amérique espagnole vue et rêvée. Les livres de Voyages de Christophe Colomb à Bouganville.* Paris: Promodis.

Fletcher, F. 1854[1577] "The First Part of the Second Voyage about the World." in *The World Encompassed by Sir Francis Drake,* W.S.W. Vaux. Printed for the Hakluyt Society, no. 16: pp. 7-96.

Greenblatt, S. 1991 *Marvelous Possessions.* Oxford: Clarendon Press.

Grimm, M. 2015 "Violence, Empire, and the Narration of Travel in The World Encompassed" in *The James Blair Historical Review*, Vol. 6, pp. 35-52.

Hakluyt, R. 1965[1589] *The Principall Navigations, Voiages and Discoveries of the English Nation*, vol.2, Hakluyt Society and the Peabody Museum of Salem: at the University Press, Extra series, no. 39.

Hamlin, W. M. 1996 "Imagined Apotheoses: Drake, Harriot, and Ralegh in the Americas." in *Journal of the History of Ideas.* vol. 57, no. 3, pp. 405-428.

Hodgkins, C. 1997 "Stooping to Conquer: Heathen Idolatry and Protestant Humility in the Imperial Legend of Sir Francis Drake." in *Studies in Philology*, 94, pp. 428-64.

Lemercier-Goddard, S. 2016 "3 False Play and Dumb Show in the World Encompassed by Sir Francis Drake (1628)." in Frédéric Regard (ed.) *British Narratives of Exploration: Case Studies on the Self and Other.* New York: Routledge, pp. 39-50.

Netzloff M. 2007 "Sir Francis Drake's Ghost: Piracy, Cultural Memory, and Spectral Nationhood." in Claire Jowitt (ed.) *Pirates? The Politics of Plunder, 1550-1650.* New York: Palgrave Macmillan, pp. 137-150.

Nuttall, Z. (tr. and ed.) 1914 *New Light on Drake: A Collection of Documents Relating to His Voyage of Circumnavigation,*

1577-1580: Printed for the Hakluyt Society.

Pigafetta, A. 1999[1525] *Relazione del Primo Viaggio Intorno al Mondo*. Progetto Manuzio, 1a Edizione Elettronica [Istituto Editoriale Italiano, Collana Viaggi Esplorazioni Scoperte, a Cura di Camillo Manfroni, 1956].

Quinn, D. B. 1990 *Explorers and Colonies: America, 1500-1625*. London: The Hambledon Press.

Silva, N. da 1854[1579] "The Relation of a Voyage Made by a Pilot, Called Nuno da Silua, for the Vice-roy of New Spaine, the 20. of May in the Yere of Our Lord 1579." in *The World Encompassed by Sir Francis Drake*, W.S.W. Vaux. Printed for the Hakluyt Society, no. 16: pp. 254-268.

Suarez, T. 1992 *Shedding the Veil: Mapping the European Discovery of America and the World*. Singapore: World Scientific.

Vaux, W. S. W. 1854 "Introduction." in *The World Encompassed by Sir Francis Drake*, W.S.W. Vaux. Printed for the Hakluyt Society, no. 16: pp. i-xl.

長尾直洋 2006 「ヨーロッパ世界による他者表象に関する一考察－大航海時代における巨人族表象について－」『REHK』14、49-66頁。

Un estudio contrastivo de los verbos *ser/estar* en español e *izan/egon* en euskera

Miki NISHU

1. Introducción

Existen dos verbos copulativos en español[1]. Aprender la distinción del uso de estos verbos, que son *ser* y *estar*, es una de las reglas más características e importantes de la gramática española para L2. El verbo *ser* se usa para denotar las situaciones permanentes mientras que el verbo *estar* se usa para expresar alguna situación o estado concreto. Por otra parte, en la lengua vasca o euskera, también existen dos verbos copulativos, que son *izan* y *egon*. En el caso del euskera, en *izan* y *egon* también se diferencian los usos entre ellos. Este trabajo intenta resumir la distinción del uso de los verbos copulativos en español *ser/estar*. Después, se presentan las funciones predicativas de *izan/egon*, que son los verbos copulativos en euskera. Finalmente, se analiza y compara la distinción de los dos verbos copulativos en español y la distinción de los copulativos en euskera.

Para comenzar, esta sección va a tratar la definición del verbo *egon*, que es el verbo copulativo del euskera que corresponde al verbo *estar* del español. En el diccionario digital de euskera llamado *Orotariko Euskal Hiztegia* por la Real Academia de la Lengua Vasca lo define como:

> "... Aunque es de uso general, su frecuencia es inferior en el Norte, donde suele aparecer con un sentido más marcado de permanencia (aunque no

[1] *Ser* y *estar* suelen ser considerados los dos prototipos de lo que es una cópula. *Parecer*, en construcciones como "María parece linda", se comporta como cópula, en tanto solo enlaza una propiedad con su referente, pero en "Me parece que María es linda", el uso de "parecer" ya no es de solo asociación de elementos, aportando un valor más psicológico y connotativo por parte del locutor, como cuando se dice "Considero que María es linda".

faltan ejs. sin éste, ya desde Dechepare y Leiçarraga, q.v.). En textos guipuzcoanos todavía es relativamente poco frecuente en el s. XVIII, aunque su uso va creciendo durante el XIX — ya en Lardizabal p.ej., aunque no en los demás autores, domina claramente — hasta hacerse en el s. XX casi tan usual como *izan*. En los vizcaínos parece más extendido que en los guipuzcoanos ya desde los primeros textos, siendo incluso más frecuente que *izan* en el s. XX. Esta tendencia a la sustitución parece aumentar en estos últimos años en el Sur. ..."

(Orotariko Euskal Hiztegia)

Lo más interesante aquí es lo que hemos subrayado nosotros en esa primera línea: "su frecuencia es inferior en el Norte", que es el País Vasco francés. Además, si seguimos con la explicación, se ve que dice cosas como "En textos guipuzcoanos...", "En los vizcaínos..." y "... en el Sur...." Por lo que se podría decir, que su uso varía mucho según el dialecto de cada región. Además se mencionan las variaciones según la época: "... en el s. XVIII..." y "... durante el XIX". Recientemente, a final de los años 60, se creó el euskera estándar, llamado *batua*. En nuestro trabajo se plantea la siguiente hipótesis.

Hipótesis: El verbo *ser* en español corresponde perfectamente al verbo *izan* en euskera, mientras el verbo *estar* en español corresponde completamente al *egon* en euskera.

Como se ha señalado anteriormente, la diferenciación del uso de *izan/egon* es mucho más frecuente en el País Vasco español que en el País Vasco francés. Por lo tanto, este trabajo se centrará en el euskera estándar o *batua* sin entrar en los

diferentes dialectos.

Tres cosas principales componen el método para análisis; 1) Resumir los usos de la distinción de los verbos copulativos en español: *ser/estar*, 2) hacer una lista de las distinciones de los verbos copulativos en euskera: *izan/egon*, y 3) observar los usos de *ser/estar* e *izan/egon*. En este trabajo, se van a tratar los ejemplos según las construcciones tipológicas. Después se observan las categorías desde un punto de vista semántico. Así, tras analizar los ejemplos en ambos idiomas, se intenta ver si realmente la diferencia de uso es la misma en ambos casos.

2. Funciones predicativas de los verbos *ser y estar*

Teniendo en cuenta de los conceptos acerca de *SLPs* e *ILPs*, esta sección intenta mostrar ejemplos de los verbos copulativos en español: *ser* y *estar*. En primer lugar, el DRAE muestra la definición de *ser* como "para afirmar del sujeto lo que significa el atributo." Y la definición del verbo *estar* como "para expresar un determinado estado del sujeto."

De acuerdo con Vaño-Cerdá (1982: 1), el tratamiento de los verbos *ser* y *estar* como copulativos surge de los estudios pioneros de Vicente Salvá y Andrés Bello, quienes consideraron que estos son solo elementos existenciales que contribuyen a asociar elementos nominales con elementos atributivos. Posteriormente, esto ha dado origen a una discusión que aún hoy persiste en el estudio de la gramática española, en cuanto a la función discursiva de estos verbos.

Porroche Ballesteros (1998) resume los siguientes puntos de que están de acuerdo la mayor parte de los investigadores en relación con la explicación de los usos de *ser* y *estar*:

1) Con sustantivos, infinitivos y pronombres se utiliza el verbo *ser*.

2) El verbo *ser* significa 'existir', 'suceder' y 'verificarse'.

3) Con gerundios se utiliza el verbo *estar*.

4) El verbo *estar* expresa localización.

5) El participio, con *ser*, forma la pasiva de acción; con *estar*, denota el resultado de la acción o un estado consecuencia de la misma.

(Porroche Ballesteros 1998: 14)

Respecto del uso de *ser* y *estar* con adjetivos, ha surgido una discusión en cuanto a su funcionamiento como cópulas entre adjetivos. Hay posturas que contraponen el uso de estos verbos (*colocar autores -e.g. Porroche 1998-*), como las que se exponen a continuación

A) *Ser* atribuye al sujeto cualidades esenciales o permanentes. *Estar*, cualidades accidentales o transitorias.

(1) La nieve es blanca.

(2) El agua está caliente.

B) *Ser* denota cualidad. *Estar*, estado:

(3) Él es guapo.

(4) El campo está hermoso.

C) *Ser* indica lo conceptual. *Estar*, lo que es objeto de una percepción inmediata:

(5) El hombre es mortal.

(6) La sopa está caliente.

D) *Ser* expresa las cualidades normales o habituales; *Estar*, un cambio o una desviación de lo que se considera normal para el sujeto:

(7) María es guapa.

(8) María está guapa.

(*Ibíd*: 14)

(9) Él es joven.

(10) Él está muerto.

Los ejemplos (7) y (8) aplican a la oposición permanente/transitorio sobre la cual se cimenta la distinción tradicional entre los verbos *ser* y *estar*. Sin embargo, como se observa en los ejemplos (9) y (10), tenemos una contraposición sobre el posible uso de estos verbos con adjetivos, dado que lo joven no es permanente y lo muerto no es transitorio. Para explorar la distinción *ser/estar* + adjetivos, veamos los dos conceptos útiles en la sección siguiente.

3. *Stage-level predicates (SLPs)* e *Individual-level predicates (ILPs)*

Esta sección se va a presentar un parámetro semántico para la distinción de los verbos copulativos, llamados *stage-level predicates (SLPs)* e *individual-level predicates (ILPs)*. De acuerdo con Leonetti (1994), los *SLPs* son componentes de predicación representantes de lo breve, transitorio o accidental en el tiempo de la acción. Con esta explicación conceptualiza el uso del verbo *estar*. Por otro lado, los *ILPs* se relacionan con lo permanente y de duración prolongado en la ejecución de la acción. Según Maienborn (2005), existen dos oposiciones que sirven de base para comprender la funcionalidad de las cópulas: lo temporal vs. lo permanente y lo accidental vs. lo esencial.

Además, Kageyama (2011) trató de explicar las funciones que se han relacionado con la distinción entre *stage-level predicates* e *individual-level predicates* a través de examinar los trabajos del Diesing (1992) y Kratzer (1995).

(11) a. *Stage-level predicates* posee variable de evento.

e.g. *available* (Ev, x)

b. *Individual-level predicates* no posee variable de evento.

e.g. *intelligent* (x)

Según Maienborn (2005), la concepción de las eventualidades en la lógica davidsoniana se puede definir como en (12) y (13), en donde se presentan las siguientes propiedades:

(12) Davidsonian eventualities:

Davidsonian eventualities are spatiotemporal entities with functionally integrated participants.

(13) Ontological properties of eventualities:

a. Eventualities can be located in space and time.

b. Eventualities can vary in the way that they are realized.

c. Eventualities are perceptible.

En los ejemplos (14)-(16) se ilustran unos ejemplos más notables de uso.

(14) a. La camisa está sobre la silla. (*SL*, locativo)

b. *La camisa es sobre la silla.

(15) *La camisa está mojada sobre la silla.

(16) a. Los perros son peligrosos. (*IL*, genérico)

b. Los perros están furiosos. (*SL*, no-genérico)

En el ejemplo (14) con un adverbio locativo el verbo *estar* es la opción por defecto. El verbo *estar* acepta sujeto eventivo, predicados locativos. (14a) es gramatical mientras (14b) no lo es. El ejemplo (15) es una oración donde se combina la construcción *estar* + participio y *estar* + locativo. Maienborn (2005) observa que si se añade un adjetivo a *estar*, toda la estructura de cópula + complemento predicativo no puede ser modificada por predicados de complementos circunstanciales de lugar. Entonces en caso de (15), el adjetivo *mojado,* que muestra un estado y *sobre la silla*, denota el locativo no se permite una buena concordancia. Los ejemplos (16a, b) muestran que la distinción *ser/estar* denota la interpretación genérico/existencial (no-genérico).

Camacho (2012) resume que hay ciertos adjetivos como *muerto, vivo, loco, lleno, etc.* que solo aparecen con el verbo *estar*. Aunque algunos de estos ejemplos no se interpretan un estado temporal como *muerto* y *roto*, se los tratan como una situación o un (resultado de) estado. Sin embargo, hay que notar que cuando aparecen con el elemento como *siempre que* o *cuando*, la oración sería agramatical, tal como lo ilustra el ejemplo (17).

(17) *Siempre que Napoleón estaba muerto / vivo / loco, todo le salía mal.

Los ejemplos (18) – (20) indican la distinción de *ser/estar* con los mismos adjetivos.

(18) a. La vida es difícil.

b. La vida está difícil.

(19) a. Ese truco es sucio.

b. Ese truco está sucio.

(20) a. Sus ojos son azules.

b. Sus ojos están rojos.

(*Ibíd:* 158)

Tras estos ejemplos, como mencionan Kratzer (1995) y Diesing (1992), vemos que los llamados *SLPs* incluyen una variable de evento, por lo contrario, los *ILPs* no la tienen.

En cuanto a la categoría de los adjetivos, Luján (1981) muestra que los adjetivos que presentan en (21) denotan básicamente propiedades temporales. En contraste, el ejemplo (22) presenta los adjetivos que suelen concordar con el verbo *ser* aunque hay casos especiales cuando se concuerda con el verbo *estar*.

(21) Adjetivos con el verbo *estar*:

ausente, solo, próximo, vacío, lleno, descalzo, harto de, etc.

(22) Adjetivos con el verbo *ser*:

discreto, inteligente, cortés, sabio, etc.

(Luján 1981: 172f)

4. Verbos copulativos en euskera: *izan* y *egon*

4.1. Verbos en euskera

Antes de comenzar con los verbos copulativos en euskera, veamos brevemente las propiedades fundamentales de los verbos en euskera en general. Los verbos en euskera pueden ser morfológicamente sintéticos, esto es, que con una palabra expresan toda una predicación (e.g. *noa* 'me estoy yendo', *dakit* 'lo sé'), o analítico, que se constituye en una forma en participio y un auxiliar (e.g. *joaten naiz* 'yo voy', *jakingo dut* 'lo sabré'). Los verbos analíticos en euskera se suelen denominar perifrásticos en la tradición gramatical vasca. (Hualde et al., 2001: 155)

4.2. Verbos copulativos en euskera

Hemos revisado los usos de *ser/estar* en español. Aquí se empieza a tratar los verbos copulativos en euskera: *izan* y *egon*. En el diccionario *Orotariko Euskal Hiztegia* por la Real Academia de la Lengua Vasca define los verbos *izan* y *egon* de la siguiente manera:

> IZAN :I (Vb. intrans.). 1. Ser, existir. "Sean los que fueren, bira diranak" Lar. "Es quien es, dana da" Ib. "Sea lo que fuere: [...] ...
>
> EGON: 1. (Con inesivo o adv. de lugar). Estar, estar quieto (en un lugar); estar (en un período de tiempo); estar (en una situación). ...
>
> (Orotariko Euskal Hiztegia)

Las formas conjugadas de *izan* son irregulares, supletivas, como lo son en español. De acuerdo con Hualde et al. (2001: 107), esta cópula, al igual que con *egon*, pueden portar como complementos frases adjetivales o nominales. Como auxiliar, *izan* se combina con el verbo intransitivo, produciendo *jeikitzen naiz* 'me levanto', *erosten dut* 'yo estoy comprando'. Su sentido central es el de presente habitual, pero también puede asumir valores de aspecto continuo y progresivo.

(23) Egunero zazpietan jeikitzen naiz.

a. diario a. las. siete levantar.IMPF AUX.PRS

'Todos los días me levanto a las siete (de la mañana)'

(*Ibíd*: 200)

4.3. Construcciones perifrásticas

Un pequeño conjunto de verbos tienen usos secundarios especializados cuando se combinan con formas verbales sin expresión del tiempo gramatical conformando lo que se denominan *perífrasis*. En términos semánticos son

elementos que solo funcionan como modificadores aspectuales de la acción. Los verbos con los cuales se conforman tales perífrasis son *ari/jardun* 'estar involucrado en', *izan, egon, ibili* 'caminar', *joan* 'ir', *jakin* 'saber', y *ukan/eduki* 'tener'.

El verbo *ari* 'estar involucrado en' toma complementos que indiquen actividad, y estén marcados con dativos o locativos, junto con *da*, como se observa en (24), obtiene valores progresivos.

(24) Lanean/lanari ari da.
trabajar.LOC/trabajar.DAT está
'él/ella está trabajando'

Una combinación formalmente similar de *egon* con nominalizaciones con locativo se pueden emplear en todos los dialectos; el predicado principal retiene su lectura estativa básica, lo que permite que en esta construcción se pueda emplear también *izan*.

(25) Nere aita musika entzuten egon/izan da plazan.
mi padre música oir.NOM.LOC ser/estar AUX plaza.LOC
'Mi padre ha estado en la plaza escuchando música' (*Ibíd*: 228)

4.4. Función genérica y de membresía a una clase

En (26) y (27) presentamos datos que ilustran el uso de *izan* como genérico.

(26) Txakurr-a-k ugaztun-a-k dira
perro-DET-PL mamífero-DET-PL son
'Los perros son mamíferos'
(27) Haritz-a zuhaitz saindu-a da

roble-DET árbol sagrado-DET es

'El roble es un árbol sagrado' (*Ibíd*: 96)

En (28) y (29) se presenta el uso de la cópula para expresar membresía de clase.

(28) Irakasle-a naiz.

profesor-DET soy

'Soy un profesor'

(29) Esther bizkaitarr-a da.

Esther viscaíno-DET es

'Esther es (una) vizcaína' (*Ibíd*: 97)

5. Análisis

5.1. Usos predicativos

De acuerdo con Porroche Ballesteros (1998), existen diferencias entre construcciones predicativas en las que el verbo es el eje central de la predicación, y construcciones atributivas o copulativas, en las que el nominal o el adjetivo es el núcleo de la predicación.

En esta sección intentamos mostrar un contraste de los verbos copulativos en español y en euskera. Aquí tenemos tres subsecciones; usos predicativos, usos auxiliares y usos atributivos y copulativos. Basando los ejemplos de Porroche Ballesteros (1998), examinamos los ejemplos preguntando a los informantes nativos de euskera. Los ejemplos en *a* ilustran los datos en español, en tanto que los que están en *b* son en euskera. Las letras en negrita indican los verbos copulativos correspondientes a cada lengua.

Según Porroche Ballesteros (1998), los verbos *ser* y *estar* pueden cumplir funciones de predicación verbal en estas situaciones:

1) *Ser* significa 'existir', 'tener lugar' y 'suceder':

(30) a. Dios **es** ('Dios existe.')

b. Jainkoa **da**.

(31) a. La clase **es** a las 6. ('La clase tiene lugar a las 6.')

b. Klasea seiretan **da**.

(32) a. La boda **es** en la catedral. ('La boda tiene lugar en la catedral.')

b. Ezkontza katedralean **da**.

(33) a. ¿Qué **será** de mí?

b. Zer **izango da** nitaz?

(34) a. ¿Qué **será** de los niños? ('¿Qué sucederá con los niños?')

b. *Zer **izango da** umeetaz?

c. Zer **gertatuko zaie** umeei?

Se observa que el ejemplo (30a) que se interpreta 'existir' corresponde al verbo *izan* en euskera. También podemos ver que los ejemplos (31a) y (32a) con el verbo *ser* que significa 'tener lugar' corresponden con *izan*. Pasa lo mismo en el caso del ejemplo (33), que expresa 'suceder' con verbo *ser* en español corresponde al *izan* en euskera. No obstante, existen diferencias de interpretación en los hablantes en euskera de las oraciones en español (33a) y (34a), en cuanto a que el 'ser' expresado en (33a) sigue una equivalencia con el verbo 'suceder', lo que lo hace susceptible de ser empleado con *izan*, en tanto que (34a) sigue una equivalencia con el verbo 'pasar', lo que lo hace ininterpretable en términos de *izan*, como se observa en (34b).

2) *Estar* expresa la localización:

(35) a. Yo **estoy** en la universidad.

b. Ni unibertsitatean **nago**.

(36) a. **Estamos** aquí.

b. Hemen **gaude**.

c. Hemen **gara**.

Los ejemplos (35a, b) son un par de ejemplos que se corresponden con *estar* en español y *egon* en eusker en la expresión de la localización. *Nago* es una inflección de *egon*. Por lo que se puede observar, expresar la localización también parece no tener irregularidad. No obstante, en el caso de (36a), los informantes contestaron que se puede expresar con *izan* y *egon*. El ejemplo (36b) es una frase con el verbo *egon*, mientras el ejemplo (36c) se expresa utilizando *izan*. El ejemplo (36b) tiene mismo sentido de 'acabamos de llegar'. Por otro lado, explicaron que el ejemplo (36c) se expresa la localización sin mencionar ningún movimiento. A pesar de eso, ambos ejemplos (36b) y (36c) son demasiados cortos, y tal como no hay gran diferencia de interpretación. También la consulta ha llevado a cabo, como los casos entre (33) y (34), que se cambia la gramaticalidad según el cambio de persona del sujeto. Y resulta que se ha pasado lo mismo. Esto es, aunque sea la primera persona singular, se usa *izan* y *egon* para expresar la localización sin problema. Por lo cual, se observa que en la expresión de la localización, en español se usa *estar* mientras en euskera se usa *izan* y también, *egon*.

5.2. Usos auxiliares

De acuerdo con Porroche Ballesteros (1998), los verbos *ser* y *estar* funcionan como auxiliares ante formas impersonales de los verbos, expresando voz pasiva, conjugaciones con aspecto progresivo, etc.

Ante participios, *ser* expresa el desarrollo de una acción –la voz pasiva –; *estar* denota la consecuencia de la misma:

(37) a. La casa **es** construida por los obreros.

b. Etxea langileek eraikitzen **dute**.

(38) a. La casa **está** construida.

b. Etxea eraikita **dago**.

(39) a. Los niños han **sido** traídos.

b. Ume-ak ekarri **dira**.

(40) a. Los libros **fueron** pedidos al profesor.

b. Irakaslea-ri liburu-ak eskatu **zaizkio**.

Estar + gerundio representa sucesos que ocurren de manera prolongada en el tiempo:

(41) a. Los obreros **están** construyendo la casa.

b. Langileak etxea eraikitzen **ari** dira.

En euskera, cuando se expresa el progresivo, como mencionado anteriormente, *ari* es uno de los verbos que se usa para modificar progresivo cuyo significado es 'estar involucrado en'.

5.3. Usos atributivos o copulativos

En primer lugar, vamos a presentar los contrastes entre oraciones con el verbo *ser* en español e *izan* en euskera. Los ejemplos (42) - (47) ilustran la distinción del verbo copulativo.

(42) a. Carmen **es** española.

b. Carmen espaniarra **da**.

(43) a. Juan **es** listo.

b. Juan argia **da**.

(44) a. Carmen **es** de ojos negros.

b. Carmenes begi belzduna **da**.

(45) a. Pedro **es** alto, moreno y delgado.

b. Pedro altua, beltzarana eta argala **da**.

(46) a. María **es** católica.

b. Maria katolikoa **da**.

(47) a. El hombre **es** mortal.

b. Gizakia hilkorra **da**.

Se puede observar que el verbo *izan* corresponde al verbo *ser* para expresar nacionalidad, personalidad, presencia etc.; como con el verbo es *ser* en español, se usa *da*, que es una forma de *izan*. El ejemplo (47) indica lo conceptual.

A continuación, aquí vamos a observar otros ejemplos contrastando el verbo *estar* en español con el verbo *egon* en euskera. Los ejemplos (48)-(54) son expresiones contrastivas del uso de verbos *estar* en *a.* y *egon* en *b.*

(48) a. La sopa **está** caliente.

b. Zopa bero **dago**.

(49) a. María **está** guapa.

b. Maria polita **dago**.

(50) a. Juan **está** cansado.

b. Juan nekatuta **dago**.

(51) a. Juan **está** listo.

b. Juan prest **dago**.

(52) a. **Estoy** más bien triste.

b. Zertxobait triste **nago**.

(53) a. Carmen **está** roja de vergüenza.

b. Carmen gorri **dago** lotsaren lotsez.

(54) a. María **estuvo** callada todo el tiempo.

b. Maria ixilik **egon zen** dendora osoan.

El ejemplo (48) muestra objeto de una percepción inmediata y el ejemplo (49) indica un cambio o una desviación de lo que se considera normal para el sujeto. Los ejemplos (50) y (51) indican ciertas situaciones o condiciones. El ejemplo (52) expresa el sentimiento. Los ejemplos (53) y (54) muestran los estados temporales. A través de estos ejemplos, podemos saber que *dago*, que es la inflexión de *egon*, se corresponde con verbo *estar* en español. Vamos a observar los siguientes ejemplos:

(55) a. Juan **está** de mal humor.

b. ?Juan umore txarrez **dago**.

(56) a. Carmen **está** de vacaciones.

b. ?Carmen oporretan **dago**.

(57) a. Paco **está** de camarero en París.

b. ?Paco Parisen **dago** zerbitzari lanetan.

(58) a. Los dos **están** de bromas.

b. ?Biak txantxetan **daude**.

(59) a. Pedro **está** sin trabajo.

b. ?Pedro lan gabe **dago**.

De los ejemplos (55) a (59), los ejemplos que están en *b.* se marcaron una interrogativa debido a que son ejemplos en los que se prefiere usar otros verbos como *ibili* 'andar', o *aritu* 'trabajar'. Sin embargo, no es imposible usar el verbo *egon* en estas contrucciones sintácticas en euskera.

Ejemplos como (60) y (61) tienen dos interrogativas porque en estos tipos de frase no se permite expresar *izan* ni *egon* en euskera. Son frases que, aunque estructuralmente son complejas, se pueden interpretar.

(60) a. Este jersey te **está** muy bien.

b. ??Jertse honek ondo ematen dizu.

c. Jertsei hori oso ondo daukazu.

(61) a. El abrigo le **estaba** corto.

b. ??Berokia laburregia zen beraretzat.

c. Berokua motza zeukan.

Los ejemplos (62) y (63) muestran que las oraciones son agramaticales con los verbos copulativos *izan* y *egon*. No tienen estas formas de expresión ya que serían ininterpretables a los nativos de euskera si lo tradujéramos literalmente del español al euskera para estos tipos de frases.

(62) a. ¿A qué día **estamos**? -- **Estamos** a martes.

b. *Zer egunetan gaude? -- Asteartean gaude.

(63) a. ¿Cuánto **son** las uvas?-- **Son** un euro el kilo.

b. *Mahatsak zenbat dira? -- Kilo bakoitza euro bat da.

c. Zenbatean **daude** mahatsak? -- Euro batean **dago** kiloa.

Aquí también habrá que fijar qué tipo de construcción sigue al verbo copulativo cuando les parece agramatical e ininterpretable a los nativos de euskera. Considerando las construcciones en español, a los verbos que tenemos aquí les sigue un sintagma preposicional, como en (62a), o un sintagma adjetival que expresa cantidades, como en (63a). Observamos que el ejemplo (63b) que expresa con *izan* es agramatical mientras el ejemplo (63c), con *egon* es gramatical.

6. Discusión

En esta sección, intentamos visualizar la distribución de los usos de verbos *ser/estar* en español e *izan/egon* en euskera. Hemos hecho una lista de los usos

que hemos visto en la sección anterior coloreando gráficamente los usos a los que se corresponde. Aquí muestra como lo abajo.

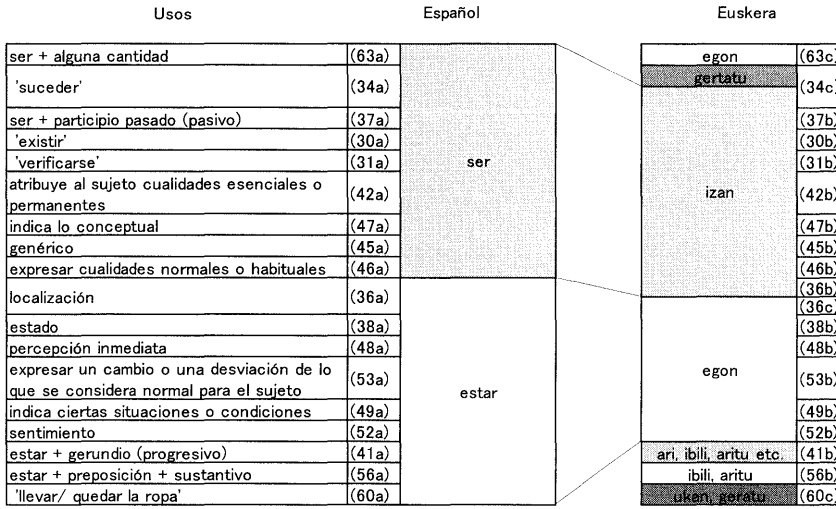


Figura 1. Distribución de los usos de *ser/estar* e *izan/egon*

En la Fig.1, hemos puesto un ejemplo representativo de cada uno de los usos traídos en las secciones anteriores. Se puede observar que todos los usos que tiene verbo *ser* corresponden a la mayoría de los usos de *izan*. Mientras que todos los usos de *egon* se cubren con el verbo *estar*.

Además, se puede ver que la variación de *estar* es más amplia que la de *egon*. Por ejemplo, en cuanto a la expresión locativa, en el caso del euskera, se puede usar cualquiera de estos verbos. Por otra parte, para la expresión de progresivo, hemos visto que se usa *ari*, *egon*, *izan*, *ibili* dependiendo de la condición gramatical y contextual. Para expresar 'llevar/quedar la ropa' en español no se puede traducir literalmente, sino que se usa *ukan* 'tener', o *geratu* 'quedar'.

7. Conclusión

En resumen, este trabajo ha observado los ejemplos de los verbos copulativos en español y en euskera si los usos de *ser* y *estar* corresponde perfectamente a los usos de *izan* y *egon*. En primer lugar, el verbo *izan* en euskera *batua* corresponde al verbo *ser* en mayor parte cuando se expresa nacionalidad, personalidad, existencia, etc. Además, se aclaró que *izan* tenía más variación que *ser*, y a veces *izan* se usaba en función de locativo como *egon*.

Por otro lado, se ha observado que el verbo *egon* tiene menos variación que *estar*. También se ha averiguado que cuando expresa progresivo, no se constituye solo con *egon*, sino también con otros verbos como *ari*. Después, cuando se expresa 'medir algo', cuya forma *estar* + preposición + cantidad o número, no se utilizaría el verbo *estar* mientras se usan otros verbos como *ibili*, *aritu*, etc. Corresponde al verbo *estar* en mayor parte cuando se expresan una situación, un estado temporal, y un sentimiento. También, hemos podido observar que hay casos en los que el verbo *egon* no se corresponde con el verbo *estar* cuando le sigue un sintagma preposicional. Por último, se ha aclarado que la expresión '*estarle* bien/mal' que significa 'caer', tampoco se expresa con el verbo *egon*. Por lo tanto, concluimos que el verbo *ser/izan*, y *estar/egon* no corresponde perfectamente en sus usos.

En este trabajo hemos resumido con una visión panorámica de los usos *ser/estar* e *izan/egon*. Para el futuro trabajo, tenemos tres puntos principales. El primero es que, por supuesto, es necesario llevar a cabo más investigación para confirmar esta hipótesis a fondo. Para ello, es necesario observar profundizando la clasificación de uso gramatical y semántico a la investigación cualitativa. También a través de este trabajo, algunos informantes han sugerido que en euskera no se usa tanto la forma de voz pasiva. Junto con la observación de gramática descriptiva, también es importante saber si se usa realmente, medir frecuencia del uso, o más para la investigación cuantitativa. Por último, en este

trabajo se ha observado que hay casos que se puede usar ambos verbos, *izan* y *egon*. Se necesita examinar más profundamente la forma, el contexto y la interpretación de cada caso.

Bibliografía

Camacho, J., (2012). *Ser* and *Estar*: The individual/stage-level distinction and aspectual predication. En *The handbook of Hispanic linguistics,* (pp. 435-475). ed. J.I. Hualde, A. Olarrea and E. O'Rourke. Oxford: Blackwell Publishing.

De Rijk, R.P.G., (2007). *Standard Basque: A Progressive Grammar*. Mass.: MIT Press.

Diesing, M., (1992). *Indefinites*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Fernández Leborans, M. J., (1999). La predicación: Las oraciones copulativas. En *Gramática descriptiva de la lengua española*, (pp. 2354-2460). Ed. I. Bosque and V. Demonte, Madrid: Espasa.

Hualde, J.I., & Ortiz de Urbina, J. (2001). *A Grammar of Basque*. De Gruyter Mouton (eBook)

Kageyama, T., (2011). Event Predication and Property Predications. En *NINJAL Project Review*, No. 6. (pp.17-25). Tokyo: National Institute for Japanese Language and Linguistics.

Kratzer, A., (1995). Stage-level and individual-level predicates, En *The Generic Book*, (pp. 125-175). Ed. G.N. Carlson and F.J. Pelletier, Chicago and London: The University of Chicago.

Luján, M., (1981). A Semantic Analysis of the Spanish Copulative Verbs. En *Linguistic Symposium on Romance Languages*, 9, (pp.123-146). Ed. W. Cressey, and D. Napoli, Washington: Georgetown University.

Maienborn, C., (2005). A discourse-based account of Spanish 'ser/estar'. En *Linguistics,* Vol. 43-1, (pp. 155-180). Walter de Gruyter.

Mejías-Bikandi, E. (1990). Construcciones causativas en euskera. En *Anuario del*

Seminario de Filología Vasca "Julio de Urquijo": International Journal of Basque Linguistics and Philology. (ASJU). XXXIV-3, (pp.669-698). Donostia: Diputación Foral de Guipúzcoa.

Navas Ruiz, R., (1977). *Ser y estar: El sistema atributivo del español,* Salamanca: Almar.

Porroche Ballesteros, M. (1998). *Ser, estar y verbos de cambio.* Madrid: Arco/Libros, S. A.

Real Academia de la Lengua Vasca: Diccionario digital. *Orotariko Euskal Hiztegia.* <http://www.euskaltzaindia.eus/index.php?option=com_oeh&view=frontpage&Itemid=413&lang=eu> [consulta realizada septiembre 2016].

Real Academia Española: Diccionario digital. *Diccionario de la lengua española* (DRAE). <http://www.rae.es/recursos/diccionarios> [consulta realizada septiembre 2016].

Vaño-Cerdá, A. (1982) *Ser y estar + adjetivos: un estudio sincrónico y diacrónico.* Tübingen: Gunter Narr Verlag.

El cambio de F- > *h*- en castellano: la evolución fonética y el sustrato del vasco-íbero

Yohei MISHIMA

1. INTRODUCCIÓN

Para explicar esta problemática lingüística, el cambio de F- > *h*- en castellano, se ha venido aceptando ampliamente la teoría sustratística presentada por R. Menéndez Pidal, en sus *Orígenes del Español* (1926), donde estudia magistralmente el tema en cuestión. De acuerdo con su hipótesis, por la influencia de la lengua vasca y la íbera, que carecían de la /f-/ inicial, la F- inicial latina se sustituyó por la *h*- aspirada sin sonido inmediato y posteriormente desapareció. Sin embargo, su propuesta no conlleva no pocos problemas. Es por esto que, hasta la fecha, se han presentado explicaciones diversas a las planteadas en su investigación. Una de ellas es el paso de la F- inicial latina a la *h*- como una evolución fonológica a través de la existencia de [φ-], bilabial fricativa sorda; una hipótesis que, en los últimos años, está siendo admitida con los estudios publicados con posterioridad a la propuesta de Menéndez Pidal.

En este artículo, no trataremos todos los aspectos relativos a esta temática, sino que intentaremos aclarar los problemas subyacentes a las teorías principales sobre F- > *h*- en castellano a través de los estudios procedentes y del análisis documental de los iberorromances medievales.

2. PÉRDIDA DE LA F- INICIAL LATINA EN CASTELLANO

Es un hecho indiscutible que en castellano se pierde la F- inicial latina en numerosas palabras, sustituyéndosela por la /h-/, mientras que en la mayoría de

las lenguas románicas se conserva la *f-* [f-] como norma general[1]; también en las lenguas iberorrománicas se observa, a su vez, el mantenimiento[2]. Por ello puede entenderse que no es común este fenómeno lingüístico en las lenguas procedentes del latín, a pesar de que lo comparten el castellano, el vasco y el gascón.

¿Cómo se extendió F- > *h-* en la lengua castellana y en España? Los ejemplos más tempranos del cambio de la F- en la *h-* en castellano se remontan al período de origen, entre los siglos IX y XII[3]; "aunque la *f-* se conserva corrientemente en todos los escritos de los siglos X al XII, aparecen algunos ejemplos de *h* o de pérdida" (Menéndez Pidal, 1999: 209). Los ejemplos tempranos señalados se localizan cerca de la frontera antigua entre el norte de Castilla y el País Vasco, es decir, el norte de Burgos, La Montaña y la Rioja[4]. A partir del siglo XV aumentó gradualmente el uso de la *h-* por la *f-*, y en la *Gramática de la lengua castellana* de 1492, publicada por A. Nebrija, puede comprobarse su influencia en la escritura (ibid.)[5]. Atendiendo a la cronología de los documentos en los que aparece la *h-* por la *f-*, se percibe que ese cambio se extendió desde el norte al sur en forma de cuña a través de la Reconquista castellana.

---

[1] Lat. FACERE > cast. h*acer*, fr. f*aire*, port. f*azer*, it. f*are*; lat. FĔRRUM > cast. h*ierro*, fr. f*er*, port. f*erro*, it. f*erro*; etc.

[2] Lat. FAMIS > cast. h*ambre*, ast. f*ame*, leon. f*ambre* o f*ame*, arag. f*ambre* o f*ame*, nav. f*amne*; lat. FĔL > cast. h*iel*, ast. f*el* o f*iel*, leon. f*iel*, arag. f*él*, nav. f*iel*; etc.

[3] Lat. FORTICIOUS > *Ortiço* (Santoña, 863) y H*ortiço* (ibid., 912), lat. FAGETU > H*aeto rubio* (Arlanza, 912), lat. FAUCE > *oce* (Nájera, 923, copia del siglo XII), lat. FAGEA > H*ayuela* (Oña, 1057, copia del siglo XII), etc. (Menéndez Pidal, 1999)

[4] D. Catalán (1989: 294) ofrece el mapa en que se describe la localización y el año de los ejemplos del período de origen.

[5] En *Celestina*, publicaba en Burgos en 1499, se dominaba la *f-*, por otro lado, en la misma novela, publicaba en Sevilla en 1501, se aparecía más la *h-* (Menéndez Pidal, 1999).

3. DIFERENTES PROPUESTAS SOBRE EL CAMBIO DE F- > *H-*

En 1926, Menéndez Pidal propone la teoría sustratística, concediéndole importancia a las lenguas prerromanas de la Península Ibérica. Y después de Menéndez Pidal, los investigadores han presentado varias teorías. Las causas principales son dos: 1.º) se produjo dicho fenómeno en algunas áreas aisladas románicas, donde no podemos suponer la influencia de la lengua vasca: "en el norte de Italia, región de Bérgamo; en el Sur, en Calabria, región de Catanzaro; en la Cerdeña oriental, región de Nuoro" (Menéndez Pidal, 1999: 218)[6]; 2.º) junto con la pérdida de la F- inicial latina, existe el caso de su conservación, lo que pone en duda que se sustituyera por la *h-*, debido a que no se sabía pronunciar la /f/ en los pueblos del norte de España, como explica Menéndez Pidal.

La mayoría de las teorías posteriores a la de Menéndez Pidal se basa en la existencia de la bilabial [φ], suponiendo que desde dicho fonema se (re)construya la *f-* labiodental y, al mismo tiempo se cambie en la *h-* aspirada y posteriormente se pierda en posición inicial. Asimismo, pretenden probar la existencia de la *f* [φ] a través del latín, las lenguas prerromanas, etc.

En este capítulo, para acercarnos al problema del cambio de la F- > *h-* en castellano, nos centraremos en las teorías que mencionan la existencia de [φ] y de las lenguas prerromanas peninsulares.

3.1. RASGO FONOLÓGICO DEL LATÍN ANTIGUO

Se piensa en general que la F latina antigua era la [φ], de la /BH/ indoeuropea, y la F latina clásica era labiodental según los gramáticos de la época

[6] También se observa en la lengua romana (arrumano y dacorrumano) (Abe, 1976: 26): *a fi* > *a* h*i*, f*ier* > h*ier*.

latina (Buck, 1933; Kent, 1932). Por otro lado, la H latina antigua perdió su aspiración en la época de la República romana (B.C. 509 - 27), y en vez de la [h] se usaba la /k/ oclusiva velar sorda (Ariza Viguera, 1989: 98)[7]. Los que mencionan el latín como explicación de F- > *h-* prestan atención a dicho rasgo fonológico latino del fonema /f/.

Podemos mencionar, a este respecto, a J. Orr (1936) como un lingüista románico que prefiere una solución de F- > *h-* en toda la Romania, considerando que era dicho cambio fonológico una evolución interna dentro del propio latín: en toda la Romania la /f/ era [φ] y tendía a perderse. Orr propone que puede dividirse la Romania en dos áreas, sospechando que F- > *h-* existía en la lengua hablada: las regiones donde se existía la tendencia vulgar a perder la F- inicial latina hasta tarde sin ceder a la presión culta que tendía a mantener la /f-/; y, por otra parte, las regiones donde se eliminaría dicha tendencia vulgar por la influencia del latín administrativo o de las escuelas. Para probar que F- > *h-* sería la tendencia lingüística general en latín, Orr nos ofrece los topónimos del norte y del sur de Francia y los testimonios del gramático latino Terentius SCAURUS (D.C. 117 - 138)[8].

Examinando los testimonios ofrecidos por Orr, F. Lázaro Carreter (1949) saca las conclusiones siguientes: 1.º) es posible que en los topónimos del norte de Francia haya ocurrido F- > *h-* por el bilingüismo franco-latino, en la zona de

---

[7] NIHIL > *aniquilar*, MIHI > *miki* (< *tiquismiquis*)

[8] En el norte de Francia: FANUM MARTIS > H*amars*, F*amars*, FINIBUS > H*inges*, H*ingette*, FILEX > *La* H*egrie*, *La* H*uguerie*, *Les* H*eugres*, etc., FOSSA MAGNA > H*oussemagne*, *Fossemagne*, FUNDUM, FONTEM VALLIS > H*onvault*, H*onvaux*, H*ondouville*; En el sur de Francia: FINES > H*ix* (suroeste de Cerdeña), H*ins* (sur de Toulouse), H*inx*, H*iis*, H*is*; los testimonios de Terentius Scaurus: F- > H-: FINGUM > *H*IRCUM, FARIOLUM > *H*ARIOLUM, FABA > *H*ABA, FORDA > *H*ORDA, FEBRIS > *H*EBRIS, FORCTUS > *H*ORCTUS, FARIOLUM > *H*ARIOLUM; H- > F-: HAEDUS > *F*AEDUS, HAERENA > *F*ASENA, HIRCUS > *F*IRCUS (apud Abe, 1976; Lázaro Carreter, 1949). Asimismo, para Orr (1936), fr. *hors* sería de FORIS, aunque se había considerado que había procedido de DEFORIS, y es una palabra conservada la pronunciación familiar sin la presión culta.

"máxima influencia germánica" que tenía la sustitución de *f-* = *h-*; 2.º) los topónimos del sur de Francia no son válidos como los testimonios porque no se entienden bien sus orígenes debido a que las lenguas prerromanas que existían en esta zona están bastante desconocidas; 3.º) los testimonios de Terentius SCAURUS no son suficientes para probar la tendencia lingüística general, puesto que "no hace allí el gramático latino más que aducir palabras de claro origen dialectal" (ibid.: 174)[9]. Y, según Menéndez Pidal (1999: 203), si ocurre el mismo fenómeno lingüístico en algunos áreas romanas, no significa que esas áreas compartan su misma causa, porque "todo cambio fenético [sic] es natural y puede ocurrir en varias lenguas, pero siempre en cada una ocurre por precisas causas históricas determinantes; cambios lingüísticos semejantes han de tener en distintos países causas históricas distintas", y añade que, aunque admitiéramos la propuesta de Orr, "no sería capaz de explicarnos el por qué en toda la Romania no se dan otras dos áreas contiguas como las dos grandes áreas gascona y castellana". Por último, M. Ariza Viguera (1989: 98) estima la propuesta de Orr como lo siguiente: "la existencia en latín de /φ/ ha sido defendida por varios autores, pero, aun admitiendo su existencia, no hay ningún indicio de aspiración en latín, por lo que es teoría generalmente desechada".

Aunque todavía es oscuro lo que algunos romances no comparten el mismo origen sobre el paso de F- > *h-*, los argumentos opuestos en arriba no niegan la posibilidad de que en áreas lejanas se conserve el rasgo del latín antiguo, es decir, la *f-* [φ]; H. Deferrari y R. J. Penny proponen las soluciones del cambio de F- > *h-* en castellano teniendo en cuenta dicha posibilidad: "los que buscan una

[9] Menéndez Pidal (1999: 203) indica que Terentius SCAURUS localiza F- > H- en los Faliscos o Varron atribuye H- > F- a los sabinos. Sin embargo, Ariza Viguera (1989: 98) dice "no parece admisible que el paso /f/ > /h/ se deba a estas lenguas" (cf. English, 1926). Lázaro Carreter (1949) apoya el sustrato etrusco propuesto por J. Scherijnen (1922). A pesar de dichos argumentos, W. D. Elcock (1938 y 1953-55) propone la posibilidad de que el origen de F- > *h-* en castellano y Gascuña provenga del sur de Italia, teniendo en cuenta la relación lingüística entre las lenguas pirenaicas y las de sur de Italia; sobre el problema de su teoría, cf. Menéndez Pidal, 1999: 286-301.

explicación para la pérdida de F- dentro del propio latín, se apoyan en la pronunciación regional de éste. Efectivamente, es posible que el latín hablado en las áreas más remontas (como Cantabria) conservase una articulación bilabial de la f (/φ/), que antes había sido normal, pero que se había visto sustituida por la labiodental /f/ en Roma y en las zonas más estrechamente en contacto con ella" (Penny, 2006: 113-114).

Deferrari (1936), quien sospecha que la F- inicial latina hablada en España tenga el mismo rasgo fonológico del latín antiguo, piensa que se conservaría la F- [φ-] latina antigua como la pareja de [β-] en el norte de Península Ibérica, donde la *v-* inicial latina era bilabial fricativa sonora. Varios investigadores admiten que la *v-* era bilabial en el norte de España desde la época del latín vulgar (Abe, 1988: 8; Menéndez Pidal, 1985: 118-119). Sobre la relación de la /f/ y la /v/ en la estructura fonológica Hara (1987: 14) explica lo siguiente: "(...) sospechamos que como también fuera difícil de fijarse en dicha área la [f] que es la pareja sorda de [v], aunque los romanos lo hubieran llevado, la [f] cambiara en [h], [pʰ] o [φ]. Es decir, como *f-v* es la pareja de sorda-sonora, como *p-b, t-d* y *k-g*, tiene una relación estrecha, en la cual, si uno de los dos es inestable, el otro también lo es; por el contrario, si uno es estable el otro también es estable. Además, podemos mencionar que es el vacío de los fonemas fricativos sonoros la otra causa estructura que es dificultad de la realización de [v]" [traducción del autor][10].

No podemos dejar de considerar la importancia en la relación opuesta de *f-v* en el problema de F- > *h-* como explicaron Deferrari (1936) y Hara (1987), por dicha relación es posible que en castellano la tendencia a bilabializar la /v/ llegara

[10] El texto original:「(...) [v]の無声ペアである[f]も，たとえローマ人によってもたらされたにせよ，同地には定着し難く，[h] とか[pʰ]とか[φ]に変わったのではないかと推察されるのである．つまり，*f-v* は *p-b, t-d, k-g* と同じように無声-有声のペアをなしており，一方が不安定なら他方も不安定，一方が安定しているなら他方も安定しているというような，非常に密接な関係にあるのである．それともう一つ[v]の出現を難しくした構造上の原因は，有声・摩擦音素の系列が空白であることが挙げられよう」．

a su pareja sorda /f/. Sin embargo, falta la explicación de por qué no existía la tendencia a labiodentalizar la *v* en castellano, mientras que la *v* pasó a la labiodental en el francés, el portugués, el italiano y más neolatinos.

Sobre la pronunciación regional y la existencia de [φ] en la Península Ibérica, Penny (2006: 25) explica lo siguiente: "si se admite la hipótesis de que las áreas colonizadas suelen ser más conservadoras que los propios lugares de los que procede la lengua importada (...), se puede suponer que el hispanorromance debió de conservar algunos rasgos del latín de los siglos III y II a.C. que se perdieron en el habla de Roma y de otras provincias latinizadas con posterioridad. Tal explicación puede ser pertinente al hecho de que en el habla peninsular esté más extendida la bilabial [φ] que su sucesora, la labiodental [f], que se emplea en la mayor parte de la Romania". Penny (1972), además, aclara la preferencia de [φ] en Andalucía a través del *Atlas Lingüístico y Etnográfico Andalucía* (ALEA)[11] y de los *Textos hispánicos dialectales* (THD)[12] publicados por M. Alvar. Con el hecho Penny (1972 y 2006) insiste en que la bilabial [φ] no es un producto secundario de la labiodental [f], sino que es lo contrario, es decir, [φ] > [f] teniendo en cuenta que en algunas áreas del norte de Castilla también se puede comprobar la preferencia de [φ]. Así pues, Penny (2006: 114-115) propone la evolución fonológica en el cambio de F- > *h*- desde la época del latín vulgar de Cantabria hasta el siglo XII, dividiéndolo en las tres fases siguientes. 1.º) En el período del latín vulgar, existieron [φ] y la labiovelar sorda [ʍ] como el alófono de /f/: [ʍ-] ante la labiovelar sonora /w/: FŎRTE > [ʍwórte] o [ʍwérte]; [φ-]: ante vocales, la /j/ y las /l, r/: FRĪGIDU

[11] Indicamos sencillamente la investigación de Penny (1972: 471-472) en ALEA (1-6): *febrero* (mapa 811), *fango* (904), *farfolla* (105), *fogón* (711), *funda* (694): [φ-] 59%, [f-] 37%; *fregadero* (786): [φ-] 53%, [f-] 46%; *fuego* (711), *fuelle* (975), *fuente* (752): [φ-] 61%, [f-] 24% (y [h-] 6%). Además Abe (1988, 9) también comprobó la preferencia de [φ] en Andalucía a través de las siguientes palabras en ALEA (5-6): *falda* (1378), *farol* (1543), *flor* (1544), *fuente* (1545), *fuera* (1549), *fuego* (1547): [φ-] 54%, [f-] 26%.

[12] En THD (apud Penny, 1972): ante vocales: [φ-] (Nº de palabra 35), [f-] (17); ante /r/: [φ-] (8), [f-] (13); ante /l/: [φ-] (5), [f-] (1); ante /j/: [φ-] (8), [f-] (0); ante /w/: [φ-] (9), [f-] (0) (y [h-] (1)).

> [φrído], FARĪNA > [φarina]. 2.º) En protorromance, esto es, en la fase temprana del romance, se realizaba el alófono [h-] ante las /o, u/: [ʍ-]: ante /w/: [ʍwérte] (en la pronunciación se ocurrió la diptongación); [h-]: ante /o, u/: FURNU > [hórno]; [φ-]: ante el resto de vocales, /l, r/ y /j/: [φrído], [φarina], etc. 3.º) En el siglo XII, se generalizó [h-] y apareció ante vocales y /j/: [ʍ-]: ante /w; [h-]: ante vocales y /j/: [hórno], [harína], FERRU > [hjérro]; [φ-]: ante /r/ (fl- > [l] o [λ]) .

Sobre lo que ocurría con la labiodentalización de [φ-], según Penny (1972), se puede explicar por el contacto con los francos, quienes desde los siglos XII y XIII tenían poder fuerte en la sociedad y pronunciaban la /f/ como la labiodental en las palabras españolas en las que los castellanos pronunciarían la /f-/ [φ-] y [h-]. Y debido a ellos se extendió la *f-* labiodental en ámbito urbano. Es por lo anterior que Penny afirma que los castellanos urbanos pronunciaban [f-] ante /w/ y /r/ y [h-] (> [ø-] en el siglo XVI) ante vocales y /j/, y se propagó en el ámbito rural.

Es muy interesante la evolución fonológica ofrecida por Penny, porque podemos ver la posibilidad del paso de F- > *h-* a través de /φ/ considerando la situación fonológica, es decir, se tiende a conservar la /f-/ ante /w, j/ y /l, r/, y, al contrario, a perderse ante vocales.

Indicamos uno de los principales problemas de su teoría, en relación con la preferencia de [φ-] en Andalucía y en algunas áreas de Castilla: G. Salvador (1982) señala otra posibilidad: supone que los indígenas que vivían en las áreas mencionadas fueran desdentados por beber agua que tenía "la absoluta carencia de flúor", teniendo así la dificultad de articular la labiodental; según él, en Ronda la gente que tiene más de 30 años es desdentada y pronuncia la *f-* [φ-], al mismo tiempo, los niños que no son desdentados también la pronuncian por la imitación de los adultos; y se puede comprobar la misma situación en Burgos, Sedano y Los

Montelos de Espinosa[13]. Si no se propone una teoría como piensa Deferrari (1936), no podemos aceptar que se conservara la *f-* [φ-] del latín antiguo en Cantabria, que se conquistó en la época posterior del Imperio Romano, mientras que tienen la *f-* labiodental las regiones peninsulares, que se conquistaron en la época temprana.

Sobre las teorías basadas en la conservación del rasgo fonológico de la F- latina antigua, [φ-], opina R. C. Pensado (1993: 148), que estudia "los condicionamientos contextuales del cambio F en *h*" en castellano. Pensado indica la dificultad de suponer dicho fonema en el latín: "que F haya debido tener realizaciones bilabiales en los contextos donde se pierde no implica en absoluto que el fonema latino haya de definirse como /φ/ bilabial", y "la gran mayoría de las lenguas, donde *f* se ha conservado, no da pie para postular nada distinto de la *f* labiodental común en la inmensa mayoría de las lenguas del mundo. Obsérvese que reconstruir /φ/ ya para el latín — con la motivación implícita de justificar la evolución en *h* por la inestabilidad inherente a la fricativa bilabial — presenta el inconveniente de que un sonido tan inestable haría esperable un cambio panromance. La conservación de la F en casi toda la Romania exigiría una regresión a /f/ en época remota. Esta complicada secuencia de cambios hace que la reconstrucción con /φ/ para el latín sea muy antieconómica dada la época relativamente tardía en que se debe situar la evolución F > *h* en los distintos territorios romances". Con la opinión de Pensado, nos percatamos de que la *f-* [φ-] no siempre cambia en la aspiración ya que su debilitación está basada en la

[13] Según J. R. Maruri (1986: 59), el agua que tiene la ausencia de flúor existe, además de en Andalucía y unas áreas de Castilla, en Alto Aragón donde se conservaba la *f-* labiodental con mucha fuerza durante Edad Media: "Es evidente que, si los dientes de los castellanos primitivos no resistieron la acción destructora de las aguas, la misma suerte tuvieron que correr los dientes de los altoaragoneses. No se explica, pues, cómo se las arreglaron estos desdentados para mantener intacta la F- inicial latina que los otros perdieron con la dentadura".

inestabilidad de [φ], es decir, en las teorías de Orr, Deferrari y Penny carecen de la explicación sobre la debilitación de [φ].

Por último, E. Alarcos Llorach (1992: 33) insiste en que "en la mayor parte de la Romania se «restauró» una /f/ labiodental, la que hoy se atestigua. Si, en efecto, en Italia o en Cerdeña, la /f/ se había aspirado en algunas zonas, habrá que buscar otras razones que lo expliquen; pero ello no invalida que en Cantabria un factor desencadenante del fenómeno haya sido el llamado «sustrato»".

3.2. EVOLUCIÓN INTERNA DEL SISTEMA

Nos referimos a las teorías, que intentan explicar F- > *h*- en castellano como una evolución lingüística dentro de la propia lengua mencionando la relación fonológica de la /f/ y la /v/ en castellano o el aislamiento de la /f/ en el sistema de las consonantes.

I. Iordan y M.ª Manoliu (1972: 188-190) se refieren a la confusión de la *b* y la *v*, y ofrece la opinión de que la elección del punto articulatorio de la /f-/ tiene la relación estrecha con dicha confusión: "la *-b-* tuvo articulación fricativa muy pronto —parece que ya en el siglo I de nuestra era—. (...) Cuando *-w-* tiende hacia cero, el campo de realización de la *-b-* se puede ampliar en dirección de las fricativas y realizarse como fricativa, bilabial, sonora. (...) la variante combinatoria *-β-* (< -B-) se confundió en el habla popular con *w* y, recíprocamente, la *w* en posición intervocálica fue interpretada como variante de *b*.[14] La fricativa *w* se perdió a veces[15]; otras veces, precisamente para fortalecer su carácter

[14] *-v-* = *-b-*: *avetat* = *habitat*; *aveo* = *habeo*. También en posición inicial, *v-* = *b-*: *patronae vene* [= b*ene*] *merentivalnea* (CIL, VI, 12210); v*alneas* [= b*alneas*] (CIL, XIV, 1169); *Eugene, vone serve* [= b*one serve*] (Itala, Lucas-Evangelium, 19) (Iordan y Manoliu, 1972: 189).
[15] Lat. RIUUS > lat. vul. *rius* > rum. *rîu*, it. m., port. *rio*, cast. *río*, log. *riu*, fr. ant. *rif*, prov., cat. *riu* (ibid.: 190).

consonántico, se transformó en *v* (*β*). Tanto la *v* (< *w*) como la *b* (< *-b-*) tiende a confundirse en la labiodental *v* o en la labial *b* (*β*). La elección del punto de articulación de la fricativa sonora no puede ser ajena a la existencia de una *f* labiodental o bilabial, pues con ella el nuevo fonema entrará en correlación de sonoridad. De este modo, en francés, rumano, italiano y provenzal, donde la *f* es labiodental, la *β* y la *w* se confunden en la fricativa sonora *v*. En español antiguo, donde la *f* era bilabial, la *-b-* y la *w* han pasado a *β* (*b*)[16]". Y Iordan y Manoliu (1972: 198) se refieren a A. G. Juillard y A. G. Haudricour (1949), porque ellos tienen la misma idea, esto es, "la labiodental *f* adquirió una articulación bilabial, por la tendencia del español a acercar el punto de articulación de las fricativas al de las oclusivas, y, por último, se debilitó" en áreas donde la *b* y la *w* pasaron a [ß]. Contra su explicación, Alvar (en Iordan y Manoliu 1972: 198 nota 79) argumenta que "el que *f* fuera bilabial o no, no explica su debilitamiento, pues convertida en bilabial fricativa sorda, se oponía a la bilabial oclusiva sorda, lo que aseguraba su rendimiento[17]. (...) Razonar el porqué de ese cambio queda sin explicación si no tenemos en cuenta otras razones asistemáticas, pues el sistema no necesitaba realizarlo". Además, ellos no sugieren ninguna propuesta de por qué en castellano existen la tendencia a la bilabial y a la oclusión.

Ariza Viguera (1989: 104-105) propone que la realización de la *f-* [φ-] tiene su origen en el aislamiento de la labiodental [f-] en el sistema de las consonantes labiales primitivas. Si eran, según Ariza Viguera, /p/ - /b/ - /ß/ - /f/ las labiales primitivas, entre ellas está aislada el rasgo fonológico de la *f*, la labiodental, contra el resto de las labiales, por lo que dentro del sistema de las labiales primitivas funciona la tendencia a eliminar dicho aislamiento, es decir, la /f-/ [f-] cambia a [φ-] junto con la bilabialidad de /p/ - /b/ - /ß/. Y, sobre la debilitación del

---

[16] Lat. UĪRGA > rum. *vargă*, fr. *verge*, prov., engad. *vierga*, cat. *verga*, pg. *verga*, esp. *verga* (hoy en día, [ßerga] o [berga]) (ibid.).

[17] *pava-* **faba* (*haba*), *penar-* **fenar* (*hernar*), *piel-* **fiel* (*hiel*), *poyo-* **foyo* (*hoyo*), *purgar-* **furgar* (*hurgar*). * = en dialectos, () = en castellano.

paso de *f-* [φ] > *h-*, B. Malmberg (1958) sostiene que dicha debilitación procede de lo que la *f-* [φ-] era redundante en el sistema consonántico del castellano antiguo sospechando que la intensidad articulatoria de [φ] fuera extremadamente débil[18]; podemos entender su propuesta con los esquemas siguientes (apud Iordan y Manoliu, 1972: 199):

p	t	k
b	d	g
β	ð	ɣ
f (φ)	-	-

Esquema 1: Castellano Ant.

p	t	k
b	d	g
β	ð	ɣ
	h	

Esquema 2: Castellano

En el esquema 1, comprobamos que la *f* no comparte el modo de articulación, fricativa sorda, con ningún fonema, mientras que tanto el grupo consonántico oclusivo sordo como el grupo consonántico fricativo sonoro se comparten su modo de articulación. Y entre la *f* y el resto de las consonantes fricativas puede distinguirse de la sorda. Por ello, en el sistema consonántico del castellano antiguo la *f* es redundante. Por consecuencia, en el castellano la *f* va a pasar a simple [h] "sin localización determinada" y, posteriormente, se perdió (esquema 2).

Indicamos algunos problemas en las explicaciones de Ariza Viguera y Malmberg. En primer lugar, aunque podemos entender la posibilidad de que la *f* tenga la tendencia a bilabializarse por el aislamiento de la labiodental, es oscura la causa de la ausencia del carácter labiodental en la *v* tanto como Iordan y Manoliu y Juillard y Haudricourt. En segundo lugar, para Alvar (en Iordan y Manoliu, 1972: 198 nota 79), "la fricativa, por ser sorda, ya estaba bien definida

[18] Cf. Iordan y Manoliu (1972); Quilis Merín (1996). Boyd Bowman (1953) indica que lo imposible de percibir *f-* [φ-] causa la pérdida de la F- inicial latina (apud Ariza Viguera, 1989: 104-105).

(frente a *β, ð* y *γ*) no aclara la cuestión", porque en el francés, al contrario del castellano, "se mantuvo la φ y las fricativas sonoras se perdieron". En último lugar, según K. Baldinger y J. L. Rivarola (1971: 35 y 48), "el hecho de que la labialidad de la *f* fuera redundante dentro del sistema de oposiciones ilustrado en los esquemas anteriores, no explica naturalmente que tuviera que perderse" y añaden "los factores que perturban en eventual equilibrio estructural tienen que ser de carácter externo", al mismo tiempo hay que recordar la opinión de Alvar sobre la oposición de la *p-* y la *f-*.

Hasta aquí se ha visto que la existencia de [φ] ha sido sostenido por varias investigaciones que explican el paso de F- > *h-* "sin recurrir a la «aversión a la articulación de la /f/», «repugnancia a la articulación de la /f/», etc. (atribuida al vasco). Partiendo de la articulación de la /f/ como bilabial es posible pensar en un ensanchamiento del canal del aire en los labios, dando como resultado una aspiración" (Echenique Elizondo, 1987: 95-96). Por el contrario, en cuanto a la teoría que considera el factor interno dentro de la lengua, el sistema fonológico, Baldinger y Rivarola (1971: 37) dicen que "el hecho de que el origen de los cambios y la diferenciación regional de los resultados tienen que ser atribuidos a factores externos, en tanto que los factores internos pueden ya favorecer la entronización de una innovación en el sistema, ya orientar en uno u otro sentido la reestructuración de un sistema que ha sido puesto en movimiento por un factor externo", e indican el problema de dicha teoría, es decir, que "los factores fonológicos internos no pueden considerarse como causas, por lo que la fonología no puede explicar. Puede, sí, presentar el *cómo* de la evolución estructural, es decir, puede *describir*" (ibid.: 48). Entonces, ¿qué factor externo podemos suponer en F- > *h-*? A este respecto, nos llama la atención de la opinión de Malmberg (1958), esto es, concluye que el paso de *f-* > *h-* es el resultado de la acción combinada de factores estructurales y de factores sociolingüísticos, "el factor determinante, la

lengua de sustrato, debe ser considerado entre los últimos" (Baldinger y Rivarola, 1971: 35).

3.3. SUSTRATO DEL VASCO-ÍBERO

Menéndez Pidal (1999) comprueba la existencia del cambio de F- > *h*- en otros romances además del castellano, aunque niega la posibilidad de que se compartan el mismo origen; sin embargo, para él, la lengua gascona localiza fuera de dicha posibilidad, porque el gascón está colinda con el vasco (-francés) y cambió la /f/ latina en la /h/ completamente manteniendo el carácter aspirado[19]. Es decir, por la contigüidad geográfica de "hispano-vasco-gascón", Menéndez Pidal (1985: 122-123) pone el foco en el vasco como factor externo que llevó a la sustitución de la F- latina inicial, además se refiere a la posibilidad de que en Cantabria exista la lengua ibérica, que es una de las lenguas prerromanas de la Península Ibérica[20]: "desde el siglo XI se encuentran en la región septentrional de Burgos, en la Rioja y en el Alto Aragón ejemplos (...) estas regiones se encuentran inmediatas al país vasco, donde también la *f* fué [sic] siempre un sonido exótico; por esto debemos suponer que la sustitución de la *f*- por la *h*-, y subsiguiente pérdida, en Castilla es un fenómeno primitivo hijo de la influencia ibérica, de los dialectos indígenas vecinos al vasco"; al mismo tiempo, sin tener en cuenta la posibilidad de la discrepancia de las lenguas vasca y íbera[21], explica que "el caso que ahora estudiamos ofrece caracteres absolutamente singulares que lo destacan como único: 1.º, por su densidad y extensión geográfica en dos lenguas importantes muy

---

[19] Gas. h*ér* "hacer", h*orno* "horno", h*lor* "flor", h*reda* "frío", h*òrt* "fuerte", d*ehéner* "defender", *con*h*essar* "confesar".

[20] No existía la lengua íbera en Cantabria según el mapa de la localización de las inscripciones ibéricas ofrecido por J. D. Hoz (2009).

[21] Es muy discutible que sean de la misma familia de lenguas el vasco y el íbero, aunque varios investigadores ofrecen caracteres lingüísticos comunes entre ellos. Cf. Echenique Elizondo, 1987.

distintas la una de la otra: el español y el gascón; 2.º por hallarse esas dos lenguas contiguas geográficamente; 3.º, porque esas dos lenguas diversas son propias de dos pueblos de fondo étnico o histórico común, ibérico hispano, ibérico aquitano; 4.º, porque esas dos lenguas románicas aparecen aun hoy enlazadas geográficamente mediante una lengua ibérica primitiva que carece de *f* " (id., 1999: 219).[22]

¿Cómo tomaron la F- inicial latina los indígenas de Cantabria? Aunque es muy oscura la lengua que se hablaba en Cantabria, por lo que considerando las lenguas vasca e íbera, que tienen la ausencia común de la /p, f, h/ y la /r-/ inicial (Gómez Moreno, 1949; Tovar, 1954 y 1961), Menéndez Pidal (1999: 202 y 217) sospecha "una población que habla un idioma ibérico análogo al de los vascos y que aprende el latín tomando la *f* con las mismas modalidades que los vascos la tomaron", y la lengua vasca tomó la F- inicial latina a través de "buscar una equivalencia acústica al sonido exótico, atendiendo a imitar ora la fricación (*f-h*) ora la labialidad (*f-p, b*)": lat. F- > vasc. (*f-*) *h-*, *p-*, *b-* o cero[23]; es decir, para

[22] Tenemos que considerar otro fenómeno lingüístico común en hispano-vasco-gascón, es decir, *la repugnancia por r- inicial*. Para Menéndez Pidal (1999: 193-194) y V. Bertodi (1931: 120-123), dicho fenómeno lingüístico prueba la influencia sustratística vasca en el castellano y el gascón: en el País Vasco: vasc. er*rege* < lat. REGE, ar*raza* 'raza', er*razoi* 'razón', ar*ratoe* 'ratón', etc., y también podemos verla en los topónimos vascos; en Gascuña: ar*rason* 'razón', ar*ric* 'rico' (según J. Corominas (1972) aparece en muchos topónimos); en Hispano: a*redoma* (Sahg., 996: 455º), a*retomas* y ar*retomas* (ibid., 1025: 471º y 472º), ar*rancura* (sZoilCarrión, 1077: 218º), Ar*rotura* 'roturas o roturaciones' (Oña, 1137: P-16), Ar*roncali* y *Roncali* (Liere, 1085: P-3); más ejemplos, Corominas, 1972; Rohlfs, 1985. Aunque Corominas (1972) y G. Rohlfs (1985), además de Menéndez Pidal y Bertoldi, insisten el origen vasco, se ve el mismo fenómeno lingüístico en Calabria (Menéndez Pidal, 1999: 194): ar*ramu* 'ramo', ar*ruína* 'rovina', ar*rídiri* 'ridere', etc.

[23] 'higo', 'higuera': FĪCUS > b*iku* (Alta Navarra), f*iko* (Labort), f*iku* (sur de Labor;), f*igo* (Roncal), p(h)*iko* y p*iku* (Alta Navarra, Baja Navarra, Gupuzcóa, Labort, Salazar, Sola y Vizcaya), *iko* (Vizcaya); 'hilo', 'hebra de hilo'; FĪLUM > b*iro*, b*iru* (Alta Navarra, Roncal y Salazar), f*iru* (Baja Navarra y Vizcaya), p(h)*iru* (Alta Navarra y Baja Navarra), *iru* (Vizcaya), etc.; FRICARE > b*rekatu*, p*erekatu*, f*rekatu*; FIRMARE > f*irmatu*, *irematu*; FŌRMA > b*orma*, h*orma*, *orma* (Menéndez Pidal, 1999; Michelena, 1985: 264). Sobre la fecha de estos ejemplos, Menéndez Pidal (1999: 217) piensa que "*h-* aspirada, luego perdida, *b-* o *p-* y por último *f-* aprendida e importada, formas varias cuya fecha relativa es aventuradísimo establecer y que bien pueden ser aproximadamente contemporáneas", y L. Michelena

Menéndez Pidal, tanto en castellano como en vasco el cambio de la /f-/ es la "brusca sustitución por equivalencia acústica" sin sonido inmediato, porque piensa que no es explicable que el cambio de F- > *p-* y *b-* sea la "evolución gradual fonética".

No obstante, nos enfrentamos con el problema de la conservación de la F- inicial latina en castellano ante /w, j/ y /l, r/. Según Menéndez Pidal (1999: 221) y Alvar (en Iordan y Manoliu, 1972: 197-198 nota 77), es explicable a partir de lo siguiente: en primer lugar, en el caso de la /fr-/, "la dificultad fonética del grupo *hr*" lleva a su conservación, y "desde un punto de vista estrictamente estructural, la *f-* no podía perderse porque entonces la *r* quedaba en posición inicial y con una sola vibración, lo que es contrario al castellano. Pudo crearse un pareja de opuestos *r-r̄* inicial, pero existía la totalidad de casos con *r₂-*, que lo hacían imposible; tampoco pudo realizarse esta *r̄* como *rr-* porque entonces *fr-* se hubiera confundido con *r-* (*frasco* ~ *rasco*, *fregar* ~ *regar*, *frío* ~ *río*, *frota* ~ *rota*, *fruta* ~ *ruta*)"; en segundo lugar, en el caso de la /fw-/, a veces la /w/ lleva a cabo la conservación de la *f-* reforzando el carácter labial de la /f-/ e influyéndose de una "fuerte presión cultista" y de "activa comunicación con el leonés y el aragonés-catalán, favorables a la *f-*"[24]; en último lugar, dicha influencia se extiende en el resto de casos. A pesar de las explicaciones de Menéndez Pidal y Alvar, queda el problema de dicha conservación, porque no es admisible la excepción en F- > *h-* por la situación fonológica si lo proviene del sistema fonológico de la lengua dominada, es decir, los indígenas no sabían pronunciar el fonema /f/ (Abe, 1976: 28; Jespersen, 1981: 358): la explicación de la situación fonológica hay que basarla en la existencia de un sonido inmediato entre F- > *h-* aspirada; no debemos desdeñar la existencia de [φ] en las explicaciones de Menéndez Pidal y Alvar. Las opiniones opuestas, para

(1985) insiste en que en vasco la *f-* es de la introducción relativamente reciente apareciendo en préstamos y en voces patrimoniales.

[24] Podemos ver la convivencia entre *hue-* y *fue-* en los documentos de la Edad Media, aunque *fue-* es dominante absolutamente.

Alvar, no son más que un "planteamiento que pretende desentenderse de todo para imponer una absoluta uniformidad constitutiva a cosas heterogéneas".

Pese a dicho problema, parece que no se descarta la posibilidad de la influencia vasca en el castellano. Para Alarcos Llorach (1968: 254-255), "parece indudable que ello se deba al sustrato: al igual que el vasco, la lengua prelatina de la región limítrofe en que nacerá Castilla, carecía de *f-* inicial, y por tanto, al oír la *f-* labiodental latina, los indígenas hubieron de acomodarla a su manera. Según Menéndez Pidal, el fonema autóctono que se utilizó para representarla fue la [h] aspirada". También R. Lapesa (2012: 44-45) admite la posibilidad de sustrato en el caso de F- > *h-* en castellano: "sin duda, la influencia de los substratos primitivos no es el único factor en la formación de los romances; la penetración de la cultura latina hubo de reducirla mucho. Pero cuando un fenómeno propio de una región es muy raro o desconocido en el resto de la Romania, si en el idioma prelatino correspondiente existían tendencias parecidas, debe reconocerse la intervención del factor indígena"; para él, es admisible la influencia vascuence en Cantabria, porque: 1.º) porque, la romanización de Cantabria fue más tardía y "los cántabros aparecen constantemente asociados con los vascos durante las épocas romana y visigoda"; 2.º) queda la posibilidad de que la lengua cántabra originalmente compartiera el rechazo de la *f-* inicial con la vasca, y por el contacto de la lengua vasca reforzaría dicho rechazo en la lengua cántabra[25]: "Asturias y nordeste de León la divisoria actual entre la /f/ y la /h/ aspirada coincide con los antiguos límites entre astures y cántabros[26]. Este sustrato cántabro se vio reforzado decisivamente en la Alta Edad Media por el adstrato vasco en la Rioja, la Bureba y Juarros, donde subsistían en el siglo XIII núcleos vascos no romanizados aún".

[25] Para Abe (1976), si existe la tendencia de cambio fonológico dentro de una lengua sin efecto sustrato, el sustrato solamente la estimula y acelera como "a «trigger» effect".
[26] Cf. García González, 1981-82.

Por último, al estudiar el cambio fonológico, según Menéndez Pidal (1999: 208), tenemos que considerar "no «una ley fonética» cumplida con exactitud mecánica en el preciso momento de su promulgación, sino una multisecular pugna de formas varias, convivientes, pugna de tendencias expresivas (llaneza, descuido; purismo, ultracorrección, etc.), y tenemos que ver esas tendencias muy variamente ligadas a través de los signos con las sucesivas circunstancias históricas, sociales y políticas, del pueblo en que primero se producen y de los pueblos en que después se propagan". Aunque es lógico lo que ha mencionado Menéndez Pidal, no es admisible dejar el estudio estructural sin dificultad en el caso de F- > *h*-, porque está aclarando el sistema fonológico de las lenguas prelatinas: es posible que los indígenas no sustituyeran la *f*- labiodental por la *h*- aspirada directamente.

3.4. Evolución fonética y sustratística

D. Alonso (1962: 209) se refiere al origen de la *f*- [φ-] en su estudio de la confusión entre la *b* y la *v*; según él, tanto la bilabialización de la *f*- como la de la *v* provienen de una costumbre articulatoria: "la bilabialidad ocupa todo el norte de la Península, de mar a mar: tiene que estar basada en una costumbre articularia de los antiguos habitantes de todo el norte de la Península y el suroeste de la Galia: de ese conjunto, el vasco no es sino una pieza"; e insiste en que con la "gran antigüedad" dicho fenómeno lingüístico está relacionada con la incapacidad de los vascos de la articulación labiodental. Según Echenique Elizondo (1987: 95), la lengua vasca tiene una fuerte bilabial en vez de una labiodental: "en vasco no existe labiodental y la bilabial cuenta con las variantes oclusiva y fricativa en condiciones semejantes a las castellanas"; por lo que creemos que el vasco refuerza como el adstrato la bilabialidad en la lengua de Cantabria y lleva la debilitación de la /v/ al castellano.

A. Martinet (1974: 441-442) admite que "el paso de *f* a *h* es el primer fenómeno que da prueba, de la manera más evidente, del influjo que debió ejercer la fonología éuscara en la evolución del castellano", pero no acepta la propuesta de Menéndez Pidal sobre la sustitución de la *f-* por la *h-* aspirada: "en los casos que cita Menéndez Pidal no se trata de substitución, sino de evolución fonética a partir de un antiguo sonido [φ] empleado en lugar de un sonido [f] labiodental" (ibid.: 434-435 nota 22) [27]; porque, según Martinet, "el carácter labial de *f* es cuidadosamente conservado" en el caso de que una lengua que carece de la *f-* la tome mediante otra lengua. Es decir, concediéndole importancia al sistema labial y a la influencia sustratística, Martinet supone la evolución fonológica semejante entre el vasco y el castellano.

En vasco antiguo, existen dos grupos oclusivos sordos: /ph-, th-, kh-/, en este primer grupo se produce aspiración en posición inicial, mientras que se pierde en otras posiciones, y grupo contrario al anterior ya que /b-, d-, g-/; "*b-* se sonorizó, sin duda alguna bajo la influencia románica, y *ph-* se debilitó en [φ], de donde, actualmente, y según los dialectos, *h* o cero", y el vasco tomaba la P- (mediante la *b-* en general) y la F- iniciales latinas a través de la *ph-* o la *φ-*: lat. PULLUS > **phoilo* > vasc. *oilo* 'gallina' y lat. FILU(M) > **philu* o **φilu* > h*ilu* > vasc. *iru*: "la *f-* latina, para la que no existía un equivalente vasco, debió de ser reproducida inicialmente por medio de la sorda aspirada **ph-* o por medio de su forma debilitada [φ]" (ibid.: 436). Después de **[φ-] (< **ph-*) > *h-*, "*b* se convirtió en la única labial inicial" en el sistema vasco, por lo que la *b-* fue "empleada en lo

[27] Para W. v. Wartburg (1952: 23), "el vascuence y el cántabro oriental carecían como el vascuence actual de la *f*. Poseían, sin embargo, como éste, la *p*. A esta *p* fue adaptada la *f-* latina, por ser aquélla el sonido más próximo. La *f* era un sonido fricativo, y se convierte en el sonido fricativo articulatoriamente más cercano a la *p*, es decir, en una *f* bilabial", y aunque la *f-* [φ-] "inestable" queda como la pareja de la *v*, dicha *f-* pierde depende de la tensión articulatoria por su inestabilidad. Cf. Menéndez Pidal, 1999.

sucesivo para substituir a la *f-* latina o románica" hasta que se introdujo la *p-* romance[28]: FĀGU (M) > b*ago*, FESTA > b*esta* ~ p*esta*, PACE (M) > b*ake* ~ p*ake*.

La influencia vasca lleva al castellano una evolución fonológica semejante, dividiendo el norte de España en dos áreas. Uno de ellas es una región urbana, donde los hablantes latinos y romances mantenían una relación estrecha y frecuente; en dicha región se reconstituye a labiodental [f-] con la bilabial [φ-] por la influencia de contacto de los eruditos que pronunciaban la F- labiodental latina: F- [f-] > *f-* [*ph-] o [*φ-] > [f-]. La otra, por el contrario, es una región rural, que está muy cerca del límite con la región vasca y donde dichos hablantes tenían mucho menos contacto que en la región urbana; los indígenas de esta región aprendían la /f/ mediante la imitación de los indígenas romanizados en una época relativamente tardía, por lo que no pronunciaban la /f-/ como la labiodental [f-] sino la bilabial [φ-], y después, cuando se debilitó por completo en [h-] la pronunciaban en cualquier posición: F- [f-] > *f-* [*ph-] o [*φ-] > [h-]; al mismo tiempo, cabe la posibilidad de que conserven la *f-* [φ-] en romance por aprender el latín. Debido al contacto de dichas áreas, sospechamos la siguiente transición fonética, F- [f-] > *f-* [*ph-] o [*φ-] > [f-] > [h-], a la vez que dicha transición termina en la fase de la labiodental por el influjo de fonemas lindantes con la /f-/. Además, Martinet supone que la introducción de la *p-* sea igual que en vasco: F- [f-] > [b-] > [p-][29]; sin embargo, como en castellano existen pocos casos de *f-* > *b-* y *p-*[30], se considera una transición fonética como la siguiente: F- [f-] > [*b-] > [*φ-] > [h-].

---

[28] Tanto Michelena (1985) como H. Gavel (1920) piensan que en vasco carece de la *p-* inicial y que son más antiguos los casos que tiene la *b-* inicial por la F- inicial latina, por el contrario, la introducción de la *p (h)-* inicial es última; Quilis Merín (1996: 400) afirma que "en vasco la adaptación de la *f* latina se realiza mediante la *b* fricativa en cualquier posición".

[29] lat. FORMA > B*orma* (Cartul. del Monasterio de Eslonza, 1080); P*orma* (ibid., 913: 3; ibid., 1050: 63; etc.). Cf. Menéndez Pidal, 1999: 216.

[30] *Fonte* P*ascasia* (Sahg., 935: 368°) con *Fonte* F*ascasia* (ibid., 905: 5° y 6°); lat. FORMA > *Fuente* P*uerma* (Cofiñal); P*ontanilla*, F*ontanilla* (Oña, 1148); F*ortún* > P*ortun* (Aguilar de Campoo, 1187); lat. FABULA > b*able* que es muy problemático (Corominas, 1980-1991;

Sin embargo, no se comprueban las pruebas del paso de *b-* > *h-* y **ph-* o **φ-* > *h-* (Abe, 1976). Asimismo, parece difícil suponer una transición fonética semejante en dos lenguas, porque todavía es bastante oscura la situación de bilingüismo en Cantabria (Alarcos Llorach, 1992).

Como no solo se admite que el vasco comparta algunos fenómenos lingüísticos con el castellano, sino también que solo tenía la *b-* en la F- inicial latina, no se pierde el valor de la explicación de Martinet: ahora dudamos de la opinión de Menéndez Pidal, es decir, la idea de que la F- inicial latina se sustituyó directamente por la *h-* en el primer contacto con el latín.

4. LA F- INICIAL LATINA EN LOS DOCUMENTOS MEDIEVALES IBERORROMANCES

Sobre el cambio de F- > *h-* ofreceremos sencillamente los resultados obtenidos en el análisis de documentos medievales en los iberorromances[31]: el castellano, el riojano, el asturiano, el leonés, el aragonés y el navarro. A través de este análisis intentaremos aclarar los siguientes aspectos: 1. º) extensión de *f-* > *h-*, 2. º) transición cronológica de F- > *h-*, 3. º) conservación de la F- inicial latina, 4º) vacilación de la escritura entre la *f-* y la *h-*. Para realizar el análisis, hemos utilizado 323 documentos medievales reunidos por F. González Ollé (1980)[32].

Lapesa, 1985; Menéndez Pidal, 1999; Naro, 1972). Cf. Quilis Merín, 1996.

[31] Señalaremos en las notas los ejemplos encontrados en los textos medievales.

[32] No están incluidos los textos en los que no aparece la F- inicial latina: en castellano 78 textos en total desde el siglo IX (Textos Generales [TG] 42, Fueros 6, Textos Históricos [TH] 2, Texto Doctrinales y Jurídicos [TDJ] 28), en riojano 14 textos en total desde el siglo X (solo TG), en asturiano 28 textos en total desde el siglo VIII (TG 27, Fueros 1), en leonés 36 textos en total desde el siglo X (TG 28, Fueros 6, Fazaña 1, Textos Doctrinales 1), en aragonés 28 textos en total desde el siglo XI (TG 25, Fueros 2, Textos Doctrinales 1), en navarro 28 textos en total desde el siglo XI (TG 23, Fueros 3, Textos Históricos y Doctrinales 2), añadiendo Glosas y Textos Literarios 121 textos en total desde el siglo X (Glosas 2, Textos Literarios 111, Jachas 3, Romances Viejos 5); La clasificación de textos está basado en Gonzáles Ollé (1980)

En primer lugar hablaremos sobre la extensión de F- > *h*-, en castellano encontramos abundantes ejemplos de F- > *h*-; en riojano, aunque en general se conserva la *f*-, hallamos dos ejemplos en un texto: *Hoyales, Hormiella* (*Venta de bienes*, Pazuengos, 1265); por otro lado, no solo encontramos ningún ejemplo ni en asturiano ni en leonés[33], sino que tampoco en aragonés y navarro[34] que localizan en el límite de la influencia sustratística vasca. Y, por ello, podemos entender que son en castellano los textos de Glosas y Textos Literarios en los que aparecen el cambio de F- > *h*-.

En segundo lugar, sobre la transición cronológica de dicho cambio en castellano podemos concluir, como hasta ahora, que la generalización de *f*- > *h*- se localiza en el siglo XV, pero como aparecen algunos ejemplos aislados hasta el siglo XIV[35] podemos pensar que dicho cambio existe hace muchos siglos, teniendo en cuenta que la lengua escrita se conserva mucho más que la hablada.

En tercer lugar, sobre la conservación de la F- inicial latina en castellano, afirmamos que en general la *f*- tiende a perderse ante vocales y, por el contrario, a conservarse ante /w, j/ y /l, r/. Asimismo, en los documentos medievales comprobamos que durante la Edad Media constantemente conservan la *f*- las palabras que la tiene ante vocales, tal y como mantiene, junto con una excepción

---

[33] Los documentos mayoritarios en asturiano localizan en el oeste de Asturias donde está fuera del límite primitivo de la *h*- propuesto por Menéndez Pidal (1999). En las áreas que localizan más este del río Sello hay la tendencia a espiralización de la *f*- (Catalán, 1946; Zamora Vicente, 1967).

[34] No se admite la existencia de F- > *h*- en aragonés y navarro aunque unos investigadores intentan probarla, porque los ejemplos ofrecidos son bastante problemáticos.

[35] «bustare de H*aeto* rubio» (Arlanza, *Carta de dotación*, 915, copia del siglo XII), «fue fecho jueues VI dias de h*ebrero*» (*Libros de los instrumentos de astronimía*, 1277), H*elipe* (*Arrendamiento de un majuelo*, 1290), «manitiestela en la mayor h*aze*» (*Los siete infantes de Salas*, h. 1320), «a la h*e*» (*Libro de Buen Amor*, 1330 y 1343), «quando lo h*uyo* et lo unido uenir enta si» (*La gran crónica de España*, h. 1371-1385), h*allar* (*Martirio de San Lorenzo*, h. 1250).

aislada[36]; y hallamos un ejemplo en el que aparece la *h-* ante /w/ aunque no encontramos la /hl-/ ni /hr-/[37].

En último lugar, sobre la vacilación entre la *f-* y la *h-*, afirmamos la posibilidad de que no aparezca la *h-* en la escritura, aunque la *f-* ya tiene [h-], por el uso obligatorio y ortográfico de la *f-*, porque comprobamos la alternancia de la *f-* y la *h-* y los casos aislados con la *h-* considerando la ultracorrección.[38]

5. Conclusión

Sobre F- > *h-* en castellano, como hemos visto, existen las propuestas diversas, y hemos comprobado que siendo difícil probar la influencia vasca en el castellano por la oscuridad de la lengua prerromana de Cantabria como problema principal, muchos investigadores insisten en que el paso de F- > *h-* proviene de la evolución fonética a través de la existencia de [φ]. Sin embargo, a través del examen de dichas propuestas, se ha aclarado la falta de explicaciones sobre algunos fenómenos lingüísticos, sobre todo, el cambio de *f-* > *b-* y *p-* y la tendencia a la debilitación de la *v-*: los investigadores apoyan la última, considerando la

---

[36] *fallacer*, *fallecer*, *fama*, *famoso*, *falsa*, *falta* (*faltar*), *fatiga*, *fe*, *fecha*, *feria*, *figura*, *fin*, *forma*, *fortuna*; para Menéndez Pidal (1999) y Salvador (1982) esas palabras son cultismos y semicultismos; hallamos dos veces «a la he» (*Libro de Buen Amor*, 1330 y 1343; *Coplas de Mingo Revulgo*, 1464).

[37] «O, qué h*uerte* maravilla» (Salamanca, *Églosa de las grandes lluvias*, h. 1498).

[38] *f-* ~ *h-*: F*elipe* ~ H*elipe* (Fería, *Arrendamiento de un majuelo*, 1290), f*ijo* ~ h*ijo* (*[Memorias]*, h. 1412, ms. de comienzos del siglo XVIII), f*azia* ~ h*azia* (*Arte de tovar*, 1433), f*azía* ~ h*azía* (*El Victorial*, A. 1435-1448), f*ablas* ~ h*ablas* y f*azen* ~ h*aze* (*Tragicomedia de Calisto y* Melibea, 1499-1502); f*ace* ~ h*ace* (siglo XV); «açipreste de F*ita*» (*Libro de Buen* Amor, 1330 y 1343) con el nombre oficial *Arcipreste de* H*ita*; ar. HATTA > f*asta* y h*asta*, se observa *fasta* en general durante Edad Media; en texto riojano, *Aluar* H*annez Minnaya* (*Crónica general de España*, h. 1270,) con el caso abundante y variente de *Anno*, F*anno* y H*anno*. Encontramos los ejemplos solos desde el siglo XIII, pero la vacilación en escritura como arriba exite desde el siglo X (cf. Alvar, 1976 ; Menéndez Pidal, 1999). Al mismo tiempo, podemos comprobar los ejemolos siguentes: b*aralladas* > f*aralladas* (Burgos, *Fuero de Castrojeriz*, 974), f*estir* 'vestir' (Oña, *Disputa del alma y el cuerpo*, 1195 o 1200).

relación fonológica de *f-v*, sin mencionar su causa. Y hemos afirmado que dicha causa existe en la influencia vasca (también es posible sospechar de la íbera), es decir, su peculiaridad del sistema de consonantes labiales en la Península Ibérica.

Es un hecho indiscutible que el caso de F- > *h*- en castellano tiene una situación peculiar en la Romania, aunque pensamos que es necesario comprobar más peculiaridades mediantes los estudios comparativos con los romances que se encuentran en el mismo caso, desde el punto de la lingüística románica: el sustrato vasco-íbero no pierde el valor como hipótesis. Al mismo tiempo, queda la posibilidad de la explicación evolutiva fonética, porque los estudios relativos al vasco y el problema del mantenimiento de la F- inicial latina nos hacen suponer que dicho cambio ocurre no como una "brusca sustitución" sin sonido intermedio sino como "la evolución gradual fonética" (Menéndez Pidal, 1999: 217). Sin embargo, debido a la falta de la claridad de las lenguas prelatinas peninsulares, queda la dificultad de demostrar el paso semejante de F- > *h*- en vasco y castellano; asimismo, para probar la influencia vasca hay que enfrentarse al problema de la conservación de la F- inicial latina en aragonés y navarro: es necesario proponer mejores explicaciones que las actuales.

Pese a los problemas sobre las teorías y la necesidad de estudios más adelantados, concluimos que una teoría basada en la influencia vasca y en la evolución fonética es más probable en el paso de la *f*- a la *h*- en castellano, y al mismo tiempo estamos de acuerdo con la opinión de Echenique Elizondo (1987: 96): "en cualquier caso, la abundantísima bibliografía en torno al tema, con precisiones continuas, nos hace sospechar que la explicación verdadera de este hecho no está aún suficientemente alcanzada".

BIBLIOGRAFÍA

ABE, Mitsuo [阿部三男] (1976), 「F > h とバスク基層説」, *Hispánica*, 20, 18-35.

----- (1988), 「再び F > h とバスク語基層説について」, *Hispánica*, 32, 1-15.

ALARCOS LLORACH, Emilio (1968 [1950[1]]), *La fonología española*, 4ª ed., Madrid: Gredos.

----- (1992), «De F- latina en castellano», *Actas del XVIIe Colloque Internacional de Lingüístique Fontionnelle*, 31-39.

ALONSO, Dámaso (1962), *La fragmentación fonética peninsular*, Madrid: CSIC.

ALVAR, Manuel (1976), *El dialecto riojano*, Madrid: Gredos.

----- (dr.) (1991 [1961-1972[1]]), *Altas Lingüístico y Etnográfico de Andalucía* (= ALEA) (coords., Gregorio SALVADOR y Antonio LLORENTE), Madrid: Arco Libros.

ARIZA VIGUERA, Manuel (1989), *Manual de fonología histórica del español*, Madrid: Síntesis.

BALDINGER, Kurt y RIVAROLA, José Luis (1971), «Lingüística tradicional y fonología diacrónica», *Anuario de Letras*, 9, 5-49.

BERTOLDI, Vittorio (1931), «Problèmes de Substrat», *Bulletin de la Société de Linguistique*, 32, 139-141.

BOYD BOWMAN, Peter (1953), «Sobre la pronunciación del español en el Ecuador», *NRFH*, 7, 221-223.

BUCK, Carl Darling (1933), *Comparative grammar of Greek and Latin*, Chicago and London: The University of Chicago Press.

CATALÁN, Diego (1946), «Un límite lingüístico» (coord. Álvaro GALMÉS DE FUENTES), *RDTP*, 2, 196-239.

----- (1989), *El español: Orígenes de su diversidad*, Madrid: Paraninfo.

COROMINAS, Joan (1972), *Tópica hespérica: estudios sobre los antiguos dialectos, el substrato y la toponimia romances*, tomo II, Madrid: Gredos.

----- (1980-1991), *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico* (coord. José A. PASCUAL), Madrid: Gredos.

DEFERRARI, Harry (1936), «Notes on the value of H in old Spanish», *Hispanic Review*, 4, 182-186.

ECHENIQUE Elizondo, María Teresa (1987 [1984¹]), *Historia lingüística vasco-románica*, 2ª ed., Madrid: Paraninfo.

ELCOCK, William Denis (1938), *Affinités phonétiques entre l'aragonais et le bearnais*, Paris: Droz.

----- (1953-55), «Sustrats phonétiques dans les parles romans des Pyrinees», *Actas VII CILFR*, 695-697.

ENGLISH, James Henry (1926), *The alternation of H and F in Old Spanish*, New York: Instituto de Las Españas.

GARCÍA DE DIEGO, Vicente (1959 [1946¹]), *Manual de dialectología española*, 2ª ed., Madrid: Cultura Hispánica.

GARCÍA GONZÁLEZ, Francisco (1981-82), «La frontera oriental del asturiano: razones históricas de su fijación», *Archivum*, 31-32, 337-355.

GAVEL, Henri (1920), *Eléments de phonétique basque*, Paris: Champion.

GÓMEZ-MORENO, Manuel (1949), *Misceláneas: historia, arte, arqueología*, Madrid: CSIC, Instituto Diego Velázquez.

GONZÁLEZ OLLÉ, Fernando (1980), *Lengua y literatura españolas medievales: textos y glosario*, Madrid: Ariel.

HARA, Makoto [原誠] (1987),「スペイン語通時音韻論の二大問題（上)」, *Area and Culture Studies*, 37, 1-25.

HOZ, Javier de (2009), «El problema de los límites de la lengua ibérica como lengua vernácula», *Palaeohispánica*, 9, 413-433.

IORDAN, Iorgu y MANOLIU, Maria (1972), *Manual de Lingüística Románica (Revisión, reelaboración parcial y notas por Manuel ALVAR)*, Madrid: Grados.

JESPERSEN, Otto [オットー イェスペルセン] (1981),『言語〈上〉—その本質・発達・起源』(原題: *Language*；三宅鴻訳), 東京：岩波書店.

JUILLAND, Alphonse Georges y HAUDRICOURT, André-Georges (1949), *A. Essai pour une histoire structurale du phonétisme français*, Paris: Librairie C. Klinclsieck.

KENT, Roland Grubb (1932), *The sounds of Latin: a descriptive and historical phonology*, New York: Kraus Reprint Corporation.

LAPESA, Rafael (1985), «Más sustituciones de /f/ inicial por otras labiales, y viceversa, en español primitivo», *Serta Gratulatoria in Honorem Juan Regulo*, 1, 401-404.

----- (2012 [2008[1]]), *Historia de la Lengua Española*, 3ª ed. (Nueva Biblioteca Románica Hispánica), Madrid: Gredos.

LÁZARO CARRETER, Fernando (1949), «F > h, ¿fenómeno ibérico o romance?», *Actas de la Primera Reunión de Toponimia Pirenaica*, 165-176.

MALMBERG, Bertil (1958), «Le passage castilla *f-* > *h-* perte d'un trait redondant?», *Mélanges Petrovici*, 337-343.

MARTINET, André (1974), *Economía de los cambios fonéticos: tratado de fonología diacrónica* (título original: *Economie des changements phonétiques. Traité de phonologie diachronique*; trad. de Alfredo DE LA FUENTE ARRANZ), Madrid: Gredos.

MARURI, José Ramón (1986), «F- > h-. Discusión de la hipótesis geológica de Gregorio Salvador», *RILCE*, 1, 55-66.

MENÉNDEZ PIDAL, Ramón (1985 [1904[1]]), *Manual de gramática histórica española*, 18ª ed., Madrid: Espasa-Calpe.

----- (1999 [1926[1]]), *Orígenes del español, Estado lingüístico de la península ibérica hasta el siglo XI*, 11ª ed., Madrid: Espasa-Calpe.

MICHELENA, Luis (1985[1961[1]]), *Fonética histórica vasca,* 3ª ed., San Sebastián: Seminario de Filología Vasca "Julio de Urquijo".

NARO, Anthony Julius (1972), «On f > h in Castillian and Werstern Romance» y «A Reply», *ZRPh,* 88, 435-447 y 459-462.

ORR, John (1936), «F > H Phénoméne ibére ou roman?», *Revue de Linguistique Romane XII*, 10-35.

PENNY, Ralph John (1972), «The re-emergence of /f/ as a phoneme of Castilian», *ZRPh*, 88, 463-482.

----- (2006 [1993[1]]), *Gramática histórica del español* (título original: *A history of the spanish language*; trad. de José Ignacio PÉREZ PASCUAL y María Eugenia PÉREZ PASCUAL), 2ª ed., Barcelona: Ariel.

PENSADO, Ruis Carmen (1993), «Sobre el contexto del cambio F > h en castellano», *RPh*, 47, 147-176.

QUILIS MERÍN, Mercedes (1996), «La F- inicial latina en los orígenes es de la lengua española (I)», *ASJU*, 30, 385-454.

ROHLFS, Gerhard (1985), *Diccionario dialectal del Pirineo aragonés*, Zaragoza: Institución "Fernando el Católico".

SALVADOR, Gregorio (1982), «Hipótesis geológica sobre la evolución F- > h», *Introducción Plural a la Gramática Histórica*, Madrid: Cincel, 11-21.

SCHRIJNEN, Jos (1922), «Italische Dialektgeographie», *Neiphilologus*, 7, 223-239.

TOVAR, Antonio (1954), «Sobre el planteamiento del problema vasco ibérico», *Archivum,* 4, 220-231.

----- (1961), *The ancient languages of Spanish and Portugal*, New York: S.F. Vannis.

WARTBURG, Walther von (1952), *La fragmentación lingüística de la Romania* (título original: *Die Ausgliederung der romanischen Sprachräume*; trad. de Manuel MUÑOS CORTÉS), Madrid: Gredos.

ZAMORA VICENTE, Alonso (1967 [1960[1]]), *Dialectología española*, 2ª ed., Madrid: Gredos.

ロルカの死と日本における作品解釈

森　直香

0. はじめに

日本におけるフェデリコ・ガルシア・ロルカ作品の受容は、1952年に劇作家の内村直也がロルカ作品の紹介記事を雑誌『悲劇喜劇』[1]に寄稿して以降、本格化した。1950年代には数々の作品が翻訳され、ロルカに関する記事も多く発表され、また数多くの戯曲が上演された。1958年には日本語初の『選集』も出版された[2]。その後もロルカは確実に日本人読者を魅了し、1973年から1975年にかけては初の『全集』が出版された[3]。このようにロルカはわずかな期間に日本においてスペイン文学を代表する存在となったが、日本の読者がロルカ作品に感じた主な魅力としてはスタイルの新しさ、詩的言語、スペイン性、世界観などが指摘できる[4]。特にその世界観、中でも死生観は注目され、たとえばロルカ研究の第1人者で『選集』の編者でもある小海永二は受容初期にあたる1956年の時点でロルカ作品の主な主題として「死への情熱と恐怖」を挙げ[5]、さらにその5年後にも、「死への嗜好」をロルカ詩の主題として指摘している[6]。

1「ベルナルダ・アルバの家」6・7号、26-31頁。

2『ロルカ選集　第1-3巻、別巻』小海永二ほか訳、書肆ユリイカ。

3『フェデリーコ・ガルシーア・ロルカ 1917-1925』荒井正道ほか訳、牧神社、1973年。『フェデリーコ・ガルシーア・ロルカ 1926-1931』荒井正道ほか訳、牧神社、1974年。フェデリーコ・ガルシーア・ロルカ 1931-1936』荒井正道ほか訳、牧神社、1975年。

4これについては以下を参照のこと。Naoka Mori, "Japón y la muerte de Lorca: la creción de imagen trágica", Ricardo de la Fuente Ballesteros, Jesús Pérez Magallón y Francisco Estévez (eds.), *La tragedia del vivir: dolor y mal en la literatura hispánica*, Editorial Verdelís, Valladolid, 2014, pp. 231-248; Naoka Mori, "La recepción de *Bodas de sangre* en Japón", *Presencias japonesas: la interacción con Occidente en la literatura y las otras artes*, Ovidi Carbonell I Cortés (ed.), Ediciones Universidad de Salamanca y los autores, Salamanca, 2014, pp. 131-140.

5 小海永二「あとがき」『月とオリーヴの歌』(限定版)、国文社、1956年、246-247頁。

6 小海永二「ロルカ詩集　あとがき」『ロルカ詩集』(世界現代詩集 V),飯塚書店、1961年、246頁。

そして、日本人読者たち[7]はロルカ死生観に対して様々な解釈を試みていくが、その特色のひとつとして、ロルカ自身の死を作品解釈と結びつける傾向が存在することが挙げられる[8]。これは作者の伝記的事実が作品解釈に影響を及ぼしているという点で興味深い。本稿では、これに注目しそのような解釈を生み出した要因と解釈の変遷について論じる。具体的には、フランス人研究者フランソワ・ヌルシエの影響とロルカの死の真相への興味が結びついてこのような解釈が定着したと仮定し、ヌルシエの著作が日本人読者に与えた影響とロルカの死に日本人読者が抱いた興味を考察したうえで、ロルカ自身と作品を結び付ける解釈について年代順に検討しその内容と傾向を明らかにする。

ダムロッシュは、文学作品は、文学として読まれそして発祥言語と文化を超えてさらに多くの点で豊かになっていくものだと述べている[9]。本稿では、考察を通してロルカ作品が国境を越えてどのように豊かになっていったかを明らかにすることを目指す。

1. ヌルシエ『劇作家ロルカ』

本節ではロルカ自身の死と作品を結び付ける解釈がどこから生まれたのかを考察する。日本における出版物でそのような解釈が最初に現れるのは、1958 年出版の『ロルカ選集別巻』に収められたフランソワ・ヌルシエ「ロルカの秘密」[10]である。これは 1955 年にフランスで刊行されたヌルシエ『劇作家ロルカ』[11]の中のロルカの死に触れた 1 章を翻訳したものである。

---

[7] 本稿では、ロルカ作品に関する書評、論文、紹介記事等を分析し、それらの作者を読者と総称する。

[8] そのほか、ロルカは死を描くことによって生の輝きを強調したと考える、ロルカ作品では生と死の距離が近いと理解する、作品をスペイン的とみなす等が指摘できる。日本人のロルカ死生観の解釈については口頭発表「日本人読者の読むロルカの死生観」(京都イスパニア学研究会　第 22 回大会、2013 年 12 月 8 日、於　京都キャンパスプラザ) で扱った。このテーマについては別の機会にさらに掘り下げて論考したい。

[9] ディヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か』秋草俊一郎ほか訳、国書刊行会、2011 年、14 頁。

[10] 『ロルカ選集、別巻、ロルカ研究』小海永二編、ユリイカ、1958 年、111 - 130 頁。

[11] François Nourissier, *Federico García Lorca, dramaturge* (Collection Les grands dramaturges), L´Arche, Paris, 1955.

この研究書は日本でも大きな反響を呼んでおり、彼の解釈が日本人読者たちに大きな影響を与えた可能性は高い。原典の出版後まもなく『図書新聞』に以下のような紹介記事が掲載された。

> 注目すべきロルカ論　[フランス]　フランスの劇場では最近、反フランコのたたかいに参加して戦死した、現代スペインが生んだもっとも偉大な作家の一人、劇作家、詩人のフェデリコ・ガルシア・ロルカの作品がさかんに上演されて評判になっているが、今年になって今度はフランソワ・ヌリシエが、『大劇作家叢書』の一冊として、注目すべきロルカ論を発表した[12]

また、瀬田栄之助はこの研究書の反響の大きさについて、以下のように回想している。

> 戦後、ロルカに最初の豪華な祝祭の場を与えたのは、1955 年、フランソワ・ヌリシェによる『大劇作家叢書』中の「注目すべきロルカ論」であったと記憶する[13]。

さらに、渡辺淳「ロルカをめぐって」[14]、窪田般弥「ロルカの詩と劇について」[15]でもヌリシエへの言及がある。「ロルカの秘密」を収めた『ロルカ選集　別巻』の出版は 1958 年 11 月で、渡辺の文章は 1955 年に発表、窪田のものは雑誌『新劇』の 1958 年 9 月号に掲載されており、両者がフランス語原典に目を通していた可能性が高い。以上からも、ヌルシエの研究の日本人読者への影響の大きさがうかがえる。

---

[12] 『図書新聞』1955 年 3 月 26 日、4 頁。なお、ロルカは「反フランコのたたかいに参加して戦死した」とされているが、ロルカには内戦に参戦した事実はなく、これは事実誤認である。しかしながら、ロルカに内戦の犠牲者というイメージが定着しつつあったことがうかがえ興味深い。

[13] 瀬田栄之助「フェデリコ・ガルシア・ロルカ覚書」『近代文学』近代文学社, 1962 年 17 巻 6 号、1962 年、2 頁。

[14] 『新劇』1955 年、15・6 月号、74-81 頁。

[15] 『新劇』58・9 月号、1958 年、76-80 頁。

2. ロルカの死と国内外での反応

ロルカの死と作品を結びつけるヌルシエの解釈を受け入れる素地を作ったのは、ロルカの死の真相への根強い興味である。1936年8月16日の午後、友人ルイス・ロサレスの家にかくまわれていたロルカは、スペイン独立右翼連合（CEDA）所属の元国会議員、ラモン・ルイス・アロンソによって連行される[16]。ロルカは8月18日から19日にかけてビスナルの仮刑務所へ連行され、その後、アルファカルのフエンテグランデで処刑された。ロルカの死は世界中に衝撃を与え、共和派を擁護する人々には自由のための殉教とすら受け止められた。

そのいきさつやなぜ彼が連行され処刑されたのか、また右派の大物であるロサレス一家という後ろ盾がありながらなぜ処刑を避けられなかったのかなど、ロルカの死には多くの謎が残り、世界中の人々の興味を引いた。しかしながら、混乱を極めた内戦中はもちろんのこと、内戦後のフランコ独裁体制の下ではロルカに関する話題はある種のタブーであり[17]、長い間彼の死について調査はなされなかった。1950年代になると少しずつロルカ作品再評価の動きが見られ始め[18]、外国人研究者の手によりその真相を明らかにしようという試みがみられ

---

16 ロルカの死の経緯については以下を参照のこと。Ian Gibson, *Granada en 1936 y el asesinato de Federico García Lorca*, Brijalbo, Barcelona, 1979; Ian Gibson, *Vida, pasión y muerte de Federico García Lorca (1898-1936)*, Plaza and Janes, Barcelona, 1998.

17 たとえば、ミゲル・ルイス・カスティーリョ（Luis Miguel Castillo）は、1949~50年の学期中にグラナダ大学でロルカをしのぶ行事を企画し、多くの詩人を招待したが、これに応えたのはアレイクサンドレのみであったという。Agustín Penón, *Miedo, olvido y fantasía: Crónica de la investigación de Agustín Penón sobre Federico García Lorca (1955-1956)*, edición de Marta Osorio, Comares, Granada, 2000, pp. 114-115.

18 ロルカの『全集』が刊行されるのは1954年のことである（Federico García Lorca, *Obras completas*, recopilación y notas de Arturo del Hoyo, Aguilar, Madrid, 1954）。また、1956年に刊行されたアンヘル・バルブエナ『スペイン演劇史』の中ではロルカについて1章が割かれている（Ángel Valbuena Prat, *Historia del Teatro Español*, Editorial Noguer, Barcelona, 1956, pp.633-650）。さらに、その翌年のゴンサロ・トレンテ『スペイン現代演劇』には『ベルナルダ・アルバの家』への言及がある（Gonzalo Torrente Ballester, *Teatro español contemporáneo*, Ediciones Guadarrama, Madrid, 1957, pp. 111- 126）。しかし、『全集』には全作品が収録されていたわけではなく、また『スペイン演劇史』『スペイン現代演劇』ではロルカの死については全く触れられておらず、まだロルカについて完全に自由には語ることのできる雰囲気ではなかったことがうかがえる。

始めた。イギリス人ジェラルド・ブレナンは1950年にグラナダでロルカが埋葬された場所を捜し歩き、その一部始終を『素顔のスペイン』の中の1章「グラナダ」に記した[19]。また、スペイン系アメリカ人作家アウグスティン・ペノンも、1955年から1956年にかけてロルカの死についてグラナダでインタビューを中心とした調査を行ったものの、協力者たちへの不利益を恐れ、研究成果を発表することはしなかった[20][21]。そのほか、1951年にはフランスの文芸新聞『ル・フィガロ・リテレール』にクロード・クーフォンによる調査結果が掲載され[22]、1956年にはジャン＝ルイ・ショーンベルグの『フェデリコ・ガルシア・ロルカ、人と作品』が発表されている[23]。

このように少しずつ真相を明らかにしようとする試みが始まったが、ロルカについて公の場で論じることができるようになるにはフランコが死去する1975年まで待たなければならなかった。ロルカの死の真相を決定的に明らかにしたのはギブソン『ロルカ・スペインの死』であった[24]。原典はスペイン語であるが、1971年にパリで発行され

---

19 Geraldo Brenan, *The Face of Spain*, Turnsile Press, London, 1950.この著書の部分訳は『ロルカ選集　別巻』(前掲書)に掲載され、全訳は『素顔のスペイン』(幸田礼雅訳、新評論、1998年)として出版されている。

20 その後、この研究はペノンの友人ウィリアム・レイトンから原稿を託されたマルタ・オソリオの手によって、2000年に出版された。オソリオによれば、1980年にレイトンはペノンの原稿をイアン・ギブソンに託したが、ペノンの研究成果が出版されることはなかった。さらに、ギブソンは1985年、1987年にペノンの原稿の未発表の記録と写真を含んだロルカの伝記を発表したため、レイトンはギブソンに原稿の返還を求め、これをオソリオに託した。Agustín Penón, *op. cit.*, pp. XIII-XVIII.

21 当時の状況について、フェリックス・グランデは、ロルカ処刑に関する記録はフランコ政権によっては隠匿されていた上、政権への恐れから取材に協力してくれるグラナダ市民もほとんどおらず、いたとしても私心がまじっていたり、偏っていたり、虚偽の情報であったりと、調査が困難な状況であったと証言している。Félix Grande, *La calumnia*, Mondadori, Madrid, 1987, p. 219.

22 Claude Couffon, "Ce que fut la mort de Federico García Lorca", *Le Figaro Littéraire*, no. 278, 18 August 1951, Paris.

23 Jean-Luis Schonberg, *Federico García Lorca. L´homme-L´oeuvre*, Plon, Paris, 1956.ギブソンはこれらをブレナン「グラナダ」とともに1950年代における3つの重要な研究と位置付けている。Gibson, *Granada en 1936 y el asesinato de Federico García Lorca*, *op. cit.*, pp. 291-296.

24 *La represión nacionalista de Granada en 1936 y la muerte de Federico García Lorca*, Ruedo ibérico, París, 1971。

た。邦訳は1973年に刊行され大いに話題になった[25]。この著書は徹底的な先行研究の検討と現地調査に基づいており、これによってロルカの死に関する調査はひとつの区切りを迎えたといえる。

以上のように、ロルカの死の真相は多くの人の興味を引き、またさまざまな研究者が調査に取り組んできたが、未だに明らかになっていない事柄もある。そして、それが人々の興味をいっそう掻き立てているのであるが、この状況は日本においても同様である。日本でも初期受容期からロルカの死にも読者の注目が向けられた[26]。1950年代だけでも、ロルカの死に言及した出版物は外国の文献の翻訳で4点[27]、日本人によるものが6点あり[28]、その興味の高さがうかがえる。ロルカの死と作品を結びつける解釈の背景に作者自身の死への興味があったことは疑いない。

3. ヌルシエの解釈と日本人読者

本節ではヌルシエが「ロルカの秘密」の中でロルカの作品と死についてどのように述べているかを検討したうえで、日本人読者への具体

---

25 イアン・ギブソン『ロルカ・スペインの死』内田吉彦訳、晶文社、1973年。邦訳はスペイン語版からなされたが、邦訳出版と同年の5月に出版が予定されていた英語版に盛り込まれた新資料も付け加えられた。

26 これについては以下を参照のこと。森直香「初期受容期の日本におけるロルカの死をめぐる状況」『イスパニア図書』第11号、2008年、4-16頁。

27 パーブロ・ネルーダ「スペイン文学の三つの柱－チェコスロヴァキヤ作家同盟における講演－」坂井松太郎訳、『新日本文学』、1954年7月号、152-157頁。ジェラルド・ブレナン「ロルカの死の真相」入江佐枝子訳『ロルカ選集別巻、ロルカ研究』前掲書、175-192頁。ヌルシエ、前掲書。ジャン＝ピエール・シャブロル「グラナーダはロルカの暗殺者を発見した」小海永二訳、『ロルカ選集別巻、ロルカ研究』前掲書、193-214頁（ガルシーア・ロルカ『ロルカ全詩集』小海永二訳、青土社、1979年、418-435頁に再録）。

28 瀬田栄之助「痛ましいロルカの死－ロルカ研究への手引き－」*Más y menos*、15、大阪外国語大学、1955年、16-19頁。小海永二「ロルカ・その生涯」『ロルカ選集別巻、ロルカ研究』前掲書、1~21頁。菅井幸雄「－海外劇作家紹介－民衆の芸術家フェデリーコ・ガルシーア・ロルカ」『テアトロ』178・7月号、1958年、25-29頁。瀬田栄之助「民衆詩人G・ロルカ　選集出版にことよせて」『新読書』（新読書社）、251、1958年、40-41頁。長谷川四郎「ロルカの墓」『みすず』第1巻2号、1959年（『長谷川四郎全集　第一三巻』晶文社、1978年、125-127頁に再録）。瀬田栄之助「ガルシア・ロルカ人と作品（其の五）」『天理大学学報』天理大学人文学会、11（2）、1959年、20-36頁。

的影響について考察する。「ロルカの秘密」では『ドゥエンデのからくりと理論』を引用してロルカの死生観について解説した上で、その死について言及している。その解釈の第一の特色は、彼の死を宿命の死としていることである。

［前略］十年が過ぎ、今日では、ロルカの死を—情熱の衰えはさておき—前より確かになってきた展望の中に置き換えることも許されるだろうから、この間違いなるもの［ロルカの処刑］がわれわれには深い必然性の実現のように思われるということを、言っておきたい[29]。

ヌルシエは、ロルカの銃殺は「深い必然性の実現」、つまり起こるべくして起こった出来事であると述べており、ヌルシエは逃れることのできない運命の力を描いたロルカ作品と彼の死を重ねあわせているといえる。さらに、ロルカに直接手をかけたのはファシストであるが、それすらも宿命がなされるのに手を貸したに過ぎないと考える。

ファシストの警備隊は間違ってか、正しくか、一人の政治的な詩人を殺しえたわけではなく、一人の≪敵≫を除き去ることができたわけでもなかった。彼らは、敵を殺しはしたが、それによって、ただ、ロルカの宿命、彼らの定められた「掟て」の宿命を完成させたにすぎなかった[30]。

第二の特色は、ロルカが自らの死を作品の中で予言していたとしていることである。

［前略］ロルカの死は、始めは不思議な前兆として、続いては、刑の宣告として、彼の作品の各行に刻まれている[31]。

なお、ヌルシエはどの作品にどのような形で作者自身の死が予言さ

29 ヌルシエ、前掲書、127頁。
30 同上、127-128頁。
31 同上、127頁。

れているのかという具体的な説明はしていない。しかし、これがのちに日本の読者たちに様々な解釈の余地を与えることになった。これについては本節の後半で触れる。

第三の特色は、ロルカの処刑をできる限り政治イデオロギーから切り離そうとし、その理由を作品がやがて訪れる時代を否定していたからだとしていることである。

> ロルカの処刑は誤りであったといわれる。政治的な誤りとか、権力の過失とかいうのではなく、単なる間違いだったという点に注意しよう。人々は、彼の処刑を間違いか、その命令を何らかの誤解によるもの、と見做している[32]。

ヌルシエは、ロルカの銃殺は政治や権力とは関係ない「単なる間違い」によるものとする。さらに、彼はロルカの流した血は内戦によるものではないとすら主張する。

> 1936年には、死は道のりの終わりまで来ていた。この演劇の血は生命の血であり、女の苦悩を伴う血、最初の快楽の出発時にほとばしりでる血であった。戦争によって腐敗した血はそれとは全く無縁である。彼の詩（ポエジー）の衝動の一つ一つ、彼の演劇の志向の一つ一つ、彼の短い生涯の歩みの一つ一つが、ようやく始まろうとしていた沈黙の秩序を否定していたが故に、ロルカは死ななければならなかった[33]。

ロルカの流した血は、「戦争によって腐敗した血」ではなく「生命の血」そして女性の苦しみの処女の血だとヌルシエは述べる。そして、ロルカの文学がやがて始まる「沈黙の秩序」の時代を否定していたがゆえにロルカは殺されたのだとしている。この「沈黙の秩序」はフランコ独裁体制を指していると考えられるが、ヌルシエはあえて政治色の濃い語を避け、このような詩的とすらいえるあいまいな表現を用い

32 同上、127頁。
33 同上、128-129頁。

ることでロルカの死の政治的意味合いを薄めようとしていると推察できる。

以上のように、ヌルシエは、処刑を行ったのはファシズム陣営であることを認めながらも、その事実から政治的な意味を極力取り除こうとし、ロルカが自らの作品の中で預言した悲劇的な死を迎え、宿命を成就したのだと受け止めている。彼の解釈は、作家の死を作品との関係で受けとめようとしている点で興味深い。さらに、自分の死ややがて訪れる独裁時代を予見し作品に表したという解釈は、作家としてのロルカと作品に神秘性すら与える。ヌルシエの著書への注目度を考慮すれば、彼のこのような解釈が日本人のロルカ観に少なからぬ影響を与えたと考えられる。

次にヌルシエの解釈が日本人読者に与えた具体的影響について年代順に検討する。直接の影響を確認できるのは第1節で挙げた1955年の渡辺淳「ロルカをめぐって」である。この文章は『レ・レットル・フランセーズ』(*Les Lettres Françaises*)に掲載されたヌルシエ『劇作家ロルカ』の抜粋を参照しており、その解釈の影響が色濃い。

> フランコの独裁の時期が訪れると[34]、ロルカ自身に、彼の作品のライトモチーフであった変身、死による生への変身というスペインの宿命が、まさに当然のこととして降りかかってきた。
>
> ロルカは死ななければならなかった。なぜなら彼の死、彼の演劇、彼の短い人生、すべてが沈黙の秩序の否定であったから[35]。

ロルカが作品の主題として扱った死が自らの身に降りかかるのは「当然のこと」であり「ロルカは死ななければならなかった」と渡辺が考えている点は、ヌルシエのロルカの死を宿命の死とする姿勢と重なる。また、ロルカが「沈黙の秩序」を否定したがゆえに死を迎えたとしているが、これもヌルシエの主張と合致している。

---

34 スペイン内戦ぼっ発直後ではなく「フランコの独裁の時期」にロルカに死が訪れたというのは事実とは異なる。

35 渡辺淳、前掲書、75頁。

さらに、ロルカの死と作品の関係については、彼が死をもって「作品のライトモチーフ」を体現したのだとしている。「死による生への変身というスペインの宿命」という表現を用いているが、同じ文章の中で「スペインにおいてほんとうに生きようとすれば、死ななければならない」「ロルカは詩を歌うことによって生を［中略］あざやかに描き出すことができたのであった」[36]と述べており、ロルカが死を描くことによって生の輝きを強調したと受け止めているといえる。渡辺はロルカが死を通じて生き生きとした生を表現したがゆえに、自らも死んでその生をより鮮やかなものに変えなくてはならないという宿命を負ったと主張しており、この点ではヌルシエの解釈をさらに発展させているといえる。

日本においてロルカの人生と作品を結び付ける傾向はその後も受け継がれていく。特に、ロルカ作品の中で自分の運命を予言しているという考えは根強かった。『ロルカ選集』の編者でもある小海永二は、1960年にロルカの死について、「予感された死」であり、「彼の死や劇の中に示されている死への予感がついに実現したのだった」と著している[37]。

ロルカの死を特定の作品に結びつける者もいる。大島正は1967年に以下のように述べている。

> 「イグナシオ・サンチェス・メヒーアス」の2年後の8月にロルカ自身に死神がやってきたのだが、親友の死を悼むこの悲歌はまるでロルカ自身のために書いたようなものであった。
>
> ロルカの詩には流血、死、月がからまりあいながらでてくる。そして背景にほの青い冷たい光が明滅するのを感じさせる。いずれも深く静かに死神にひきずられていくロルカ自身を予告していると言ってもいいであろう[38]。

---

36 同上、75頁。
37 小海永二「ロルカ」安藤次男ほか編『文学の基礎知識』、青洲出版社、1960年、242-243頁。
38 大島正「詩人論　ガルシア・ロルカ」『現代詩研究』196、1967年、18頁。

大島は『イグナシオ・サンチェス・メヒーアスの死を悼む歌』(*Llanto por Ignacio Sánchez Mejías*)をロルカ自身の死の運命を予言した作品だととらえた。同様に、詩人の長谷川四朗もこの作品をロルカの死と結びつける。

> 愛、性、死。さかんな生命の中で死を祝う国スペインであって、ロルカの作品には死をテーマにしたものが多い。彼は自分が殺されることを予感していたように思われる。友人である闘牛士の死を歌った『イグナシオ・サーンチェス・メヒーアスを弔う歌』には死への愛憎並存（アムビヴァバレンツ）というべきものが感じられる[39]。

なお『イグナシオ・サンチェス・メヒーアスを悼む歌』はロルカの詩の中でも日本で最も翻訳され、読まれているもののひとつである[40]。

その一方で、長谷川はロルカの作品と政治を切り離して考えようとしており、この点でヌルシエとの共通点がみられる。

> マヤコフスキーの詩には永続革命への呼びかけがあり、ブレヒトには革命の理論にうらうちされた機会詩が多い。ロルカにはこのような要素がない［中略］フランコ政権が殺したのは、ロルカ個人ではなかった。それは詩を、そして知性を殺してしまった[41]。

1970 年代にも同種の解釈はみられる。自らの死を作品の中に描いていることから、寺山修二はロルカを「二度死んだ詩人」と評する。

> ガルシア・ロルカは二度死んだ詩人であった。
> 一度目は、彼自身の死の中で死に、二度目は、スペインの内乱

39「ロルカ　みずからの言語・大衆の言語」『長谷川四郎全集　第 13 巻』晶文社、1978 年、175 頁（初出『詩の本Ⅲ　詩の鑑賞』筑摩書房、1969 年）。
40 そのほか、日本では『ジプシー詩集』(*Romancero gitano*)『ニューヨークの詩人』(*Poeta en Nueva York*)の人気が高い。
41 前掲書、172 頁。

で、フランコ軍に処刑されて死んだ[42]。

1980 年代では、天本英世がロルカの死と『イグナシオ・サンチェス・メヒーアスを悼む歌』を結び付け、彼の死とフィクションの中の死との類似性に触れている。

> 第四部「不在の魂」[43]は美しい。この詩がロルカ自身の死を悼んで誰かが書き綴った詩のようにしか思えない[44]。

また、別の機会に天本もロルカの死に政治的な意味合いを与えることを否定している。

> 決して左翼などというものではない、ただ自由思想の知識人という知識人がフランコ側ナショナリストの軍人及び警官または民間人によって虐殺されたのであり、ロルカもその 1 人に過ぎなかった［中略］ともあれ、ロルカが抵抗詩人であったから殺されたとか、左翼的であったから殺されたなどというのはロルカという詩人をよく理解していない、よく理解しようともしない人々の無責任な放言である[45]。

その一方で、天本はロルカの死を「不思議なもの」「伝説めいている」[46]と評して、その死に神秘的意味合いすら認めている。

おわりに

ここまで見てきたように、ロルカの死と作品を結び付けて解釈する傾向は受容初期から根強い。その背景にあるのは、ヌルシエの作品解

---

42 寺山修二「黙示録のスペイン―ガルシア・ロルカの死学」『牧神』マイナス 2 号、1974 年、16 頁。

43 作品は「角にかけられた死」(La cogida y la muerte)「流れる血」(La sangre derramada)「目の前の遺体」(Cuerpo presente)「不在の魂」(Alma ausente)の四部構成である。

44 天本英世「ロルカの死の伝説」天本英世『スペイン回想：「スペイン巡礼」を補遺する』、話の特集、1982 年、84-89 頁。

45 天本英世「ロルカについての誤解」同上、35 頁。

46 「ロルカの死の伝説」前掲書、27 頁。

釈の影響とロルカ自身の謎に包まれた死への興味である。

ヌルシエの解釈の特色としては、ロルカの死を宿命の死としていること、作品中で自身の死の預言がなされていると考えていること、そして処刑の理由を政治イデオロギーの問題から切り離し作品が「沈黙の秩序」を否定していたからだとしていることが挙げられる。日本人読者の中には直接、間接的にこの解釈の影響を受けている者が見受けられるが、特にロルカ作品が自身の死の預言であるとしている点、ロルカの死から政治色を取り除こうとする点にその影響が顕著である。中には、ヌルシエの解釈を発展させ、ロルカ自身の死の預言と特定の作品、『イグナシオ・サンチェス・メヒーアスを悼む歌』とを結びつけている解釈も見られた。これは、ヌルシエの解釈を出発点としているが、日本人読者独自の考えである。受容美学の提唱者ヴォルフガング・イーザーは読者による解釈を創作の一過程と位置付けたが、本稿で扱った解釈はまさに日本人読者とロルカ作品の対話によって生まれた新しい付加価値と言える。

ロルカ作品の翻訳を多く手掛けた会田由はロルカの名声はその悲惨な死に対する感傷によるものではなく、その文学的価値によるのだと繰り返し主張している[47]。また、前出の小海永二もロルカの死が人々の興味を惹いたことは認めつつも、その世界的名声は作品の価値ゆえであると強調している[48]。とはいえ、ロルカの悲劇的な死が作品解釈と結びついて、作家としてのロルカにある種の神秘性を与え、作品に新たな魅力を与えていることは間違いない。言い換えれば、ロルカの場合、作家自身の人生と作品が結びつくことで、作品をさらに豊かにしているといえるのである。

主要参考文献

García Lorca, Federico, *Obras Completas I-IV*, ed. de Miguel García-Posada, Círculo de Lectores, Galaxia Gutenberg, Barcelona, 1997.

---

47 会田由「ガルシーア・ロルカ断想」『新人会パンフレット』8、1958年、4頁。会田由「ガルシーア・ロルカについて」『俳優座』32・9月号、1958年、2頁。

48 小海永二「ロルカ、その生涯」『ユリイカ:詩と詩論』4(5)、1958、14頁。

Grande, Félix, *La calumnia*, Mondadori, Madrid, 1987.
Gibson, Ian, *Granada en 1936 y el asesinato de Federico García Lorca*, Brijalbo, Barcelona, 1979.
----------, *Vida, pasión y muerte de Federico García Lorca (1898-1936)*, Plaza and Janes, Barcelona, 1998.
Penón, Agustín, *Miedo, olvido y fantasía: Crónica de la investigación de Agustín Penón sobre Federico García Lorca (1955-1956)*, Marta Osorio (ed.), Comares, Granada, 2000.
イーザー、ヴォルフガング『行為としての読書－美的作用の理論－』轡田収訳、岩波書店、1982年。
天本英世『スペイン回想－「スペイン巡礼」を補遺する－』、話の特集、1982年。
大島正「詩人論　ガルシア・ロルカ」『現代詩研究』196、1967年、18頁。
小海永二「ロルカ」『文学の基礎知識』安東次男ほか編、青春出版社、1960年、242-243頁。
瀬田栄之助「フェデリコ・ガルシア・ロルカ覚書」『近代文学』1962年17巻6号、1-5頁。
ダムロッシュ、ディヴィッド『世界文学とは何か』秋草俊一郎ほか訳、国書刊行会、2011年。
寺山修司「黙示録のスペイン－ガルシア・ロルカの死学－」『牧神』、マイナス2号、1974年、16-17頁。
ヌルシエ、フランソワ「ロルカの秘密」『ロルカ選集　別巻　ロルカ研究』小海永二編、ユリイカ、1958年、111－130頁。
長谷川四郎「ロルカ　みずからの言語・大衆の言語」『長谷川四郎全集第13巻』晶文社、1978年、172-175頁。
渡辺淳「ロルカをめぐって」『新劇』15・6月号、1955年、74-81頁。
「注目すべきロルカ論」『図書新聞』1955年3月26日、4頁。

付記：本研究はJSPS科研費 24720155（若手B代表・森直香）の成果の一部である。

京都イスパニア学研究会
（京都外国語大学イスパニア語学科修士会）
大会プログラム一覧（1992－2016年）

第1回　1992年11月23日（祝）於　京都外国語大学国際交流会館

研究発表

1. 平井うらら「慶長遣欧使節のスペインにおける足跡」
2. 武藤節子「『パスクアル・ドゥアルテの家族』にみる現代スペイン語における状況補語－副詞の用法について－」
3. 岡本信照「中世スペイン語に於ける自動詞複合時制について」
4. 志柿禎子「Ángeles Mastretta, *Arráncame la vida* を読む」

記念講演

アンヘル・フェレー（京都外国語大学教授）　（演題の記録なし）

第2回　1993年11月20日（土）於　京都外国語大学国際交流会館

研究発表

1. 立岩礼子「メキシコ独立とアグスティン・イトゥルビデ」
2. 伊藤ゆかり「自由教育学院」
3. 志柿禎子「プエルトリコの女性開放問題について」
4. 敦賀公子「メソアメリカ文化とカカオ豆」

記念講演

木原太源（同志社大学教授）「ドン・フアン・マヌエル語録」

第 3 回　1994 年 11 月 23 日（祝）於 京都外国語大学国際交流会館

研究発表

1.　浅若みどり「ベラスケス絵画に見られる宮廷の道化師について」
2.　時田みどり“Simón Bolívar y San Martí”
3.　武藤節子「時を表す名詞句と前置詞句について」
4.　米田富彦「二元論、対立と中和」
5.　梅田美代子“《Altura de Macchu Picchu》en *Canto General*”

記念講演

尾崎明夫（立命館大学助教授）「アラゴン連合王国ハイメ 1 世の『業績録』についての若干の考察」

第 4 回　1995 年 11 月 25 日（土）於 京都外国語大学国際交流会館

研究発表

1. 安藤真次郎「ビーベス研究に関する一考察」
2. 塩見千加子「アンダルシア農民共同体の社会関係」
3. 蔵本邦夫「セルバンテスと漱石」

記念講演

樋口正義（龍谷大学教授）「*Libro de Buen amor* について」

第 5 回　1996 年 11 月 23 日（祝）於 京都外国語大学国際交流会館

研究発表

1.小山恵三「キューバ独立とホセ・マルティ」
2.牛島万「国際関係学・地域研究に対し歴史学は如何に貢献できるか－米墨関係史を例として－」
3.仲井邦佳「スペイン語比較構文の諸問題」
4.敦賀公子「メソアメリカ文化とカカオ豆」

記念講演 1

福嶌教隆（神戸市外国語大学教授）「接続法は何によって決まるか」

記念講演 2

大垣貴志郎（京都外国語大学教授）“José Pérez Méndez y Luis Donald Colosio: Los Portales de Oxchu y un Shakespeare”

第 6 回　1997 年 11 月 23 日（祝）於　京都外国語大学国際交流会館

研究発表

1. 伊藤亜矢「スペイン語の疑似分裂文と分裂文」
2. 高林則明「ペルーにおける自然主義小説について－メネンデス・カベーリョ・デ・カルボネーラとグロリンダ・マット－」
3. 山崎信三「『ドン・キホーテ』ことわざ考」

記念講演

角田哲康（常葉学園大学助教授）「ミゲル・デ・ウナムーノをめぐって」

第 7 回　1998 年 11 月 22 日（日）於　京都外国語大学国際交流会館

研究発表

1. 森直香「G・ロルカの『血の婚礼』における自然と人間の関係について」
2. 濱上亮「ラテン語の基礎語彙にいて」
3. 長瀬由美「キューバ独立を促した歴史的要因に関する一考察－植民地契約の破綻から第一次キューバ独立戦争へ－」
4. 山本匡史「融即と因果の変奏曲－メシカの俗信をめぐって－」

記念講演　（開催せず）

第８回　1999年11月23日（祝）於　京都外国語大学国際交流会館

研究発表

1. 梅田咲絵「アメリコ・カストロと『スペインの歴史的現実』－スペイン人解釈に関する一考察－」
2. 工藤亜希子「キューバにおけるカトリックの高揚とその重要性－ローマ法王の訪問を中心に－」
3. 土倉健司「アルゼンチンの口語スペイン語における二人称単数主格人称代名詞 vos の顕在化について」

記念講演

長谷川高生（近畿福祉大学）「ポストモダンにおける政治哲学の一側面」

第９回　2000年11月23日（祝）於　京都外国語大学国際交流会館

研究発表

1. 藤井美奈子「メキシコ青年文芸協会（El Ateneo de la Juventud）におけるホセ・バスコンセロスの位置づけ－メキシコ性の追求をめぐって－」
2. 杉田和歌子「オルテガ以降のスペインのアイデンティティーをめぐる論争の内的発展」
3. 池田和歌子「先スペイン期における先住民衣装の種類の変化と歴史的背景の関連性についての一考察－メキシコ・オアハカ地方サポテカ語集団の場合－」
4. 古田知之「ラモン・リュイにおけるアラブ世界の影響－思想的側面からの一考察－」
5. 橋本和美「過去分詞を用いた迂言法に関する一考察－結果の状態を表す表現方法－」
6. 上間篤「シルヤブとアル・アンダルス」

記念講演

加藤隆浩（三重大学教授）「インカ史劇『アプ・オリャンタイ』－アンデス植民地時代に演劇が伝えたもの－」

第10回　2001年11月23日（祝）於　キャンパスプラザ京都

研究発表

1.久保賢子「ロシオ大巡礼の聖母信仰に関する歴史的考察－信仰と余暇の両側面から－」
2.仲井邦佳「歴史統語論の可能性－también の形成、発展をめぐって－」
3.坂東省次「日本におけるスペイン学の歩み」

記念講演 1

大高保二郎（早稲田大学教授）「ピカソとスペイン美術史　―伝統と革新―」

記念講演 2

鼓直（法政大学名誉教授）「ペルーのランボー－Carlos Oquendo de Amat－」

第11回　2002年12月1日（日）於　キャンパスプラザ京都

研究発表

1.梅田美代子「パブロ・ネルーダの『ホアキン・ムリエタの栄光と死』－作品誕生から悲劇的アイロニーへ－」
2.福地恭子「聖ヤコブ伝説の形成に関する一考察」
3.小林由記子「フェミニズムの視点から見る現代ペルー社会の問題点－1980年代のリマ市周辺地域における女性組織を中心に－」

4.黒川崇「現代スペインにおけるバスク語の言語環境 - ナバラ自治州の言語政策を中心に－」
5.加藤さやか「イサベル女王の文化政策に見る精神の近代化」
6.宮下克子「ボルヘスと表現主義」

記念講演

楠貞義（関西大学教授）「ラテンアメリカの地域経済統合とヨーロッパ連合－リージョナリズムと経済危機の再来－」

第12回　2003年12月7日（日）於　キャンパスプラザ京都

研究発表

1.村田真喜子「ヌエバ・エスパーニャにおける藍の商業化について－18世紀後半を中心に－」
2.安田圭史「スペイン内戦におけるジャック白井のイデオロギーとその行動－ハリー・フィッシャーの証言を通して－」
3.三木一郎「『省略』の用法の体系と問題点について」
4.塩見千加子「現代アンダルシアのアグロタウンの社会－セビーリャ県オスーナ市の事例より－」

記念講演

吉田彩子（清泉女子大学教授）「Luis de Góngora “Soledades”の生成－第一部 serranas の描写を中心に－」

第13回　2004年12月5日（日）於　キャンパスプラザ京都

研究発表

1.中村多文子「アルフォンシーナ・ストルニィの詩にこめられた郷愁と母なるものについての一考察」
2.鈴木しのぶ「日本人学習者のスペイン語習得における Processing Instruction の有効性」

3.久保賢子「ロシオ巡礼におけるアルモンテ村人のアイデンティティーに関する一考察」
4.森直香「『血の婚礼』における色彩のメタファーに関する一考察」

記念講演

小林一宏（上智大学教授）「レコンキスタからコンキスタへ。歴史の連続性」

第14回　2005年12月4日（日）於　キャンパスプラザ京都

研究発表1

1.池田玲子「ボリビア 1994年教育改革における先住民教育の成長－異文化間バイリンガル教育と識字教育を通じて－」
2.ベナビデス共子"El habla culta de la Gran Área Metropolitana de Costa Rica, de acuerdo con el *Proyecto de estudio coordinado de la norma lingüística culta del español hablado en las principales ciudades de Iberoamérica y de la Península Ibérica*, estudio promovido y vigilado por el PILEI"
3.長尾直洋「ラテンアメリカをめぐる＜他者認識＞に関する一考察－大航海時代から植民地時代を中心に－」

記念講演1

José Corredor Matheos（スペイン現代美術評論家・詩人）"Pintura y poesía"

研究発表2

4.敦賀公子「中米におけるナワ系言語の分析についての一考察－16・17世紀の史料より－」
5.太田靖子「ホセ・フアン・タブラーダ－日本の俳句にもっとも近づいたメキシコの詩人－」

記念講演 2

碇順治（日西翻訳研究塾主宰、清泉女子大学ほか兼任）「スペインの民主化とスアレスの業績を考える」

第 15 回　2006 年 12 月 10 日（日）於　キャンパスプラザ京都

研究発表

1. 入山慎一「ジブラルタル問題をめぐる新たな展開－スペインの対ジブラルタル政策と三者間会談における一試論－」
2. 梅田美代子「チリ日系社会－現地からの報告－」
3. 牛島万「2006 年アメリカ合衆国におけるメキシコ人不法移民排斥運動の背景と影響」

記念講演

加藤薫（神奈川大学教授）「アストランの発想－メキシコ系アメリカ人からチカーノへ－～我々が国境を非合法的に越えたんじゃない。国境が不当に我々を分断しただけだ～」

第 16 回　2007 年 12 月 9 日（日）於　キャンパスプラザ京都

研究発表

1. 三浦知佐子「『ドン・キホーテ』におけるサンチョ・パンサ－その重層性についての一考察－」
2. 朽木利家「パブロ・ネルーダーイメージに関する一考察－」
3. 二宗美紀「スペイン語コーパスと分析プログラムを利用した語彙指導の提案－スペイン語教育への一提案－」

記念講演

戸門一衛（神田外語大学教授）「スペイン政治経済最新情勢－新たなる地平－」

第 17 回　2008 年 12 月 14 日（日）於　キャンパスプラザ京都

Mesa Redonda「第二外国語としてのスペイン語教育について」

報告者　敦賀公子、安藤真次郎、福地恭子

記念講演

池田実（日本大学教授）「比較のなかのスペイン憲法史」

第 18 回　2009 年 12 月 13 日（日）於　キャンパスプラザ京都

Mesa Redonda「スペイン・ルネサンス再考－言語・思想・歴史の観点から－」報告者　岡本信照、安藤真次郎、立岩礼子

記念講演

大越翼（上智大学教授）「ユカタン・マヤ村落内における先住民の社会的空間の創成と拡大」

第 19 回　2010 年 12 月 5 日（日）於　キャンパスプラザ京都

Mesa Redonda「文学作品の翻訳について　―小説・戯曲・詩の場合―」報告者　太田靖子、梅田美代子、森直香

記念講演

松森奈津子（静岡県立大学講師）「秩序と正義－インディアス問題にみる他者認識の変遷－」

第 20 回 2011 年 12 月 3 日（日）於　京都外国語大学国際交流会館

Mesa Redonda「ICT を活用した授業について」

報告者　立岩礼子、福地恭子、坪田康

記念講演 1

柳原孝敦（東京外国語大学教授）「見えないものを記憶する－ロベルト・ボラーニョとメキシコの 68 年－」

記念講演 2

雪山行二（和歌山県立近代美術館長）「ゴヤの独創性とは何か」

第 21 回　2012 年 12 月 1 日（日）於　キャンパスプラザ京都

Mesa Redonda「スペイン語圏における都市の諸相：芸術（セビーリャ）、文学（ブエノスアイレス）、歴史（ジブラルタル）からの考察」報告者　西洞院遥美、中村多文子、入山慎一

記念講演

深澤安博（茨城大学教授）「20 世紀前半のスペイン政治・社会と植民地モロッコ－モロッコ「平定」期を中心に－」

第 22 回　2013 年 12 月 8 日（日）於　キャンパスプラザ京都

Mesa Redonda「受容から読むスペイン文学：セルバンテス、センデール、ロルカ」報告者　三浦知佐子、小林由香里、森直香

記念講演

柳沼孝一郎（神田外語大学教授）「スペイン語教育の現状と展望」

第 23 回　2014 年 12 月 21 日（日）於　キャンパスプラザ京都

研究発表

1. 植村まどか「先コロンブス期の中米南部（中間領域）における祭祀メタテに関する一考察－使用痕と出土分布・出土状況の考古学的分析から－」
2. 吉野達也「メキシコにおける地方からの民主化－ハリスコ州の事例－」
3. 二宗美紀「スペイン語数量詞 todos の位置について－情報構造の観点から－」
4. 岡本信照「二重語（dobletes）からみたスペイン語の語彙体系」

記念講演

黒田龍之助（スラブ言語学者）「逆さまのスペイン語、裏返しのロシア語」

第 24 回　2015 年 12 月 12 日（日）於　キャンパスプラザ京都

研究発表

1. 三島庸平「カスティーリャ語におけるラテン語語頭音 F-の脱落」
2. 村上寿英「口語スペイン語における por favor の用法研究－スペインのテレビドラマのセリフから－」
3. 長尾直洋「移民・カボクロ・先住民－ブラジルにおける民族イメージに関する一考察－」

ワークショップ

福地恭子「スマートフォンアプリ LINE を用いた遠隔地間交流システム構築の試み」

記念講演

樺山紘一（印刷博物館館長、東京大学名誉教授）「大印刷時代のイベリア」

第25回　2016年12月10日（土）於　キャンパスプラザ京都

研究発表

1. 川本 直美「聖像を「見ること」と「触ること」についての一考察 ― メキシコ西部村落における宗教実践を事例に―」
2. 吉野達也「メキシコの地方選挙における政党システムの変動－1990年代を中心に－」
3. 二宗美紀「スペイン語およびバスク語における類型論的アプローチ－繋辞動詞を中心に－」
4. 平井うらら「日本におけるフェデリコ・ガルシア・ロルカの作品の受容－戦後における受容の変遷－」

記念講演

奥野良知（愛知県立大学教授）「カタルーニャの独立へ向けた『プロセス procés』の経緯と現状」

編集後記

スペイン・イヤーと呼ばれた1992年、私たちの研究会は「京都外国語大学イスパニア語学科修士会」（通称：修士会）として発足しました。その後、2014年度から「京都イスパニア学研究会」と名称を改め、今年で創設25周年を迎えました。

毎年12月に京都で大会を開催し、そこでは会員の研究発表に加え、外部から著名な研究者を招いて講演会を開いてきました。25年間一度も休むことなく大会を続けてこられたことは、講演者の皆さま、会員の方々の協力があってのことと思います。

会の創設から最初の15年間は、研究誌としてREHKを発行してまいりましたが、会員数の減少など諸般の事情から第15号を最後に休刊いたしました。そのREHKをこのたび「創設25周年記念論文集」という形で復刊し、ここにお届けできたことを大変嬉しく思います。12本の投稿があり、査読の結果8本の論文を掲載することになりました。また記念号ということで、過去25回分の大会プログラムを掲載しております。本当に多くの研究発表、そして講演会を開催してきたと改めて感じさせられます。

私たちの会員の大半は、大学でスペイン語教育に従事しております。大学の教壇に立つということは、教育者の面だけではなく、研究者としての面も要求されます。研究者として成長することが、教育者としての成長につながるということを忘れてはなりません。その研究成果の発表の場として「京都イスパニア学研究会」を今後も継続し発展させることができたらと思う次第です。

（安藤真次郎）

R E H K

Revista de Estudios Hispánicos de Kioto

No. 16
Volumen conmemorativo del XXV aniversario

Artículos:

La concepción del hombre en la España del siglo XVI: una reflexión en la obra *Diálogo de la dignidad del hombre* de Pérez de Oliva ……Shinjiro ANDO (1)

El pensamiento pedagógico de Pedro Simón Abril y la apología de la lengua vulgar: en torno a la epístola destinada a Felipe II ……Shinsho OKAMOTO (21)

El Segundo Imperio Mexicano a partir de algunas cartas de sus emperadores ……Reiko TAʻEIWA (45)

Desarrollo de los conceptos "endocentrismo/exocentrismo" en la sintaxis española: propuesta de una clasificación en "monocentrismo/pluricentrismo/bicentrismo"……Kuniyoshi NAKAI (69)

Algunas consideraciones acerca de la representación de los gigantes hecha por Francis Drake ……Naohiro NAGAO (97)

Un estudio contrastivo de los verbos *ser / estar* en español e *izan / egon* en euskera ……Miki NISHU (117)

El cambio de F-> *h*- en castellano: la evolución fonética y el sustrato del vasco-íbero ……Yohei MISHIMA (139)

La muerte de Federico García Lorca y las interpretaciones en Japón ……Naoka MORI (167)

Apéndice:

Programas (1992 – 2016) …… (181)

2016
Asociación de Estudios Hispánicos de Kioto